

---

Dragon Tail

～しっぽをかむりゅうのおはなし～

ぼうえんではいる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Dragon Tail

くしっぽをかむりゅうのおはなし

### 【Nコード】

N7460N

### 【作者名】

ぼうえんでいる

### 【あらすじ】

『平和な国を突然襲った竜。苦しむ人々の嘆きを聞いて、一人の魔法使いが竜に戦いを挑んだ。不死身で無敵の竜を倒す、魔法使いの秘策とは……』

Dragon Tailは、オムニバス式の童話風ファンタジーです。

一話完結型ですが、第一話から順番に読んでいただいた方が、一番楽しめると思います。

（長くなりすぎたあらすじと作品紹介を分けました。作品本文は、毎週水曜日更新（予定）です！）

## 各話あらすじ

『Dragon Tail ぐしっぱをかむりゅうのおはなし』

(完結済み)

平和な王国を恐ろしいドラゴンが襲いました！ 家畜を奪い、畑を焼き、好き放題に暴れる竜。

しかも、この竜は不死身の身体を持ち主だったのです。

人々が絶望に沈もうとしていたころ、お百姓さんの嘆きを聞いた、一人の魔法使いが立ちあがりました。

決して殺せない、不死の竜を倒すその方法とは

『A Love Story ぐかいぶつのころしかた』 (完結済み)

母の命と引き換えに生まれ、『死』を名付け親に持つ姫君。

黒い憎しみの炎にかられて、人間を食べる名前のない怪物。

奇妙な運命の糸に導かれるままに、二人は出合い、そして

これは愛の物語。

許されない、残酷な恋のお話。

『Wish Master ぐいさましいちびのおひめさま』

(連載中)

可愛いオパール姫は、子猫ほどの大きさしかない、小さなお姫さま。

お母さまはお姫さまのことが心配で、とうとう娘をイバラの塔に閉じ込めてしまいました。

しかし、元気なオパール姫は、この程度でくじける女の子ではありません。

ある日、魔法のイバラの塔を抜け出して、勇ましくも竜や怪物を退治する旅に出かけたのです。

体は小さくても、ガッツはでっかい！

さあいけ、それいけ、そこをのけ！

お姫さまのお通りだ！

Dragon Tail

くしっぽをかむりゅうのおはなし

第一話(前)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/sst  
/sst.php?act=dump&app:cate=ori  
ginal&app:all=21573&app:n=0&am  
p:count=1
```

山と湖に囲まれ、水と森に恵まれた土地に、美しい平和な王国がありました。

お百姓さんたちはみんな働き者で、商人たちは頭が回り、お大臣やお役人たちは（ときおりわいろを受け取ることもありましたが）おおむねまじめに仕事をこなしておりました。

人々はめぐる季節ごとに大地の恵みと自分たちの幸運に感謝し、穏やかな日々をすごしておりました。

しかし、ある日、平和な日々が突然終わりを迎えました。恐ろしい竜が、王国へやってきたのです。

この竜は鷹の翼にライオンの爪を持ち、その鱗は鉄のように硬く、口から鋼鉄を溶かすほどの火を吐くことが出来ました。

不死身の上に無敵で、その上たいそうな乱暴者でした。

竜がやってきてから、一日と経たぬうちに、それまで笑い声の耐えなかった王国は、悲鳴や嘆きの声に満たされました。

竜はお百姓さんたちから家畜を盗んで畑を焼き、商人たちから宝石を奪っては自分の鱗に埋め込んで飾り立てました。

さらに悪いことに、この竜は城壁を越えて、街の中に入っては、よく太った人間を一人、二人とさらって食べてしまうのでした。

怒り心頭に達した王さまは、王国のうちと外から、勇者を募りました。

竜を退治したものには、豊かな王国の半分と王さまの娘が与えられることになっていましたので、お城の庭はたちまち、鏡のように輝く鎧や剣で武装した戦士たちで一杯になりました。

しかし、竜が火を噴くと銀色の鎧兜は真っ黒に焼け焦げ、立派な戦士たちはむき海老のように殻をむかれて、食べられてしまいました。

次に王さまは、やり手の猟師たちを集めました。

猟師たちは罨と毒で竜を倒そうとしましたが、ずる賢い竜は罨を見破り、不死身の身体には毒も通じません。

最後に異国からやってきた怪しげな坊主が、竜を追い払うためのお祈りをしました。

だけど、いくら祈っても何も起こらず、怒った王さまは坊主を国から追い出してしまいました。

とうとう打つ手も策もなく、国中の人々が途方にくれたころ、一人の男が王国へやってきました。

男は畑の側で泣いている農民を見かけ、声をかけました。

「お百姓さん、一体なにをそのように嘆いているのですか？」  
「聞いてください、旅のお方」農民は顔を上げて言いました。「あの悪い竜が、おらの村へやってきて悪さをしたのです。あんちくしょうは、おらの自慢の牛を全部食っちゃった上に、あんなものを残していったんです！」

農民の指差すほうに目を向けると、なるほど、家畜小屋には骨が転がり、丹精込めて耕した畑には山のように大きな、竜のふんが残されていました。

男は村の惨状をつぶさに目の当たりにすると、慰めるように農民の肩に触れて、

「なるほど、貴方がたの事情は、よく分かりました。その竜が毎朝、



どの方角から飛んでくるか、教えてください。私は、貴方がたの悩みを取り除いてあげましょう」

「いけません、旅のお方！ お気持ちはありがたいですが、あの竜は不死身の化け物です。今まで数え切れないほどの勇者がやってきましたが、みんなあいつに食べられてしまいました」

農民はなんとか旅人を引きとめようとしたのですが、男の決心はかたく、最後には仕方なく、竜が毎日、東のほうから飛んでくることを教えてしまいました。

さて、ここで旅人の男の話をしておきましょう。

この男の瞳は夜の黒、髪は使い古された鋼の色、手足はほっそりとしていましたが、力に溢れていました。

顔立ちは見ると角度によって、若いようにも、また途方もなく年老にしているようにも見えました。

男は地上にある人間のすべての言葉を知っていました。

また、獣の言葉や木々の言葉、風や水の言葉までも心得ていました。

そう、旅人の男は魔法使いだったのです。

男は、農民に教わったとおり、東にある山に登り、その頂上に腰掛け、じっと待ちました。

夜が来て、また朝がやってきました。

東の空がばら色に染まり始めたとき、太鼓のような羽ばたきの音が聞こえ、太陽よりも早く真っ黒で大きな影が地平線から現れ、一直線に王国目指して飛んできました。

魔法使いは、恐ろしい竜がまつすぐ自分のほうへ飛んでくるのを見ると、両手を挙げて叫びました。

「竜よ、竜よ、私と勝負をしないか！」

竜は突然、耳に飛び込んできた声に驚き、羽ばたきをとめました。見下ろせば、生意気にも小さな人間が、こちらを挑戦してくるではありませんか。

「なんだ、おまえは？　ちびの人間が、俺さまになんのようだ？」  
「竜よ、か弱い人間を相手に暴れまわるのも飽きただろ？　私と力比べをしないか。負けたほうが、勝ったほうの言うことをなんでも聞く、というのはどうだ？」

「ばあつ！」、と竜は口から火の粉を吹いて笑いました。「なら、今日の朝ごはんは、おまえで決まりだ！」

その言葉が開戦の合図になりました。

竜は翼をたたむと、弓から放たれた一本の矢のように魔法使いめがけて急降下しました。突き出された爪と牙が、残酷な光を放ちます。

ところが、魔法使いが土の言葉を口にすると、山肌を割って大地の底から、この世で最も硬い金属が現れ、壁となって竜の爪を防ぎました。

竜は怒りに震えると、口からものすごい勢いで火を吐き出しました。

竜の火は鉄をも沸騰させ、この世のどんな金属でも防ぐことはできません。

しかし、魔法使いは王国を囲む湖から、たくさんの水を呼び出し、自分の身を守りました。

半日の間、竜と魔法使いは戦い続けましたが、決着はつきませんでした。

とうとう、疲れた竜は、荒い息の中で言いました。

「はあ、はあ、な、なかなかやるじゃないか。だが、俺は疲れたし、腹も減った。今日はこのぐらいにして、明日決着をつける、というのはどうだ？」

「いいとも。では明日、この山のふもとでまた会おう」

次の日、日の出と共に、竜は大きな山を引き抜いて持ってきました。

その山を使って、魔法使いを押しつぶすつもりだったのです。

魔法使いは少しも慌てずに、かわいた風と太陽の光を送りました。

山は風と光に当たって、砂となり、竜の指からぼろぼろと零れ落ちました。

悔しがった竜は、その次の日、角から稲光を放つと、巨大な嵐を起こして、魔法使いに襲い掛かります。

魔法使いも雲を呼んで、竜の雷雲にぶつけました。二つの大きな雲はくっついて一つになりました。

すると抱えている水滴の重さに耐え切れずに、雲は雨となって全部、大地に降り注いでしまいました。

こうして、竜と魔法使いは何日も、戦いましたが、いつまで経っても決着はつかず、勝負はいつも引き分けに終わりました。

そうする内に、竜が来ないことに気づいた王さまたちが、様子を見にやってきました。

王さまは王国を竜から守ってくれた魔法使いに、自分の娘を与えようと思いました。魔法使いは断りました。

ならばと、たくさんの金貨を与えようと思いましたが、魔法使いは

これも断りました。

「王さま、わたしは竜を倒しても殺してもいけないので、報酬を受け取ることはできません。しかし、これからも貴方がたの国を、竜から守るために、この山のふもとにある土地をいただき、耕すことを許してもらえないでしょうか？」

王さまやお大臣たちは、魔法使いの無欲なことに驚き、喜んで彼に一番いい畑を送りました。

そのとき、畑と一緒に小さいけれども、綺麗ですみやすい家も与えました。

王さまたちが帰った後、一人だけ残った農民が魔法使いに聞きました。

「貴方ほど偉大な力の持ち主なら、あの竜を殺すことも出来たはずです。なぜ、そうしなかったのですか？」

魔法使いは微笑んで答えました。

「あの竜は、大雨や洪水のようなものだ。雨や洪水をこの世から消すことができないように、誰もあれを殺すことは出来ない。だが、水路を引いて雨水を利用したり、堤防を作って洪水を防いだりすることはできる。わたしがしているのは、つまりそういうことなのだよ」

農民は魔法使いの言ったことが良く分からず、頭をひねりながら、家に帰りました。

それから、長い、長い時間が過ぎました。

平和な日々が続いたので、王国の人々はいつしか、竜に悩まされていたことを忘れてしまいました。

毎朝、東の空に見える稲光や火柱の由縁は忘れ去られ、竜と魔法使いはもう伝説の住民になっていました。

ただ、魔法使いが最初にやってきたあの村の人々は、まだ魔法使いたちのことを覚えていました。

なにしろ、ちよつと歩けば、本人たちに会うことができたのですから、忘れようがありません。

年月は魔法使いの姿もすっかり変えてしまいました。鋼色の髪は灰色に染まり、顔や手には時間の流れが刻み込んだ深いしわが残されていました

しかし、不死身の竜は時間の流れもなんのその。相変わらず、東の空から飛んできては、大きな声でこう叫ぶのです。

「魔法使いよ、魔法使いよ。今日も俺はやってきたぞ！」

すると魔法使いは、愛用の杖を取り、地面を揺るがし、空を割るような激しい戦いが始まるのです。

もう何百回、何千回も同じ戦いを繰り返しているのに、竜と魔法使いの勝負はいつも引き分けに終わるのでした。

今では、竜も昔のように大暴れをしたりすることは、少なくなりました。

魔法使いと全力をかけて戦う楽しみを知った後で、どうして爪楊枝のような剣を抱えた人形のような騎士たちと戦う気にもなれるのでしょうか？

毎朝、日の出と共にやってきては、魔法使いと思う存分戦い、午後には畑仕事をする魔法使いの側で、昼寝をすることが竜の日課になりました。

ある日、竜が昼寝から目を覚ますと、畑仕事で疲れた魔法使いが、鍬に寄りかかって一息ついているのが見えました。

このとき、竜ははじめて、魔法使いの髪の色が薄れ、腰が少し曲がり始めたことに気がつきました。

苦しそくに汗を流し、息を吐く魔法使いの姿を見て、竜の胸の中に今まで感じたことのない思いが生まれました。

「おい、魔法使いよ」竜は声をかけました。「俺たちは、もう長い付き合いだ。俺たちの勝負はまだついていないが、一つだけ、お前の願いごとを聞いてやるうじやないか」

しかし、その後、心配になって急に付け加えました。

「だけど、暴れるなどが、人間を食べるなどが、そんな願いは聞けないからな！」

魔法使いは布で滴る汗を拭くと、笑って言いました。

「私はそんなことをお前に願うつもりはないし、できるとも思っていないよ。私が頼むことは唯一つ、人でも獣でも、これからお前が食べる生き物の口をきけるのなら、最後に言葉を交わしてあげなさい。たった一言二言でも良い。そのものと話をしてやりなさい」

竜は疑わしげに魔法使いを見下ろした。

「ほんとに、そんなことでもいいのか？俺はその気になれば、金や

銀や珍しい宝をこの山よりも高く積み上げられるんだぞ?」

「私はそんな宝よりも、この緑に溢れた山のほうが好きだね。さて今、言ったとおりのことができるかい? それともお前さんには、ちと難しすぎたかな?」

魔法使いのいたずらっぽく輝く目を見た瞬間、竜の中で反抗心がむくむくと頭をもたげました。

「出来るに決まっているだろ。ぱくりと食べる前に、ちょっと話をすればいいのだろう? 簡単なことじゃないか!」

ところが、これがちっとも簡単なことではなかったのです。

次の日、竜は誓ったとおり、獲物を捕まえても、すぐには食べず、話をしようと思いました。

ところが、人間でも、言葉の分かる賢い動物も、竜の恐ろしい姿を見るなり、悲鳴を上げるか、或いは気絶をするか、とても言葉を交わすどころではありません。狩りは失敗続き、腹は立ちますが、お腹はぺこぺこです。

何度、約束を破って、一口に獲物を食べしまおうと思ったことでしょう。

しかし、誓いを破ろうとするたびに、「そらみたことか?」と言わんばかりの魔法使いの顔が頭に浮かび、竜は仕方なく気を失った哀れな生き物を捨て、次の獲物を探しに出かけました。

そして、百の山を走り、川を飛び越し、竜が最後に捕まえたのは、チビでデブで年寄りの小人でした。

「やめてくれ！ わしには二十歳を頭に、六十人の子供がおるんじや！」

「おい、待て。それは少しおかしいぞ。お前が一年に一人こさえたとしても、六十人子供がいるのなら、一番年上は六十歳じゃないのか？」

魔法使いと付き合っているうちに、少し頭がよくなった竜が聞きました。小人はしどろもどろになりながらも、答えます。

「そ、それはそのう、わしには女房が二人、いや三人おってなあ。それから、三つ子や四つ子、五つ子もおって……」

「なんだか、納得がいきませんが、一言以上言葉を交わしたのは間違いありません。」

年寄りの小人はあんまり美味しそうに見えませんが、ここはぜいたくを言わずに、我慢することにしました。

ところが、頭からまる呑みにしようとしたとき、竜の目に小人の真っ白な頭が飛び込みました。

「さいきん、魔法使いの髪がすっかり白くなったことを思い出して、竜のお腹から食欲が半分、どこかへ逃げてしまいました。」

ならばと、今度は小人をひっくり返して、足のほうから食べることにしました。

「やめてくれ！ おケツから食われるぐらいなら、一思いに頭から食べてくれえ！」

年寄りの小人は、短い足を振り回して暴れました。

すると竜は、魔法使いが少し足を悪くしたこと思い出して、残った半分の食欲も消えうせてしまいました。



哀しげにため息を漏らすと、しかたなく竜はちびの小人を放り出して、遠くへ飛び去っていきました。

そしてふたたび月日は巡ります。

春の上に夏が積み重なり、秋の上に冬が積み重なりました。

ぶあつく降り積もった時間のせいで、魔法使いの髪はとうとう雪のように白くなりました。

このころ、竜はもう昔のように暴れることはなくなりました。また魔法使いとの約束を守るために、人間を食べることもなくなりました。

魔法使いも、もう畑仕事に出かけることはなくなりました。

冬に氷で滑って、足の骨を折ってから、普通に歩くことができなくなっただからです。

年をとった魔法使いに代わって、村の親切な若者が、魔法使いの畑や家畜の面倒を見ていました。

今では、朝は昔のように火と呪文を比べあい、午後は畑を耕す代わりに、お気に入りの安楽椅子に腰掛けて、竜に話を聞かせることが魔法使いの日課になりました。

あるとき、魔法使いは大きな本は、竜を見せてあげました。

「よくごらん。美しいだろ。これが文字というものだよ」

「へえ、そいつは食べられるのかい？」と、このところ魚や草しか口にしてない竜が聞きました。

「いや、食べられないよ。でも、文字こそは人が生み出した最高の魔法さ。文字を使えば、私たちは自分の言葉や知識を残すことが出

来る。見たこともない遠い国のことを知り、死んだ人に会うこともできるんだよ」

竜は長い首を伸ばして、魔法使いが開いて見せた本を覗き込み、

「はあ、こりやまるで死にかけた芋虫じゃないか！　こんな不味そうなもの食べたくないね！」

鼻から黒い煙を吹き出すと、そっぽを向いてしまいました。

魔法使いは、怒りもせず、にこにこ笑いながら、本を閉じました。

それから、魔法使いは竜に色んなことを教えようと思いました。

野に咲く花と木々の秘密、その草花を使って薬や毒、渡り鳥のように飛び立っては戻ってくる季節のこと。

そして言葉、さまざまな国の言葉や動物の言葉、火や水の言葉を伝えようとしたのです。

教えはどれも地の底にある金銀よりも貴く、海のあるところにある真珠よりも珍しいものばかりでしたが、竜ときたら、まったく耳を傾けようとしません。

それどころか、魔法使いの言葉を子守り歌に、毎日ぐうぐう、だらしく眠りこけるばかりでした。

年をとることもなく、死ぬこともない竜にとって、時間の流れはあつてないようなものでした。

しかし、人間である魔法使いは、そうではありませんでした。

畑が黄金色に染まり、ルビーのようなトンボたちが飛び回るようになったところ。いつものように、竜と力比べをしていた魔法使いが倒れました。

驚き慌て竜は、倒れた魔法使いの周りをおろおろと歩き回りました。

「おい、魔法使い。どうした？ 大丈夫か？」

魔法使いは顔を真っ青にし、胸を押さえながら、長い間横たわっていました。息をするのも辛いのか、瞼を閉じてじっと息を堪えていましたが、しばらくすると目を開けて言いました。

「竜や、今日はお前に一つ、魔法を教えてあげよう」

竜は魔法使いの瞳に宿る、冬の星にも似た澄んだ光に一瞬ひるみました。

しかし、すぐに好奇心に負けて、顔を近づけました。

「本当に魔法を教えてくれるのか？ 俺は前から魔法を使ってみた  
いと思っていたんだ」

「ああ、とっておきの呪文を教えてあげよう。さあ、耳かしてごらん」

竜は言われたとおり、耳を差し出し、魔法使いは自分の頭がすっぽり入りそうなその穴の中に小さな声で何事かささやきました。  
すると竜は顔をしかめて、

「なんだ、それは？ そんな呪文があるものか！ 魔法使い、さてはおまえ、俺のことを馬鹿にしているんだろ？」  
「いや、本当だとも。でも、みだりに使ってはいけないよ。言うべきときを間違えると、その呪文は何の役にも立たなくなるからね」

おこった竜は、魔法使いの言うことにも耳を貸さず、鷲の翼を広げると空へと舞い上がりました。

魔法使いもそれ以上は何も言わず、大きな竜の影がカラスのように、スズメのように、そして豆粒のように縮んで消えるまで見守っていました。

空の上では、太陽の光が海の潮のように、赤から藍へ、藍から紺へと色を変えながら竜が飛び去った地平線の果てへと退いて行きま

した。  
日の光が去った後には、秋の月や星が涼やかな光を大地へと投げかけています。

しかし、魔法使いの目は、もうその光景を見ることはできませんでした。背中に大地のぬくもりを感じ、枯れた草花がしわ深い頬をくすぐるのを感じながら、

……魔法使いは、ゆっくり瞼を閉じました。

第二話に続く。

D r a s s o n T a i i

くじつほをかむじゅうのおはなし

第一話(後)

## 第二話『天と地の間で』（前書き）

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/sst  
/sst.php?act=dump&amp;cate=ori  
ginal&amp;all=21573&amp;n=0&am  
p:count=1
```

## 第二話『天と地の間で』

険しい山にある巣穴に帰った後、竜は少しの間、魔法使いの言ったことを考えておりました。

身体をひねり、尻尾をひねり、頭をひねって、とっておきの呪文の謎を解こうとしました。

しかし、いくら考えても、あのととき、魔法使いがささやいた言葉の意味は、わかりませんでした。

さて、さきほど『少し』という言葉を使いましたが、それは竜の時間で『少し』という意味でした。

竜は、人間とはことなる時間の中に住んでいます。

人間の人生の川は狭く、その流れは速い、しかしの竜の川は人の何倍も広く、その流れはきわめてゆるやかでした。

だから、竜にとってはほんの『少しの時間』でも、人間にとっては幾日、あるいは幾週間もの時間が流れていました。

人の時間で一月ほど悩んだでしょうか。

ふと竜は、自分がまったく魔法使いのところに行っていないことに気がつきました。

「なぜなぞの答えなど、謎掛けした本人に聞けばいいじゃないか。やれやれ、魔法使いの言葉を気にして、馬鹿を見たぜ」

きつとあいつ、俺に会えなくて、さびしい思いをしているぞ！

そう考えると、もう居ても立ってもいられません。

一刻も早く、魔法使いに会いたくなつた竜は、さつきまで夢中で考えていた呪文の謎を頭の隅に放り捨てると、巣穴から矢のように

飛び出しました。

夢中で翼を動かすうちに、足元に広がる大地は溶けるような速さで通り過ぎ、あっという間に魔法使いの家に到着しました。

「魔法使い、魔法使い、今日も俺はやって来たぞ！」

魔法使いが、いつも座っていた椅子の前に降り立って、大声で叫びました。

しかし、クッションの破れた椅子の上に誰もはいませんでした。

「はて？ 久しぶりに畑仕事でもしたくなったのかな？」

若いころ、魔法使いが耕していた畑のところに行きました。

しかし、荒れ放題になっていた畑には、誰もいませんでした。

「家の中にいるのか？」

大きな身体をかがめて、小さな家の中を覗き込みました。

しかし、家の中にあるのはほこりをかぶった机だけで、やはり誰もいませんでした。

家の門の前で、竜は首をかしげました。

これは魔法使いの考えた新しい遊びなのでしょうか？

それにしても、あの破れたクッションや荒れ放題の畑、ほこりをかぶった家具が気になります。

きれいな好きな主が、家を汚れたままにしておくはずはないのに……。

魔法使いの姿を求めて、家の裏に回ったときに、竜はついに『それ』を見つけました。



それは、石の板を乗せた小さな土山のように見えました。石板の上には、あのミミズがのたくったような文字とか言つしるものが、刻まれていました。

竜には、それが何なのかは分かりませんでした。文字を読むことも出来ませんでした。

しかし、その土の山と石板を見ているうちに、たとえようも無いやな気持ちに囚われました。

自分でも何かわからないものから、逃れるために、竜はかけ出しました。

のしかかるような山の影に背を向け、空っぽの家に背を向けて、石の上に書かれた言葉に背を向けて。

もう何十年も足を運んだことの無い村を目指し、その村に住んでいる一人の青年を探しました。

ずっと魔法使いの世話をしていた彼なら、いなくなった魔法使いの行方を知っていると思つたからです。

気の毒なのは、何も知らない青年でした。

朝の畑仕事をしているときに、突然大きな影が日の光を遮り、爪の生えた手で掴みあげられたかと思つと、目の前に恐ろしい竜の顔が広がっていたのです。

「おい、お前、魔法使いはどこへ行つたんだ!!」

青年がかろうじて気絶しなかったのは、人並みに外れてのんきな性格と日ごろから竜を見慣れていたおかげでした。

しかし、その青年も血走つた竜の目を見た瞬間、恐怖のあまり、あやうく答えと一緒に自分の舌をかみそうになりました。

「あ、あのお方はもうお亡くなりになりましただ！ 先月の朝、

おらが裏庭で冷たくなっているあの方を見つけて……それから、みんなと一緒に死んだ魔法使いさまを埋めてさしあげたんですだ！」

「なんだとっ！！！」

亡くなる？ 死ぬ？

むかし、気ままに大暴れまわっていたとき、そんな言葉をたくさん聞いたような気がします。

でも、今までその意味について、考えたことは一度もありませんでした。

「死ぬとは何だ？ 死んだ人間はどこへ行くんだ？」

「知りませんですだ！ おらあはそんな難しいことはわかりませんですだ！ でも、村の神殿にいる偉いお坊様なら、何か知っている……」

可哀想に、青年は怯えて、もう返事をするどころか息をするのもやっとなでした。

これ以上、聞いても、もう無駄のようです。

竜は、魔法使いの世話をしてくれた例に、鱗を飾っていた宝石を一つ青年に与えると、今度は村の神殿を目指して、猛烈な勢いで走り始めました。

さて、魔法使いが住んでいた村には、古い神殿があり、その神殿には僧侶がひとり住んでおりました。

この僧侶は、竜がはじめてこの辺りを襲ったときに祈りを上げ、その祈りが役立たずであったために、国を追われそうになった坊主

の一人でした。

そのために、僧侶は自分の代わりに英雄になつた魔法使いが憎くてたまりませんでした。

僧侶に言わせれば、自分が敬われないのも、神殿のお布施が少ないのも、すべて魔法使いのせいでした。

だから、魔法使いが死んだ後、この僧侶は悲しむどころか、大喜びしました。

僧侶は村人たちを神殿に集め、呼びかけました。

「賢明にして善良なる我が兄弟たちよ。（ここで村人が頷きます）あの憎むべき竜が、わしらの国を襲つたとき、今は亡き魔法使いがわしらを救つてくれた。（再び、村人が頷きます）つと、今まで言われておつた。しかし、兄弟たちよ、何かおかしいとは思わんかね？（村人たちが首を傾げました）。何故、あの竜が襲つてきたとき、都合よく魔法使いが通りかかったのだ？ あのと、一番得をしたのは誰なのか？ 一番よい畑を手に入れ、一番美しい家を手に入れたのは？」

僧侶は村人たちの目を覗き込み、疑いを知らないその心に小さな疑問が芽生えるのを見つけました。

「長い間、わしらは魔法使いがこの村を守っていると思つていた。だが、あの魔法使いの家に通っている兄弟の話では、残念ながら、そのものはこの集いに来ていないが、魔法使いは、竜を犬のように飼ひ慣らしておつたというではないか！（村人たちがざわめきはじめました）おお、兄弟たちよ！ わしも、魔法使いを疑いたくないのだ。かくも長い間、わしらの良き隣人を疑いたくないのだ。しかし、おかしいではないか？ 魔法使いが死んだ今、なぜ竜は襲つてこない？（ざわめきが、大きくなりました）なぜ畑を焼き、

家畜を奪い、我が兄弟を悩まそうとしないのだ？」

村人たちの間で動揺が病気のように広まっていくのを見て、僧侶は心の中でせせら笑いました。

今こそこの日のために鍛えてあげた弁舌をふるい、魔法使いが独占していた尊敬を我が物にするチャンスです。

「兄弟たちよ。今こそ告げよう。お前たちは騙されておったのだ！ あのペテン師で嘘つきの魔法使いに！ 妖術師は、地獄に落ちた！ しかし、わしと我が神がおられる限り、あの竜を恐れる必要は……」

そのとき、神殿が水に濡れた獣のように身震いしました。

僧侶は、口の中に飛び込んだ天井のしっくいを吐き出し、説法を邪魔した無粋な地震を罵りました。

と、僧侶は村人たちの視線が、自分の方を向いていないことに気づきました。

村人たちは神殿の窓を見つめていました。

窓の外にある巨大な竜の目を。

甲高い悲鳴を上げると、僧侶は村人たちを押しつけ、一人だけで逃げようと思いました。

しかし、竜は前足で神殿の壁を突き破ると、やすやすと僧侶を捕らえ、外に引きづり出しました。

「おい、坊主、地獄とはどこにある？ どうすればそこへ行ける？」  
「じ、地獄とは地の底にある燃え盛る監獄です、偉大な獣よ！ あなたの邪魔をした愚かな魔法使いは、そこで永遠の苦しみを味わっているのです！」僧侶は必死に、竜におべっかを使おうとしました。  
「そうか……ありがとうよ。だが、魔法使いの悪口を言ったのは許

さん！」

竜は僧侶を神殿の煙突に突っ込むと、猛然と地面を掘り始めました。

目指すは地の底の底、魔法使いがいるという灼熱の地獄です。

柔らかな土の層の下にあったのは、石となった太古の獣の骨でした。

その石の墓場を通り過ぎると、次に辿り着いたのは金属と岩のまだら模様。

硬い岩を掘り抜くと、今度は赤い溶岩が噴出しました。

溶岩の血潮を潜り抜けた先に、地獄と呼ばれる世界がありました。

地獄ではすべてが真紅に染まっています。

とつとつ流れるのは溶けた岩の大河、その輝きに照らし出された岩山は崩れたルビーの塊のよう。

赤く煮えたぎる世界を、人のように見える無数の影がさまよっていました。

と、その地獄の喧騒が、もっと大きな騒音によって破られました。人間の顔のようにも見える天井から崩れ、その穴の中から、巨大な獣が姿を現したのです。

竜は地獄の河に降り立ち、右往左往する人影を蹴散らしながら、大声で咆えました。

「魔法使い、魔法使い、どこにいる……」

そのとき、地獄の支配者である、山羊の蹄と角を持った巨大な悪魔が、現れました。

悪魔は天井にあいた大穴、滅茶苦茶にされた自分の家を見るや、怒りのあまり大きく身震いしました。

「おのれ！ 俺の地獄で暴れまわっているのは、どこのどいつだ！」

そして、まさに大暴れしている竜を見つけました。

真つ黒な悪魔と赤い竜は、お互いを見るなり、挨拶の一つもなしに飛び掛り、戦い始めました。

その戦いのなんと凄まじかったことでしょうか。

溶岩の河は大津波を起こして岩の街を飲み込み、天井からぶら下がっていた石のつらは砕けて、地獄の大地に鋭い槍の雨を降らせました。

二匹の戦いの余波は、さらに地上に及び、さまざまな天変地異をました。

海は沸き立ち、波の下にいる鯨たちを驚かせました。

眠っていた火山の幾つかがたたき起こされ、驚いた拍子に火と煙を吹き上げました。

竜と悪魔は、互いに牙で噛み付き、爪で搔き筆り、炎を吐きかけ、黒と赤の竜巻となって荒れ狂いました。

戦いは何時間も続きましたが、ついに悪魔が少しずつ押され始めました。

このままでは、力負けすると気づいた悪魔は、慌てて飛び離れると、

「おい、ちょっと待て！ お前、何をしに地獄までやって来たんだ

「？」  
「俺は魔法使いを探しに来た！ 地上にいる坊主が、魔法使いは地獄にいるといったんだ」

悪魔は酸の唾を吐いて、余計なことを口にした坊主を呪いました。  
(ちょうどそのとき、煙突からようやく引つ張り出された僧侶が足を滑らせ、またしても煙突の中に落ちました)

熱で柔らかくなった岩に腰掛け、竜に話しかけました。

「なるほど、つまりお前は死んだ人間を探しに、こんな地の底まで来たわけだ。そういうやつは、珍しくない。しかし、ここは地の熱と人の罪が集まるところだ。お前の探している魔法使いとやらは、誰か他の人間のことを盗んだことはあるか？ 無垢な命を殺めたことはあるか？ 自分の罪を死ぬほど後悔していたか？」

「いや……」と、竜は戸惑ったように呟きました。「魔法使いは誰かのものを盗んだことはないし、誰かを殺したこともない。俺はあいつが、後悔しているところを見たことがない」

悪魔は鮫のような牙をむいて笑いました。

その笑い声は、ハイエナの雄たけびに良く似ていました。

「なら、そいつは地獄にいない。そんな善人だったら、天使どもがいる天界にでも行って探すんだな」

「天界には、どうやって行けば良い？」

「地上に出て、空を飛べ。まっすぐ飛べば、そのうちに辿り着けるだろうよ。わかったなら、はやく出て行ってくれ。それから、もう天井を壊すな……」

竜は悪魔の言葉を最後まで聞かずに、矢のように地獄を飛び出しました。

悪魔はためいきをついて、角の生えた頭を抱えました。

溶岩を潜り、金属を掘り、石の墓場を通り過ぎて、竜は再び地上に飛び出しました。

そして、身体に溶岩の雫をこびりつかせたまま、一直線に空を目指しました。

雲を突き破り、天の青を一直線に貫き、高く高く、そしてまた高く。

昇りつめるつれ 空気は薄くなり、驚くほどの冷気に溶岩が凍りついて石になりました。

これには、さすがの竜も最初は戸惑いました。

しかし、やがて不死身の身体が天界に慣れ、息苦しさも寒さも、気にならなくなりました。

空はもう青くありません。天は濃い藍色を経て、いまや漆黒に染まっています。

黒豹の毛皮よりも滑らかなその生地の上に、星々の宝石が圧倒的な光を放っています。

その宝石の中でひと際明るく輝くのは、月の円盤、竜はついに天界に辿り着いたのです。

角から、星の光すら覆い隠すほどの雷光を発して、竜は叫びました。

「魔法使い、魔法使い、どこにいる…!」



すると、天界の住人、透明な翅の持ち主である天使たちがやってきました。

「天界の静寂を破る、不届きものは何者ですかっ？」

天使たちは、清らかな世界に似合わぬ野蛮な獣を見ると、嫌悪も露わに顔を隠しました。

そして、星屑を掴むと、稲妻に変えて竜に投げつけました。

しかし、竜が巨大な翼をひとおおぎすると、稲妻は石に打ちつける雨粒のようにすべて弾かれました。

続いて、天使たちは星を編んで、大きな網を作り、侵入者を包み込もうとしました。

だが、竜がその長大な尻尾を振るうと、網は破れて、星々は燃えながら、地上に落ちてしまいました。

天使たちは怯えて、お互いの身体を抱き寄せ、竜に問いかけました。

「お前は何者ですか？ 何をしにこの天の宮にのぼってきたのですか？」

「俺は魔法使いを探しに来た。地獄の悪魔が、魔法使いはここにいると言ったのだ」

竜の返答に、天使たちはほっと一息ついて、

「なるほど、おまえは死んだ人間を探しているんですね。そうやってここまで来たものは、お前が始めてではありません。しかし、ここは星の光と人の夢が宿る場所です。あなたが探しているものは、人よりも天を愛し、言葉よりも祈りや歌を好み、夜道で地上よりも空の星を仰ぎ見るような人間でしたか？」

「いや」と竜は途方に暮れたように言いました。「魔法使いは、いつでも友だちを大切にしていた。あいつは歌が好きだったが、それ以上に誰かと話すことが好きだった。そして、いつも地上の話ばかりをしていた」

天使たちは手をつなぎ、頬を寄せ、哀れみに満ちた目で竜を見つめました。

「残念ながら、お前の探している人間は、ここにはいません。彼の愛した地上を探した方が、良いでしょう」

その言葉を聞くと、竜は絶望の雄叫びを上げ、巨大な流れ星となつて地上に戻りました。

竜の嘆きを耳にした天使たちは、哀しげに吐息を漏らしました。その息は銀のチリとなり、漆黒の夜空に広がり、新しい星の種となりました。

竜は天使の言葉に従い、魔法使いを求めて、地上をさまよいました。

翼を震わせ、風を追いかけ、追い越して、地の果ての果てまでも、木陰の下、石の下、街の中に森の中、果てしない砂漠に底知れない海。

いったい世界を何周したことでしょうか？

ふいにある考えが、竜の頭と心臓を貫きました。

その思い付きのあまりの鋭さ、残酷さに、打ちひしがれ、地面に

たたき落とされました。

竜はやっと気付きました。

魔法使いは、もういないのです。

天の上にも、地の底にも、木陰の下にも石の下にも、森にも街にも砂漠にも海にも。

もう魔法使いと勝負をすることはできません。

触れることも、その姿を見ることも、その匂いをかぐこともできません。

話を聞いてもらうことも、話しかけてもらうことも。

あの優しい声で、世界の秘密を教えてもらうことはできなくなつたのです。

もう二度と、二度と魔法使いには会えないのです。

身をよじり、鱗を書きむしり、背をそらして月に悲しみの炎を吐きかけました。

長い、長いときをかけて、不死の竜はようやく

……『死』というものを理解したのです。

最終話につづく

第三話 『尾を噛む竜の物語』 (完結) (前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/sst  
/sst.php?act=dump&amp;cate=ori  
ginal&amp;all=21573&amp;n=0&am  
p:count=1
```

### 第三話 『尾を噛む竜の物語』 (完結)

悲嘆にのた打ち回り、疲労に打ちのめされて、竜は眠りの淵に沈みました。

夢もないその深い眠りから、竜を呼び起こしたのは、小さく冷たい水の雫でした。

一滴また一滴、雫が鼻を叩くたびに、意識は目覚めの岸边へと浮かび上がりました。

そして瞼を開けたとき、竜の目に飛び込んだのは……。  
ああ、なんとという美しさでしょう。

朝日を浴びた緑の葉はエメラルド、その葉脈を流れる水は輝くダイヤモンドの連なり、葉の周りを飛び回るのは生きた宝石である蝶でした。

見渡せば、蝶を狙う螻蛄があり、螻蛄を狙う小鳥がいて、その小鳥を冬の蓄えにしようたくらむ燃えるような毛皮の狐がいました。

すべてが鮮やかに、狂おしく動き回り、そしてこの上なく『生きていました』。

皮肉なことに、『死』を理解することによって、竜はじめて『生』の美しさを知ったのです。

今まで、ただ燃やし、怖し、食べる対象でしかなかったものすべてが、意味を持って押し寄せてきました。

その美しさは、眩暈を覚えるほど、激しいものでした。

ふいに、色と音の津波に洗われた意識の中から、いくつかの言葉が浮かび上がりました。

それは草花の薬効と毒性、あるいは虫の名前や小鳥の歌の意味。

全部、竜が魔法使いから学んだことばかりでした。もちろん、夢つつつに聞いた話なので、全部を覚えていたわけはありません。

ほとんどの思い出は、朝霧の中に浮かぶ影のようにおぼろで頼りないものでした。

その影の中から、星座をかたち作る星々のように、鮮明に光り輝くものが現れました。

あれはそう、魔法使いが始めて竜に、本を見せたくれたときのこと。

あ那时候、魔法使いは確か、こう言うてはいなかったでしょうか？

『文字は言葉』、『言葉は魔法』

そして、『言葉を通じて我らは死んだ人間に会うことも出来る』と。

「魔法使いは生きている！」唐突に竜は悟りました「魔法使いは、言葉の中で生きているんだ！」

続いて、はらわたがよじれるほどの後悔が竜を襲いました。

ああ、なぜ俺はあの時、ちゃんと魔法使いの言葉に耳を貸さなかったか。

魔法使いには、こうなることが、分かっていたのです。

だから、自分が死んだ後も、竜が一人にならないように知識を言葉に変えて残そうとしたのです。

だが、魔法使いの貴重な知恵は、居眠りの夢の中に消えてしまいました。

竜は苦しみに泣き叫び、尻尾で地面を打ち鳴らしました。

尾の一撃は木々から葉をふるい落とし、泣き声は森から獣や虫を追い払ってしまいました。

しかし、竜はすぐに気を取りなおしました。

「いや、待て。魔法使いのことを知っているのは、俺一人じゃない。教えたがり屋のあいつのことだ。きつと、ほかにも教えを受けたやつがいるぞ」そしてまた、こう考えました。「俺があいつを知っている人間と話せば、思い出の中でまた魔法使いに会えるはずだ！なんだ、簡単なことじゃないか」

ところが、これがちつとも簡単なことじゃなかったのです。

魔法使いを知る人間を求めて、竜は再び世界を飛びまわりました。しかし、人間たちは、竜の姿を見るなり、悲鳴を上げて逃げ出しました。

話しをするために捕まえても、あの村の若者みたいに怯えて話にならないか、神官みたいにひたすら命乞いを繰り返すばかり。かろうじて踏みとどまった者らも、玩具のような武器を手に、意味のない脅し文句を繰り返すだけで、とても会話になりませんでした。

国境から村へ、村から都へ、都からまた国境へと。

幾度、希望を持って降り立ったことでしょうか。

幾度、失望を胸に飛び立ったことでしょうか。

それでも竜は諦めませんでした。

ものを食べる暇も、水をのむ暇も惜しんで、探し続けました。

そして、最後に見つけたのが、

「またお前か……」  
「またあんたか!!」

チビでデブで年寄りの小人でした。

小人は竜の姿を見るなり、地面に大の字に寝っ転がりました。

「さあ、食うなら、一思いに食ってくれ！ また投げ捨てられて、腰を痛めるような羽目は、わしゃもうごめんじゃー！」

「違う。違う。俺はお前を食べに来たんじゃない。話をしに来たん  
だ」

竜は爪の先でやさしく小人をつまみあげると、掌の上に乗せ、今までのいきさつを話しました。

死んだ魔法使いとの日々のこと、地獄から天界への旅のこと、長くしかし実りの少なかった探索のことを。

小人は鱗の生えた手の上であぐらをかくと、白いひげをしごきながら、竜の話に耳を傾けました。

そして、聞き終わった後に言いました

「お前さん、自分が何をしたのか、忘れたのかい？ たとえお前さんが忘れても、人間たちは忘れるまいよ。少しでも頭のついとるやつなら、その頭を守るために逃げ出すさ。しかし、そんなに魔法使いのことが知りたいのなら、なぜ本を読まなかった？ 人はお前さんから逃げてても、文字までは逃げんじやろ」

「俺は字が読めないんだ」竜は後悔に顔をしかめて言いました。「魔法使いが、読み方を教えようとしてくれたけど、俺は話を聞いていなかった。今となつては、もう誰も俺に字を教えしてくれないんだ」

苦しみと悲しみが胸に溢れかえり、竜の目から大粒の涙が、ぼろぼろとこぼれ落ちました。



掌はたちまち大洪水になり、小人は慌てて、鉤爪の生えた指の山脈を駆け上りました。

しわで出来た階段をのぼり、指の関節に腰を下ろし、一息ついたあとに口を開きました。

「なるほど、お前さんの事情はわかった。厄介な話だが、一つだけ……手がないわけでもない」

「ほんとか？ お前の言うとおりにすれば、また魔法使いに会えるのか？」

竜は興奮のあまり、身を乗り出しました。

あやうく鼻で押しつぶされそうになった小人は、なだめるように竜の鼻の頭を叩きながら、言いました。

「この森を東に向かって飛んだ先に、大きな原っぱがあるじゃろ。その原っぱの向こうには、海が広がり、海の向こうには十人の王に治められた、十の王国がある。その十の王国を越えた先には、山々が連なり、その山の中に白い冠をかぶった山の王がおるのじゃ。王たる山の中には、魔法の泉があり、その中にたたえられておるのは水ではなく、天地創造よりも古い混沌。きわめて強い、変身の魔力じゃ。その泉に、一晩もつかれば、お前さんの願いも叶うじゃろ。しかしなあ……」

口を閉ざし、長いひげをしごきながら、大皿のような竜の瞳を覗き込みました。

雪白のまつ毛から覗く小人の視線は、まるで透き通った二振りの剣。

その鋭さに、山とノミほどの違いがありながらも、竜は一瞬息を呑み、言葉を忘れました。

「魔法の泉に漬かっておる間、お前さんはこの世のすべての苦しみや痛みを味わうことになるじゃ。その苦しみに耐えたあとは、全てを失うことになるのじゃ。爪を失い、牙を失い、火を吐くことはもちろん、空を舞うことも出来なくなる。竜よ、お前は無敵なる力を捨て、不死たる身を失い、獣のようにさ迷い、冬の葉のごとく萎れ、そして人のように死ぬようになるのじゃ」

小人の言葉は、風に乗って消えた後も、しばらくの間、竜は黙っていました。

長い首を伸ばし、空を見上げました。

念願が叶ったあかつきには、二度と飛ぶことのできなくなる空を。そして空に話しかけるように、つぶやき始めました。

「魔法使いに出会う前、俺はいつも何か腹を立てて、暴れまわっていた。腹をすかしていたが、何を食べても空腹だった。一人だけ、自分が孤独だと気づいていなかった。話しかけてくれるやつは、ほとんどいなくて、教えさとしてくれる人間は一人もいなかった。魔法使いに出会って、俺ははじめて、満ち足りるということを知った。あいつは、力や炎じゃ手に入らないものを俺にくれたんだ。空っぽだった俺という器を満たしてくれた。だから、あいつにもう一度会えるのなら……俺はどんなことでもするだろう」

小人は、もじゃもじゃの眉毛が生えた臉を閉ざしながら、竜の言葉に聞き入った。

そして、全て聞き終えた後に、微笑を浮かべて言いました。

「良いじゃろう。ならば、お前の願いを叶えてやるとしよう」

小人の言葉の通り、竜は東へ東へと飛び続けました。

果たして、草原の先には海があり、海の間には十の王国、王国の彼方に山々の連なりがありました。

何百もの山の中から、山の王を見つけることは難しいことではありませんでした。

山の王は、臣下たちよりも頭二つ分も高く、その白髪だらけの頂には、光る氷の冠が乗っていました。

山肌に降り立った竜は、ほどなく小人の話した魔法の泉を見つけました。

それは、なんと不思議な泉だったことでしょう。

泉の中に入っていたのは、透明な雪解け水ではなく、大きなシャボン玉のようなものでした。

シャボン玉の表面は白く濁りながら、絶えず輝いていました。

虹色の光は、ゆらゆらと形を変え、覗き込むたびに違う景色を映し出しました。

ためしに、シャボン玉の表面をなめてみる、言葉では言い表せないような不思議な味がしました。

太陽はすでに血のような赤い光を引きずりながら、山の背に隠れようとしていました。

意を決した竜は、ためしに鉤爪の生えた足を、泉の中に入ったんでみました。

それから、腰、背中、翼と全身を泉に浸したのです。

千を数える間、竜は何も感じませんでした。

あの小人にだまされたのだろうか、そう思い始めた時のことです。

突然、今まで感じたこともないような激痛が、次々に竜を襲いました。

最初にやってきたのは水のような痛みでした。

それは氷の刃のように、鱗の隙間を貫き、肉を抉りましたが、竜はこれに耐えました。

次にやってきたのは、風のような痛みでした。

それは目に見えない槌のように、骨を叩き、軋ませましたが、竜はこれに耐えました。

三度目に訪れたのは、土のような痛みでした。

それは、巨大な腕となつて、身体を掴み、絞りあげましたが、竜はこれに耐えました。

四度目に現れたのは、火のような痛みでした。

それは、竜自身の吐息よりも熱く、全身を焼き溶かしましたが、竜はこれに耐えました。

生まれたての太陽が、東の地平線から産声を上げた時、最後の痛みがやってきました。

それは、太陽の光のように、白く眩しく、全てに勝る激痛でした。

痛みは光の速さで、竜の身体の隅々、血の一滴、肉の一欠けらにまで行きわたりました。

ついに堪え切れず、竜は明け始めた空に向けて、雄叫びをあげました。

その瞬間、不死身の身体にひびが走り、竜の身体はごなごなに砕け散りました。

砕け散った竜の身体の大半は、音もなく泉の底に溶けながら、沈みました。

しかし、その中で最も大きな一欠けらだけは、混沌の奥から浮かび上がりました。

竜の破片は、まるで湖底から立ち上る泡のように、形を変えながら、万色の水面を突き破り、岸を目指しました。

クラゲのような身体は、外の空気に触れたとたん、冷え固まり、一つの形をとりました。

岸辺に生えた草を掴み、身体を丘に引き上げたとき、竜は自分の手が、まるで脱皮したばかりの昆虫のような白い皮膚に覆われていることに気付きました。

柔らかかそうなその皮膚を通して、青く赤く走る血管が透けて見えました。

冷たい空気は、千のカミソリとなって、生えかわったばかりの竜の皮膚に襲いかかりました。

そして、皮膚と肉の下で、もう一つの刃物、餓えと渇きが、山の空気にも劣らぬ激しさで、竜を苛み始めました。

下がって行く体温と、眩暈がするほどの空腹と渇きに、竜は今まで味わったことのない感情を感じました。

『死の恐怖』を……。

そのとき、山の王に住んでいる一人の少女が、その場を通りかかりました。

少女は朝、毛深い山牛から絞り取ったばかりの乳を入れた石の器を抱えていました。

かぐわしい乳の匂いを嗅いだ瞬間、竜はいても立ってもいられなくなり、慣れない脚で不格好に歩き、転がりながら、少女に近づきました。

竜は猛然と、少女に襲いかかり、乳の入った器を奪うつもりでした。

しかし、差し出された自分の手には、もう鉤爪は生えていません

でした。

舌で口の中をなぞってみると、鋭い牙が一本もなくなっていることがわかりました。

火を吐こうとしても、喉から出るのは、奇妙な唸り声ばかりでした。

そうして新しい体に戸惑っているうちに、怯えた少女がその場から逃げようとしてました。

ここで逃げられたら、不慣れなこの身体に追い付く望みはありません。

万事休す！

そう思われたとき、竜の脳裏に魔法使いが教えてくれたただ一つの呪文がよみがえりました。

「…………た…………たす…………けて」

呪文は、まるでそれ自体が命を持っているかのように、竜の喉を伝わって、次々に外に飛び出しました。

「たすけて、おねがいです。おなかがいすいて、しにそうなんです」

生まれて初めて、竜は人に助けを求めました。

驚いたことに、怖がっていた少女は足を止め、恐る恐る近づいてきました。

そして、ひざまずき、震える竜に乳の入った器を差し出したのです。

竜は器を受け取った瞬間、一気に傾け、中の牛乳を喉に流し込みました。

飲んでほむせ、むせてはまた飲み、あっと言う間に空にしてしま

いました。

新しい舌で味わう乳は、まるで稲妻のような美味で、竜の身体を震わせました。

飲み終わった後、涙が次から次へとこぼれ、止まりませんでした。

竜を見守っていた少女は、腰を下ろし、髪を撫でて彼を慰めようとしてました。

髪を？

鏡のように磨き上げられた石の器を覗くと、小さな人間が竜を見返して来ました。

そう、竜は小さな人間の男の子になっていたのです。

一つの秋と一つの冬の間、竜だった少年は、山の少女と一緒に過ごしました。

二人は山牛の乳を搾って、バターやチーズを作り、作物を刈っては小麦粉に変えました。

そして、雪深い冬の間、小屋の中で自分の知っている物語を話したのです。

少年は今まで巡った国々の話を（自分が竜であったことを除いて）、少女に話して聞かせました。

少女は山の素朴な暮らしのこと、家族のような山牛たちのこと、そして彼女の祖母が出会ったと言う、少年によく似た男のことを話しました。

それは空から降る雪の花弁のように、静かで優しく、幸福な時間

でした。

しかし、やがて氷は溶け、冬は去り、春が、別れの季節がやってきました。

少年と少女は抱き合い、ふた筋の涙を一つに交えて、別れを悲しみました。

しかし、少年は旅立たなければなりませんでした。彼には目的がありました。

魔法使いの足跡をたどると言う気の遠くなるような目的が。

少女と別れた少年は、山々を巡って、そこに住まう人々と話をしました。

そこで少年は、山の秘密と土の言葉を学びました。

山から立ち去った少年は、十の王国を巡り、十人の王に目の当たりにしました。

そこで少年は、地上の言葉と人間の知恵を学びました。

海に行きついた少年は、船に乗り、大海原にこぎ出しました。

そこで少年は、波の下に住まう生き物の秘密と水の言葉を学びました。

海を越えて帰って来たとき、少年はもはや少年ではありませんでした。

髪は日に焼けて、焦げた藁の色に染まり、肌もまたあわい黄金色に輝いていました。

青年は鼻の効く猟犬のように、魔法使いの痕跡を追いかけてきました。

柔らかな身体は、鍛えられかたく強くなり、旅はずいぶん楽しんでいました。



そして鍛えられたのは、身体ばかりではありませんでした。

青年は旅先で習い覚えた知識で、人々を救い始めました。

あるときは、海の言葉を使って渦巻く潮をなだめました。

またあるときは、山の言葉と火の歌を使って、怒れる火山を眠りに導きました。

青年は出会った人々に多くを教え、その人々から、さらに多くを学びとりました。

つもり積もったときが、髪を灰色に染め、顔に深いしわを刻みはじめたころのことです。

壮年に達した男は荒野の中で、不思議なものを見つけました。

それはまるで、小さな岩の山のように見えました。

近づいて、手を触れた瞬間、男はそれが地獄の溶岩が固まったものだと気付きました。

そしてぐるりと、裏に回ると、岩の中に無数のきらめきが見えましました。

その光は、天からこぼれ落ちた星の滴のものでした。

男は両目に涙を光らせながら、岩の塊を抱き締めました。

彼にはその岩が何かわかったのです。

それは大いなる翼で、地獄の底から運び出され、天の宮で星の滴と混ぜられました。

天と地、二つの相反する魔法がその中で混沌と渦巻き、一つの命が生まれたのです。

男は思い出しました。

この岩こそ、彼の生まれた『竜の卵』であること。

そして、同時に悟りました。

今このときにも、自分が知らずに産み落とした卵が、どこかで大

地に根を下ろし、月と太陽の光を糧に育っていることを。

いいえ、あるいは『それ』は、すでに卵の殻を破り、外に這いだし、最初の咆哮を天に向かって放っているのかもしれない。

男は自分の旅が、終りに差しかかっていることを知りました。

本能に任せ、言葉なき囁きに耳を傾けながら、歩くことさらに数年間。

男はある国に辿り着き、その国の村で泣き叫ぶ農民を見つけました。

農民の嘆きを聞き、その原因を知った男は、国境の山に向かいま

した。  
山の頂に腰掛けながら、一晩の間、男は一人の老人のことを思い出していました。

自分に全てを与えてくれた、その人のことを。  
あの人も、こんな思いで夜明けを待っていたのでしょうか。

ときは月と一緒に、飛ぶような速さで走りすぎました。

東の空がばら色に染まり始めたとき、太鼓のような羽ばたきの音が聞こえました。

太陽よりも早く、大きな影が地平線から現れ、一直線にこちらへ飛んできました。

それは大いなる鷹の翼を持っていました。

手足にはライオンの牙、身体には赤く鋼鉄より硬い鱗、目と口に光る原始の炎。

もろ手を上げ、全ての憧れと懐かしさと愛おしさを込めて、魔法使いとなった竜は叫びました。

「竜よ、竜よ、私と勝負をしないか!」

E N D   o r   C O N T I N U E   F O R E V E R

第三話 『尾を噛む竜の物語』 (完結) (後書き)

これで、竜と魔法使いのお話はひとまず終わりました。  
最後に、一つだけ付け加えておきたいことがあります。

このお話に出てくる魔法使いは、決して理想的な賢者ではありません  
ん。

わたしが、書きたかったことはただ一つ、自然は竜のように無邪気  
で無慈悲だけど、人間はそれでも子供を育て、教えて、生きていく  
ことができる。

わたしたちに来れることはそれだけ、ただそれだけなのです。

今回は、優しいお話を書きましたが、続きの作品はもうちょっと童  
話の残酷な一面もかいてみたいと思っております。

それでは、皆さま、またのご機会を！

A Love Story くかいぶつのごろしかたゝ 第一話(前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/sst  
/sst.php?act=dump&app:cate=ori  
ginal&app:all=21573&app:n=0&am  
p:count=1
```

## A Love Story くかいぶつのごろしかたゝ 第一話

一つの貝より生まれた七つの宝珠を携えて、その姫君は海辺の小さな国から、平原の大国へ嫁ぎました。

姫君の髪は夜明けの海の青を留め、唇は珊瑚の紅、お顔は贈り物の真珠のごとく白く、美しさに輝かんばかりでした。

姫君を迎えた王は一目で恋に落ち、お城の宝物庫さながらに、王妃となつた姫の人生をさまざまに幸福で満たしました。

姫君が嫁いだ国は大きく、強く、そして豊かでした。

食事のたびに、山や海から選りすぐつたごちそうがテーブルを埋め尽くし、タンスには眼もくらむような鮮やかなドレスが並び、国の隅々から集められ、積み上げられた宝石箱はまるで山のように。

海のそばで生まれた王妃のために、王宮の中に海を模した池が作られ、池の中には小さな島がいくつも浮かび、船をこいで遊びに行けるようになっていました。

王はまた、四つの季節に合わせた、四つの宮殿を新しく作り、そこに宝石のような小鳥を放ち、小鳥のように美しく歌う娘たちを付き人として王妃に与えました。

しかし、婚礼から一年経ち、二年経ち、三年が過ぎる内に、月のように満ち足りていた王妃の幸せにも陰りが差し始めるようになりました。

いくら待つても、王との間に、お世継ぎが授からなかったのです。

口の悪いお城の老人たちは、王や王妃の聞こえないところで、このように噂し始めました。

「うちのお妃さまは海の貝のように美しいが、これほど待ってもお世継ぎが授からんとは、あの貝殻の中には何が入っているんだろかねえ?」と。

どんなに上手く隠しても、かげ口は何時か、本人の耳に入るものです。

噂を知った王妃は、その言葉の鋭さゆえに、深く傷つきました。

そして、何としても王のお子を授かるうとして、偉人や賢人を求めて、方々を訪ね歩きました。

まず、王妃は国で一番大きな寺院へ行きました。

そこでは、金色の法衣を来た大僧正が王妃に言いました。

「お世継ぎが欲しいのでしたら、黄金を神に捧げ、子宝を祈るのです」

王妃は言われた通りにしましたが、子供は授かりませんでした。すると大僧正は声を上げ「信心が足りぬ!」と王妃を叱りつけました。

次に、王妃は国で一番かしこいと言う学者の所へ行きました。

宝石をはめ込んだ本を片手に、学者は王妃に言いました。

「お世継ぎが欲しいのでしたら、このお薬を飲みなさい。お代はルビー四つほどで結構です」

王妃は薬を飲んでお腹を壊しましたが、子供は授かりませんでした。

すると学者は肩を竦め、「お薬が体にあわなかったのでしょう。」

次はこの薬を試してみてください。お代はサファイア五個です」と言って、新しい薬を差し出しました。

神に祈っても甲斐はなく、知恵に頼っても実りはなく。

困り果てた王妃は、最後に王国で一番風変わりな聖者を訪ねるこ

とにしました。

この聖者は黄金も宝石もまとわず、数人のしもべと一緒に山奥に住み、そこでやってくる病人の治療や瞑想をなりわいにしておりました。

聖者の住む山は、高く険しいものでした。

王妃は輿に乗って山を登りましたが、山道は狭まり、やがてとうとう輿では昇れないところまで来てしまいました。

すると王妃は輿から降り、ドレスが汚れるのもかまわず、お供のものたちが止めるのも聞かずに、山道を登り始めました。

王が一目で恋の深淵に沈んだように、王妃もまた夫を愛していました。

そして、心の底から、王にお世継ぎを差し上げたいと願っていました。

そのためには、どんな苦勞も厭わないと決心していたのです。

しかし、ときは真夏。

天から降る太陽の光は容赦なく、お妃の白い肌を焼き、汗を吸ったドレスはまるで鉛を詰めた荷物のように身体にのしかかります。

ほどなく眼がかすみ、足元がふらつきはじめました。

もうあと二、三步で倒れそうになったとき、山の上から降りてくる人影が目に入りました。

その人影は女性で、夜の闇を凝らしたような黒い服だけを着ていました。

女性の顔は青ざめ、唇は瑠璃色の上薬を塗った二つの陶器、片眼は途方もない暗黒をたたえた井戸でした。

片目だけ？

そう、とても（王妃に劣らぬか、あるいはそれ以上に）美しい顔



立ちをしていたのに、そのご婦人は顔の半分を漆黒のベールで隠していたのです。

人影が一步足を踏み下ろすたびに、夏の暑さや日の光が、蛇に怯えたネズミのように退いて行くのが感じられました。

淡く、輪郭を失った風景の中で、その女性の姿だけが、ナイフで刻まれた傷のように黒々と浮かび上がっていたのです。

これこそ、求めていたお人に違いない！

そう思った王妃は、そのご婦人の足元に身を投げ出し、

「この山に住む聖者様とお見受けいたします」額を地面に押し付けて言いました。「なにとぞ、王のお世継ぎを授かる方法を教えてください！ もし、お子が生まれたときは、名付け親となってその子をお守りください！」

黒衣の婦人は、跪く王妃を無言で眺めたあとに口を開きました。

「王妃よ。生に関わることを妾に頼むことは、賢明とはいえぬ」青い唇が紡ぐ言葉を耳にしたとたん、背筋が怪しく震えるのを感じました。「だが、このように丁寧に頼まれたのは、始めてゆえ、問いに答えてつかわそう。しかし。汝は王の子を孕むであろう。しかし、その代償は、金銀では購えぬものであると知るがよい」

答えの意味を知ろうと、王妃は顔を上げました。

そして、気付きました。

ご婦人が身につけていなかったのは、指輪や首飾りだけではありません。

土の上には木の葉や草の影が記されていましたが、黒衣の婦人の影だけはどこにもありませんでした。

血管の中で、血が一滴残らず泡立つのを感じながら、王妃は聖者を、聖者と思つたその人の顔を見つめました。

そのとき、婦人のベールが風もないのにはためき、その下に隠されていた顔の半分を明らかにしました。

ベールの下には、何もありませんでした。少なくとも人の顔と叫ぶようなものは。

そこにあつたのは底知れない闇、そしてその闇の中に浮かぶ白い髑髏だけだったので。

王妃は悲鳴を上げて、気を失いました。

それから、どれほど経つたことでしょう。

気を取り戻した王妃は、自分が木陰の下に横たえられ、お供のもののたの介抱を受けていることに気付きました。

まだうつすらと霧のかかった眼で周りを見渡しながら、聞きました。

「……私は、どうしてここに？」

「どうぞ、お静かに！」侍女の一人が、王妃の口に水を運びながら言いました。「お妃さまは、山登りをしている途中に、気を失われたのです。私たちは、あなたさまをここに運び、日の当たらぬように世話をしていたのです」

「では、聖者さまは？ 聖者様はどこへ？」王妃はぼんやりと聞きました。

「それでしたら、男の召使に呼びにいかせました。ほら、見てください。もう戻ってきました」

侍女の指差した方向に目を向けると、ちょうど男の召使が一人の老人を連れて山道を降りてくる所でした。

赤く泣きはらした眼をした老人は、王妃の前に連れだされると、

深々と頭を下げて言いました。

「わしは、この山に住む聖者さまのしもべです。お妃さま、ようこそ我が家へお越しになりました。しかし……しかし、たいへん申し上げにくいことですが、お探しの聖者さまは先ほど、身罷られたばかりなのです」

「聖者さまはお亡くなりになったと……では、私が見たあのご婦人は……」

「ご婦人ですと？」不思議な顔をして老人が言いました。「いま、お妃さまたちを除いて、この山にご婦人は一人もおりませんか？」

老人の答えを聞いて、王妃は再び気が遠くなるのを感じました。

王妃は、聖者の山で見たことを誰にも話しませんでした。

しかし、たとえ話したとしても、一体誰が信じたことでしょうか。

『死』その人と言葉を交わし、助けを求めたなどと言う途方もない話を。

それから間もなく、預言の通り、王妃は子供を身ごもりました。

始めは、王妃も黒衣の女性から授けられた不吉な言葉を恐れていました。

しかし、ときが経ち、腹の中で愛の果実が熟れていくにつれ、いつしか恐怖の記憶は新しい幸福の波に押し流されてしまいました。

お大臣も、騎士も、侍女も、召使たちも、国の人々はこぞって王妃の懐妊を祝いました。

そして、王は国の誰よりも、我が子の誕生を喜び、待ち望んでいました。

十月十日のあいだ、赤子は王妃のお腹の中で何千、何万もの祝福を受け、そしてついに生まれ出るそのときを迎えました。

出産は王妃にとって、未だかつてない試練となりました。

その苦しみはまるで、お腹の中に鍛冶屋の工房が一つ出来たかのよう。

大男の鍛冶屋が槌を金床に打ち付けるたびに、痛みの火花が頭いっぱいに飛び散ります。

しかし、王妃は耐えました。

祝ってくれた国民のため、愛する王のため、なにより我が子のために耐えました。

血が出るほど歯を食いしばり、お腹の中の鍛冶屋が、最高の贈り物を作り上げるそのときを待ちました。

そしてひと際大きな金槌の一撃のあとに、弱弱しい産声が上がりました。

続いて響いたのは、産婆とお付きの侍女たちの賛美の声でした。

「おお、ご覧ください、お妃さま！ なんと美しい子でしょう。わたしは何百と言っ赤子を取り上げてきましたが、こんなに麗しいお子を見たことはありません。ああ、まるで象牙のお人形さんのようー！」

「速く！ 速く、その子をこちらへ……」

王妃は、我が子を迎え、最初の抱擁を与えようと手を差し出しました。

しかし、その指が触れたのは産婆の手でも、柔らかな我が子の肌

でもありませんでした。

王妃の手に触れ、掴みかえしてきたのは滑らかな骨の指。

顔を上げ、出産の痛みでかすむ視界に、黒いベールに覆われた顔と、自分を覗き込む深淵の井戸をとらえたとき、王妃ははじめて黒衣の婦人の言葉を理解しました。

黄金では決して購えない代償の意味を知ったのです。

喜びに花開いた王宮を、つぎに包み込んだのは大いなる悲しみの帳でした。

生きている間、王妃を喜ばせるために、金銀を惜しまなかった王は、彼女が亡くなったあとも大いに宝物庫を開き、かつてないほど豪華な葬儀で妻を送りました。

しかし、華やかな儀式も、荘厳な僧侶たちの祈りも、死の喪失が刻み込んだ痛みを癒す薬にはなりませんでした。

生まれたばかりの我が子を抱きながら、しょう然と立ち尽くす王の耳元に青く透き通った唇が囁きかけました。

その言葉は冷たい雲となり、王の耳を通って、頭の中でしばしとぐるを巻くと、やがて喉と唇を経て、生まれたばかりの赤子の上に降り注ぎました。

その言葉は『ペルラ』。

貝の命と引き換えに、この世に生れ出る、美しくも悲しい宝石の名前でした。

第二話に続く。



第二話 『 姫君である宝石、ふた粒 』 (前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/st/sst.php?act=dump&app:cate=original&app:all=21573&app:n=0&app:count=1
```

## 第二話 『 姫君である宝石、ふた粒 』

悲しみの実であるペルラ姫は、母君のいなくなった王宮で育てられました。

生まれたその日に産婆が讚えた通り、ペルラは驚くほど見目麗しい女の子でした。

姫の髪も肌も搾りたての乳の白、唇は桜色に色づき、眼は銀を噴いた二枚の水盤。

新雪をもつてこしらえた天使のように愛らしく、だが春を待つ氷のようにどこか儂げなペルラでした。

ペルラは、母の美貌と四つの宮、そしてお父上である王の深い愛を受け継ぎました。

しかし、姫の宝物庫が、母上のように多くの幸福に満たされることは決してありませんでした。

どこへ行っても、『死』がいつも影のごとく、ペルラにつきまとっていたからです。

生まれて間もなく、乳母は太陽の光が火のごとく、姫の肌を焼くことを発見しました。

日の光にさらされただけで、絹のような肌が赤く焼け、火ぶくれを生じるのです。

歩けるようになっても、姫が他の赤子のように、元気よく遊びまわることはありませんでした。

少し駆け足をしただけで、咳が喉からこぼれて止まらず、踊ろうとするものなら、小さな心の臓が弾けそうになったのです。

熱と苦痛と悪夢は、お気に入りのお菓子のようにペルラを愛し、隙あらばベッドの中に忍び込み、なかなか姫を手放そうとしませんでし



た。

病は双子の姉妹のようにペルラと一緒に育ち、年を経るごとに軽くなるどころか、ますますひどくなりました。

一歳のころ、姫は毎日、植物からなる薬を五種類、鉱物からなる薬を五種類、吞んでいました。

それが三歳になる頃には、薬の種類も量も二倍になっていました。ついに王宮付きの医師は、お父上にこう言いました。

「陛下、どうぞ怒らずに聞いてください。姫君の病は、神のご采配によるもの。私には手に負えません。正直な話、私には姫君の愛らしい心臓が、来年も動いているかどうかさえわからないのです」

これを耳にした宮殿の老人たちは、王妃がなくなつた後、悲しみに鈍つた言葉の刃を、再び研ぎ始めました。

「いやあ、我が姫の美しいことよ」一人が言いました。

「そして、姫のお命の儂いことよ」もう一人が言いました。

「如何に美しくとも、水面に映る月は手ですくえぬ」第三の老人が言いました。

そして三人は、口を揃えて言いました。

「お世継ぎとはいえ、ペルラさまは、ご出産はおろか、婚礼まで生き長らえるかも怪しい。我が殿も、新しいお妃さまを迎え、新しいお子をもう一人か二人、作つた方がよろしかろう」

こうした老人たちの言葉は、むろん王の耳にも入っておりまして。しかし、若い王はがんとして、新しい王妃を娶ろうとしませんでした。

王の心には、まだ亡き妻の愛と悲しみが居座り、王は宝物のようにそれを手放したらなかったのです。

頑なに閉ざされた心を開き、王の背を婚礼に向けて押したのは、まだ幼いペルラでした。

ある日、四歳になったばかりの姫は、玉座に座っていたお父上に歩みより、膝に手を触れて言いました。

「おとうさま、あたらしいおかあさまをむかえて、みなを安心させてくださいませ。ペルラも、かわいい弟や妹がほしゅうございます」

まだ父上の腰にも届かぬ年齢でありながら、きわめて聡い姫でした。

王は健気な我が子を抱きしめ、不甲斐ない自分を省みて、姫の肩を涙で濡らしました。

そして、大事にしていた妻の記憶を心の奥にしまいこむと、新しいお妃を迎える準備を始めました。

二人目の王妃は、白い冠を被った『山の王』の麓に住む部族の中から選ばれました。

丈夫な子供を生んでほしい、と言う願いから、選ばれた王妃は、燃えるような赤毛の髪と火のようなご気性の持ち主でした。

王妃は額に赤い大きなルビーを輝かせながら、王宮に入り、皆の期待通り、そのお腹から一粒の宝石を王国にもたらしました。

母上によく似た明るい髪をした宝石の名は、アンブラ。

獣のように病気を知らぬ子が欲しい、と王が願ったせいでしょうか。

生まればかりのアンブラ姫のお口には、すでにヤマネコかオオカミのような牙が、二本生えていました。

アンブラ姫はその牙で、口に当たるものすべてに噛みつきました。

乳母たちの乳房を傷だらけにし、小さな姫は母乳よりも血を多くお召し上がりになる、と震え上がらせました。

牙以外にも、アンブラには不思議なところが、たくさんありました。

生まれてから三カ月もしないうちに、言葉を話しはじめ、半年経つ頃には年上の子供たちよりも遥かに達者に外を走り回るようになっていたのです。

奇妙な姫に、老人たちはまた何か思うところがあつたようですが、今回はそれを口にすることはありませんでした。

王はお喋りな老人たちにうんざりしていたし、新しいお妃さまは、老人の噂話を大人しく聞き流してくれるようなお方ではなかったのです。

振るつたとたん、首が飛ぶとわかっているのに、舌を使うのはあまり賢明ではないことを、老人たちはよくわかっていました。

やがて月と太陽は巡り、渡り鳥のような季節が五回、王国の上を飛び去りました。

寶石のような姫君たちは、宮殿の中ですくすくと成長しました。

二人の姫のうち、ペルラ姫は、大人びた十歳の少女に育ちました。生まれ持った病も姫と一緒に成長し、今では毎日飲む薬は五十種類を越えていました。

絶え間なく襲い来る熱と苦痛は、ペルラを物静かで風変わりな子供に変えていました。

ペルラは舞踏会に参加することはなく、貴族の社交界に顔を出すこともまれでした。

一日の大半を屋根の下で過ごし、本を読み、薬草を育てることに生きがいを見い出していました。

一方、妹姫であるアンブラは、姉とは正反対の成長を遂げていました。五年の月日は、牙の生えた赤ん坊を、愛らしい少女に変えていました。

しかし、アンブラの中に詰まっていたのは、年相応の子供の魂ではなく、燃え盛る炎と一匹の虎でした。

五年の間、木に登り、池で泳ぎ、泥の中で転げ回って駄目にしたドレスの数は、十数着。

木の枝を使ったチャンバラごっこで、男の子たちの頭に作ったタニコブの数は、数十個。

とつぜん、癩癩を起し、皿や玩具を叩き壊して、侍女や友だちを泣かせたことは、もはや数え切れません。

虎のように誇り高いアンブラ姫は、蔑みや偽りを最も憎みました。王と王妃は、姫の教育のために、国の隅々から、学識高い教師を集めました。

しかし、その先生たちが、一瞬でも自分を子どもと侮り、見え透いた誤魔化しを口にしようものなら、姫はたちまち猛り狂う小さな獣と化しました。

自慢の牙と爪で、教師たちをずたずたに引き裂き、半殺しにして、一人残らず王宮から追い出しました。

宮殿の召使いたちは、アンブラ姫を猛獣よりも恐れていました。

お父上と母上も、姫を深く愛しながら、あまりに激しい気性にどうやって接していいかわかりませんでした。

そして、奥歯に物が挟まったような、みんなの物言いが、アンブラ姫をますます荒れ狂わせました。

自分も困む世界すべてを、薪として燃え上がるアンブラ姫の怒りを鎮めたのは、姉姫であるペルラでした。

ある日、いつもよりも激しい憤りに駆られた姫は、燭台を片手に、宮殿のカーテンやテールブルクロスに火をつけて回りました。

運悪く、その日、お父上とお母上は出かけて、王宮にいませんでした。

宥めようと近づく者がいれば、姫は手に持った火を容赦なく押しつけました。

仕方なく、召使いたちは水を充たした瓶やバケツを手に、おろおろとアンブラ姫のあとをついて回るしかありませんでした。

その騒ぎを聞きつけて、やってきたのが、ペルラ姫でした。

ペルラは、手当たり次第に火を点していくアンブラを見ると、すたすたと妹のそばに歩み寄り、無造作に燭台を持っていた手を掴みました。

そのとき、アンブラが暴れたため、蠟燭の火がペルラ姫の真っ白な髪に燃え移りました。

しかし、ペルラは燃え広がる火にも顔色一つ変えず、

「燭台をお放しなさい」微笑みすら浮かべて言いました。「はやく放さないで、一緒に燃えてしまおうよ」

火はペルラの髪と肌を赤銅色に染め上げ、両の瞳を黄金のように輝かせました。

ああ、その美しさ、その恐ろしさと言ったら！

燃える姫君を目にしたすべてのものは、アンブラも、召使いたちも、或いは『時』すらも、息を殺し、その場で凍りつきました。

心臓の鼓動にして、二打ちするほど時間が過ぎたあと……。

生まれて始めて覚えた恐怖と畏怖に鞭うたれ、アンブラ姫は泣き出し、ついに燭台を手放しました。

召使いたちも、呼吸と一緒に自分の務めを思い出し、慌ててペルラの髪と服に燃え移った火を水で消し止めました。

誰も彼もが、大声で泣き騒ぎ、そうでなければ怯えて叫んでいました。

その中で、ペルラ姫だけは焦げた髪や絹の匂いを気もせず、皮膚を刺す水の冷たさもかまわずに、赤ん坊のように泣きじゃくる妹姫を抱きしめ、あやしていました。

後日、この話を聞いた王は、以後アンブラ姫の教育を姉姫に一任することにしました。

我が子のたおやかな外見に似合わぬ勇気を知り、もはやペルラ以外に、アンブラの世話を任せられる者はいないと、判断したのです。そして、ペルラはお父上の直感が正しかったことを、見事に証明して見せました。

以前の教師たちとは違い、ペルラはアンブラに対して声を荒げることがありませんでした

しかし、妹姫の猛々しい性格にひるむこともありませんでした。見え透いた嘘はつかず、決して知ったかぶりをせず、自分の知っていることだけを包み隠さず、ありのまま伝えました。

そうして、ペルラの教育を受ける内に、まるで川の水が尖った石をまるやかにするかのごとく、アンブラも少しずつ変わり始めました。

アンブラは木に登ったり、地面で転がりまわるときは、ペルラが縫った破れにくい革製の服に着替えるようになりました。

男の子たちとチャンバラごっこをする時も、姉姫が彼女のために作った、竹を綿と布で包んだ玩具の剣を使うようになりました。

そして（多くの召使いや侍女を驚かせたことに）、自分が傷ついたり、泣かせた相手に対して、素直に頭を下げることですらできるよ

うになりました。

こうしてさらに、五年の時間が駆け足で、通り過ぎて行きました。この間、ペルラは昼間の大半を健やかに成長する妹を見守ることに費やし、残った時間で本を読み、薬草を育てました。

そして、夜はベッドの中で、忠実な召使が愛情深い母親のように、自分のそばから離れようとしない病と死を、静かな目で見つめました。

それは幸福と呼べるほど華やかではなかったかもしれませんが、まずまず幸せと言っているいい時間でした。

しかし、姫君たちの穏やかな日々は、長続きしませんでした。

ペルラは年頃の十六歳になり、アンブラが十歳から一歩足を踏み出したその年に

二人の父親である王が、病に倒れたのです。

第三話『塔の上の生贄』に続く。

第二話 『 姫君である宝石、ふた粒 』 (後書き)

風邪をひいたせいで、更新が一日遅れました。

あと、文章の量を減らしたせいか、展開が遅くなったかも(汗)



第三話 『白髪の魔女、檻の中の小鳥』 (前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/s  
t/sst.php?act=dump&app:cate=or  
iginal&app:all=21573&app:n=0&a  
pp:count=1
```

### 第三話 『白髪の魔女、檻の中の小鳥』

日の出と共に、床に伏せた王は、太陽が西の地平線に隠れても目覚めることはありませんでした。

急いで呼ばれた国一番の名医は、国王の脈を取るなり、言いました。

「黒い服を着たご婦人が、枕元に立っておられる」

それは、医師たちの間の言い回しで、もはや打つ手なしと言う意味でした。

愛する妻の死、望まぬ結婚、二人の娘がもたらした喜びとそれ以上の苦悩。

あい続く心労が、もはや若くない王の体から、病気に抵抗する力を完全に奪い去っていたのです。

ペルラ姫は、自分も病の身でありながら、着きつきりでお父上の看病をし、片時もそばを離れませんでした。

アンブラ姫も隣りに座っていましたが、心配しているのは、眠り続ける父ではなく、眠ろうとしない姉姫の方でした。

王宮の大広間では、大臣たちが姫君たちとはまた別の理由で、胸を痛めておりました。

真っ白な髭と髭とくっつけて、話し合うのは、王がお亡くなりになった後のこと。

誰が、この国の玉座を引き継ぐのか、それが問題でした。

大臣たちの禿げた頭を悩ませていたのは、二人いる姫君のどちらにも大きな長所と短所があったことでした。

姉のペルラ姫は英明ですが、生来病気がちで明日をも知れぬ身です。

妹のアンブラ姫は生まれながらの暴君ですが、丈夫で風邪一つ引いたこともありません。

議論はまるで自分の尾を追いかける犬のように、同じところをぐるぐる回り続けました。

それでも、一晩眠らず話し合っているうちに、次第にアンブラ姫を王におす者が増えていきました。

皮肉なことに、ペルラの教育がアンブラを変えたことが、玉座をかけた天秤を、妹姫の方に傾けたのです。

そして、アンブラ姫を支持する者たちを、さらに勢いづかせるような出来事が起こりました。

国王が倒れたその日を境にして、さまざま妖しいものが王宮の中に姿を見せるようになったのです。

侍女らは人間の顔をしたネズミたちがひそひそ話をしているのを見たと言い、料理人は小鬼が煮込み料理を盗み食いしたと言いました。

青白い顔を血で濡らした亡霊らが昼夜の区別なく王宮の廊下を出歩き、姿の見えない呻き声や泣き声が至る所で聞こえました。

数ある怪談の中でも、特に不気味な出来事は、三日目の夜に起こりました。

その晩、年寄りの召使いが、国王の看病をするペルラ姫たちのために夜食を持ってきました。

寢室を覗いた召使いは、姉妹の影が一つ寄り添っているのを目を細めました。すぐに奇妙なことに気付きました。

寢室の燭台は姫君らの右手に置かれてありました。それなのに影は真後ろに伸びていたのです。

よく目を凝らせば、地面に落ちていたのは影ではありませんでした。

蟻のように黒く小さな生き物たちが寄り集まり、少女たちの影を形造っていたのです。

無数のきらきらと光る目を見つめられ、召使いは悲鳴を上げて逃げ出し、絨毯に躓いて気を失いました。

こうしたことが重なるうちに、廷臣の中に暗い感情が頭をもたげるようになりました。

麴がパンを膨らますように、王宮に跋扈する妖物は人々の心に眠る猜疑心や偏見を膨らませたのです。

そしてあるとき、誰とも知らぬ口が囁きました。

「知っているか。ペルラ姫が生まれになる前、姫の母君はお山の聖者殿のもとへ、子宝を祈願しに行ったそうなの」

別の口が、その言葉に応じました。

「俺は見たぞ。聖者の住処に至る石段の上で、姫の母君、前の王妃さまが目に見えぬ何者かにひざまずき、祈るのを……その後だ、程なくして姫さまがお生まれになったのは」

この話を耳にした産婆が言いました。

「わしは見たのじゃ。黒い衣を着た乙女が、お妃さまの枕もとに立つのを。去り際に、その乙女は、生まれたばかりの姫さまの頭を撫でていったが、その指は血と肉ではなく、磨かれた骨で出来ておった。わしは、恐ろしくて息もできんかったわい」

前の王妃の葬儀に参加した神官の一人が、控えめに呟きました。

「拙者は見た、あの葬儀の最中、我が王のお傍に、黒い衣のご婦人が立って、何事が囁いたのを。拙者は、王族のどなたかと思つたが、顔を上げた瞬間、そのご婦人の顔を隠していた絹がはためき、その下にあつたのは……いや多くは申すまい。とにかく、王が姫君にあの哀しげな名前を点けられたのは、その直後であつた」

そして、アンブラ姫のお付きの侍女が、

「あたし見たわよ！ 何時だったか、アンブラさまが癩癩を起されて、お城に火をつけようとしたことがあつたわ。ペルラさまが妹さまを捕まえて、止めさせたんだけど……そのとき、アンブラさまの持っていた蠟燭から、火がペルラさまの服に燃え移つたの。でも、あのお方は傷一つつかなかつた！ 髪の毛一本焦げなかつたわ。ええ、そうよ。わたしは見たのよ！」

と、興奮に顔を赤らめ、さも得意げに新米の侍女の耳に吹き込みました。

当時、姫の髪の毛の焦げる匂いに取り乱し、泣き出したことも忘れて……。

宮殿で働きはじめたばかりの少女は先輩の言葉を真に受け、それをまた他の友人に話しました。

噂はまるで生き物のように、人間の口から口へと渡り、その都度、宿主の脳から様々な妄想や思い込みを取りこんで成長しました。

こうして、二日と経たぬうちに、宮殿の片隅で羽ばたいた一つの言葉は、空を覆い尽くすような怪物に生まれ変わっていたのです。

人々は、ペルラ姫の白い髪や銀色の瞳に、美しさだけではなく、

不吉な影や薄気味悪さを見出すようになっていました。

こうなると、今まで気にもしなかった姫の些細な性癖も、魔女の特徴のように思えてきます。

「姫は薬草を育てるのが好きだが、あれは魔法の材料なのではないか？」

「誰にも馴れなかったアンブラさまがなついているのは、魅了の魔力に違いない」

中には、「母上に続き、お父上が病に倒れたのは、もしや……」などど不届きなことを考える者まで現れました。

最初の頃こそ、このような根も葉もない噂に対してうなずく者は余りいませんでした。

しかし、お父上の病状が悪化するのに従って、噂を聞いて首を横に振る者は減り、上下に動かす者が増えていきました。

そして、速やかな毒のように、噂は国の隅々に行きわたり、もはやペルラ姫を女王に望む者は、ほとんどいなくなったのです。

王が床に着いてから、太陽と月が七回、王宮の上を横切りました。その日、王国を支えてきた大きな柱が、音も立てずに、崩れ落ちました。

国王は、ついに後継者を示さず、愛する娘たちと言葉を交わすことすらなく、眠ったまま息を引き取りました。

残された人々は、しゅくしゅくと王の葬儀を上げ、その後に盛大に新しい女王の即位を祝いました。

大きな王国の大きな玉座には小さなアンブラ姫が、居心地悪そうに座っていました。

母上である王妃さまは後見人となり、姫が大人になるまでの間、娘に代わって国を治めることになりました。

そして新女王即位の宴会が終わったその夜、鬼灯色のドレスに身を包んだ王妃が、ペルラ姫の部屋にやってきました。

ペルラは宴を欠席し、まだ身には喪服を、目には涙を留めたままでした。

王妃は姫の私室を舐めまわすように眺めた後、言いました。

「最近の王宮のうるさいこと、まるで蜂の巣を投げ込まれたみたいだよ。立て続けの騒ぎは、さぞかしその身体に心配だろう？」

「いいえ、お父さまのことで、頭がいつぱいで、何も耳に入りませんでした」

ペルラは泣き疲れ、しかしなおも美しい顔を横に振りました。

王妃は、まるで娘の言うことを聞いていない様子で「そうかい。そうかい」と一人うなずきました。

「とにかく、この宮殿は騒がしすぎる。こんなところにおいては、治る病気も治らないよ。そこで、お前の療養のため、王宮の北にある古い塔を開けておいた。しばらくあの塔で暮らして、静かに病気を治してみてはどうだい？」

ペルラ姫は数秒の間、静かに考えこみ、その後で「お義母さまが、そうおっしゃるのでしたら……」と、大人しく申し出を受け入れました。

王妃の狙いは明らかでした。

アンブラが玉座に着いた今、自分の娘よりも年上の姫君が王宮にいては、何かと都合が悪いのです。

そこで、ペルラが誰にも会わないように、王宮の外れにある塔に死ぬまで閉じ込めようと思ったのです。

聡いペルラは、こうした王妃の思惑を知りながら、あえて逆らお

うとはしませんでした。

一言でも不満を漏らせば、その言葉は小さな不和の種を生み出します。

心に野望を秘めた者がその種を見出せば、かならず陰謀の水を注ぐでしょう。

そして、種から生えた剣の形をした根が国を真つ二つに引き裂くことになるのです。

そのとき、苦しむのは罪もない国民であることが、ペルラにはよくわかっていました。

気丈で我慢強いペルラ姫でしたが、二回だけ堪え切れずに、涙をこぼしたこともありました。

一度めは、半身のように愛していたアンブラと永久に引き離されたとわかった時。

二度めは、父上と母上の形見である、一着のドレスを奪われた時でした。

そのドレスは、お父上である国王が、ペルラの嫁入りに備えて、特別に作らせたものでした。

生地には最上の絹が使われ、スカートの上では銀のユニコーンと金の不死鳥の刺繍が踊り、裾や袖を輝かせるのは、夜空の星のようなダイヤ。

そして、ドレスの胸を飾るのは、ペルラの母上が故郷から持ってきた、一つの貝から生まれた七つの真珠で作られたボタンでした。

至高の素材を惜しげもなく使い、最高の職人たちが技術の粋をつくした、それはまさに世界でただ一着のウェディング・ドレスでした。

そのことを知っていた王妃は、「子を産むことはおろか、結婚も



出来ぬような娘が、こんな立派な服を持っていても、しょうがあるまい」とでも言わんばかりに、ドレスをペルラから取り上げました。

妹のために一滴、父と母の形見のために一滴、涙をこぼした後、ペルラは泣くのを止めました。

そして、育てていた薬草と愛読していた書物、わずかな身の回りの物、幼いころから世話をしてくれた乳母を伴って、北の塔に移り住みました。

その石と煉瓦で出来た鳥かごの中で、さびしく、孤独に生涯を閉じる運命を受け入れたのです。

奇妙なことに……。

ペルラ姫が北の塔に移り住んでから間もなく、宮殿に溢れんばかりだった亡霊や妖怪たちが一匹残らず、姿を消しました。

廷臣らは顔を見合わせ、噂は正しく自分たちの判断は間違っていないなかったのだと、密かに安堵の息を漏らしました。

さて、時はさかのぼり、ペルラの母上が『死』に祈り、子宮に一粒の宝石を授かったころのこと。

一匹の大きな『怪物』が現れ、地上の人々を脅かしていました。

この怪物は竜のように恐ろしい奴で、しかも竜よりも恐ろしいことに、人間しか食べなかつたのです。

誰もが怪物を恐れましたが、誰もこの怪物の姿をはっきり見たことはありませんでした。

あるものは、怪物が豹のような姿をしていると言いました。またあるものは、牛のような角を生やしていると言いました。さらにあるものは、怪物の背中に猛禽の翼を見たと言いました。本当のことはわからず、人々はただ、星光を遮る黒い毛皮や夜空に響く雄叫び、闇の中に引きずり込まれる悲鳴と輝く金色の瞳で怪物の訪れを知るしかありませんでした。

ただ一つ確かだったのは、この怪物が途方もなく強く、信じがたいほど殺しにくいと言うことだけ。

剣や槍を携えて、怪物退治に出かけたものは数知れず、しかし帰ってきたものは一人もいませんでした。

不死身の竜であれば、怪物を殺せるかもしれないと考え、海を越えて竜を探しに出かけた者もいました。

しかし、苦勞の結果わかったことは、怪物と竜が、どうも喧嘩友達のような間柄だということだけ。

言いだしっぺの勇者が竜に食べられたあとは、誰もこのアイディアについて語るうとはしなくなりました。

その間も、人間の努力を嘲笑うように怪物は、襲撃を繰り返しました。

鋭い爪と牙を逃れる方法は一つのみ、毎日一人ずつ、怪物に生贄を捧げることだけでした。

生贄を断って、戦うことを選んだ場合は、怪物はさらに荒れ狂い、村や街、ときに国を丸ごと食べつくすことすらありました。

ちょうど、ペルラ姫が塔の形をした牢獄に閉じ込められたころ。

この恐ろしい怪物が、ペルラたちの国へやってきたのです。

怪物の到来を察することは、簡単でした。

つぎつぎに空になる村、街道に置き去りにされたぼろぼろの馬車。

それなのに金貨一枚手をつけられていない宝箱、無傷の馬や家畜間もなく、怪物はついに宮殿のある王都のそばまでやってきました。

夜な夜な怪物は都の壁を越え、一人また一人と住人たちをさらって行きました。

王妃と大臣たちは一縷の望みを託して、ぴかぴかの槍と鎧で武装した兵士たちを差し向けました。

しかし、予想していた通り、槍は砕かれ、鎧は引き裂かれ、兵士たちは一人も戻ってきませんでした。

すぐさま、王宮で会議が開かれ、すばやく結論が下されました。

その日の内に、都の住人の名前を書いた札が作られました。

札は大釜の中に放り込まれ、王妃その人が槍を握り、釜の中の札を一枚刺しました。

そして、札に名を書かれた家には、生贄の証である白い旗がはためき、その夜、一人の人間がこの世から消え去ったのです。

こうして恐るべき儀式が繰り返されました。

都に住む人々は、生贄の儀式が行われる昼に一回、怪物が忍び寄る夜にまた一回、心臓が止まるような恐怖を毎日味わいました。

しかし、浮世から切り離されたペルラ姫は、このような国民の悲しみや苦しみを全く知りませんでした。

姫が怪物や儀式のことを知ったのは一月たったころ、三十人余りが怪物の胃袋に消えた後のことでした。

その日、乳母に髪をすかせていたペルラは、くしを握る手が震え、冷たい滴が自分の髪に滴り落ちるのを感じました。

振り返ったペルラは、乳母が堪え切れずに、嗚咽と涙をこぼしているのを見ました。

血色の好い乳母の顔は青白くやつれ、ふっくらとした頬から肉がごっそりと落ちていました。

「乳母や、どうしたの？」ペルラは聞きました。「この間まで、愛娘が結婚すると言って、あんなに喜んでいただけではないか？」

「おお、姫さま。そのことでしたら、もう終わりました。あの娘はもう結婚することはありません」

「まさか……破談になったの？」心配げに、ペルラが言いました。

「いいえ！ わたしの娘は、もう誰とも結婚することは出来ないんです！ 私の可愛い孫を生むこともありません！ あの可愛い顔で笑いかけてくれることも、もう二度と、二度と……あの子は死ぬのです。今夜、死ぬのです！」

堤を破られた河のように、言葉があふれ出しました。

乳母は全てを話しました。

王国を襲った怪物のことを話しました。

一日に一回行われる儀式のことを話しました。

そして、自分のたった一人の娘が今夜の生贄に選ばれたことを話しました。

ペルラ姫は、大地が雨水を吸い込むように、乳母の言葉を受け止めました。

そして、全部聞き終わった後に、乳母を安心させるように、微笑みながら言いました。

「乳母や、お忘れではないかしら？ 貴女の娘は一人じゃないわよ。昔、言っていましたね。赤ん坊の頃、私は貴女の左のお乳を吸い、自分の娘は右のお乳を吸っていたと。ならば、貴女は私の母親も同じ。貴女の娘は、私の姉妹も同然です」乳母の痩せた頬を撫でて言

いました。「こんな形でしか、恩返しができないけど……貴女の娘の代わりをさせてもらえるかしら、お母さま？」

「おお、姫さま……もったいのうございます！ もったのうございます、姫さま！」

一滴ずつ流れていた涙が、滝のように乳母の両眼からこぼれ落ちました。

しかし、ペルラ姫を引きとめようとはしませんでした。決して、しませんでした。

ペルラは、何も言わずに、白髪の増えた乳母の頭を優しく、胸に抱き寄せました。

第四話『 夜の風、姫の夢 』に続く。

第四話 『夜の風、姫の夢』 (前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/st/sst.php?act=dump&app:cate=original&app:all=21573&app:n=0&app:count=1
```

#### 第四話 『夜の風、姫の夢』

姫と別れの抱擁と言葉を交わしたあと、乳母は転がるように塔の階段を駆け下りました。

宮殿の通路から通路へと走り、門と言う門をくぐり、掴みかかる兵士たちの腕をかくぐつて、ついに大広間に辿り着きました。

大広間では、今まさに明日の犠牲者を決めるための儀式が始まっています。

次なる生贄の名前を刺し貫こうと、槍を掲げる王妃の前で乳母は叫びました。

「皆さま、お聞きください！ ペルラさまが生贄に志願しました！ わたしの娘の代わりに、今宵の生贄になってくださるとおっしゃったのです！」

一瞬、大広間からすべての音が失われました。

その次に起きたどよめきの波は、宮殿を土台から揺さぶるほどでした。

誰も彼も、呼吸する暇も惜しんで話し続ける中、王妃はただ一人立ち尽くしていました。

仮面のごとく顔を白く強張らせ、息を殺し、手の中の槍を軋むほど強く握りしめながら。

そして、長い長い沈黙の後に、深く深くため息をつきました。

さて、大広間の騒動の後、ただちに王国の重鎮が呼び集められました。

王が倒れた日のように、大臣たちは禿げ頭をつき合わせて、再び話し合いを始めました。

しかし、今度の会議は前回のよう長引くことはありませんでした。

先王の長子を塔に閉じ込めたことは家臣たちの良心に釘を打ち込み、魔女の恐怖は石のように彼らの背中に押し掛かっています。口では嘆きつつも、大臣たちは心の中で、生かすことも、殺すこともならぬ不安の種を厄介払いできるのを密かに喜んでいたので。日の沈む前に、会議は全会一致で、ペルラ姫の意見を支持することに決まりました。

その日の夕餉に、宮殿の人々はペルラのために小さいが豪華な宴を開きました。

宴会の席で、ペルラは人形の微笑みを被ったまま、自分をほめたえる貴族たちの言葉を受け流し、心のこもっていない抱擁や口づけを受け取りました。

宴の参加者たちが、次々に別れのあいさつを済ませる中、最後に残ったのは王妃でした。

王妃は長いこと迷った末に言いました。

「ペルラよ。ペルラよ。我が娘よ……」

そして機械仕掛けのからくりのようなぎこちない動きで、ペルラの肩に腕をまわしました。

こうして、王宮の住人たちは、彼らの王の娘の死を受け入れました。

ただ一人、王国の所有者であるはずの、小さな女王アンブラを除いて……。



ひと月の間、アンブラは母親に言われるまま、大人しく女王の役を演じていました。

王妃も大臣も、自分たちの決断は正しく、アンブラは成長し、変わったのだと思いました。

しかし、それは間違いでした。大きな間違いでした。

いかに小さくなるうとも火は熱く、爪を引っ込めようと虎は虎なのです。

その夜、アンブラは自分の部屋で食事を取っていました。

姉姪が生贄に志願したことを、女王に知らせるべきではないと、皆が判断したからです。

しかし、どんなに上手にすくつても、水は指の間からこぼれ、頑丈な堤防が小さなアリ一匹のせいで崩れることもあります。

給仕をしていた侍女（そう、得意げにペルラ姫の噂を流していたあの侍女です！）が、うっかり口を滑らせたせいで、アンブラは自分が騙されていたことを知りました。

すると、さあ大変です！

小さな女王は、この世で何よりも嘘と侮辱を憎んでいます。

そして、一ヶ月の間ため込んだ分、その怒りの爆発は凄まじいものでした。

アンブラはテーブルの上の料理を全て叩き落とすと、駆け付けた兵士を、まだ中身がたっぷり入っていたスープの壺で殴り倒しました。

そして、気絶した兵士から剣を奪うと、たった一人で姉姪を助けに飛び出したのです。

さて、怪物が現れるようになってから、生贄が逃げたり、自殺をしたりしないように、兵士たちが見張りにつくことになっていました。

王宮にいる者は、ペルラが逃げるとは露ほども考えていませんでしたが、それでも念のために三人の兵士たちが、北の塔に派遣されました。

この運の悪い兵士たちに、燃え盛る怒りの火の玉となったアンブラが、猛然と襲いかかりました。

小さな女王は、抵抗する暇も与えず、三人の兵士を切り伏せ、蹴り伏せ、叩き伏せ。

切り傷、擦り傷、やけどにたんこぶと、ありとあらゆる傷を与えた上で、塔の窓から投げ出しました。

人間離れた怪力で、塔の三つの階にある三枚の扉を全部叩き壊し、ついに四階にあるペルラの部屋についに辿り着いたのです。

これが普通の生贄であれば、アンブラは姉を助け出し、とつくに逃げのびていたでしょう。

ただ一つ、小さな女王にとって誤算だったのは、ペルラが助けを拒み、その場からがんとして動こうとしなかったことでした。

そして、姉姫の説得に手間取っている間に、母上である王妃が、もっと多くの兵士を連れてやってきました。

アンブラは暴れました。わめきました。

自分を捕まえようとする兵士たちに噛みつき、引つ掻き、ペルラの腕にしがみつき、その袖を引き裂いてしまいました。

そして、ついに五人の屈強の兵士たちが傷だらけになりながら、暴れる幼い女王を姉姫から引き離したのです。

塔から引きずり出される瞬間、アンブラは絶望の雄叫びを上げました。

その声の凄まじいこと、まるで心臓を生きながら、抉り出される動物の悲鳴のようでした。

一粒以上、泣いたことのないペルラさえも、妹の叫びに胸が張り裂け、涙が次から次へとこぼれて止まりませんでした。

乳母はドレスの着替えをすすめました。ペルラはこの申し出を断りました。

引き裂かれた袖に、まだアンブラの指のぬくもりが残っているように思えたからです。

最後まで残った乳母も部屋から出ていき、ペルラは塔に一人取り残されました。

日は完全に、地平線の彼方に沈み、世界は闇に沈んでいました。今まで怪物に捧げられた生贄たちは、この時間になると、泣きわめいて王妃をののしるか、兵士たちから逃げようと無駄な努力をするか。

いずれにしても、ひどく取り乱したものです。

しかし、ペルラは……。

ペルラの心は、風のない時の水面のように、静まり返っていました。

その一生を、死と向き合いながら生きてきた姫にとって、死の恐怖は何度も入れたお茶のように味気ないものになっていたのです。

心から、自分の死を悼んでくれるのも、妹と乳母だけ。

思い残すことと言えば、丹精込めて育ててきたアンブラと薬草のことのみ。

死を恐れることはないが、自分の人生を愛したこともないペルラ姫なのでした。

それでも時おり、静かな水面の下を、小さな魚のような感情が、ちよろちよると顔をのぞかせることがありました。

感情の名前は、好奇心。

これまで、ペルラにとって死とは熱や苦痛、悪夢のような幻覚のあとにやってくる夢のない暗黒でした。

しかし今晚、姫のもとを訪れる死には、はつきりした形が持ち、温かい血と肉を具えているのです。

ペルラは部屋に置いてある本棚の中から、一冊の本を抜き取りました。

それは幼い頃、太陽の下に出ることもできず、哀しげに外で遊ぶ子供たちを見ていたペルラに、父王が与えた本でした。

いく度も繰り返しめくられ、擦り切れたページを開くと、鮮やかな筆使いで描かれた野獣たちの姿が目の前に現れました。

草原に立つ黄金の獅子、森林の中を歩く宝石のような豹、美の化身のごとき虎。

大鷲は翼を広げて山脈を越え、牡鹿と巨大な牛は角をぶつけて雌たちの愛を誘います。

ペルラが死ぬほど憧れ、しかし死んでも手に入れることのできない強靱な肉体を持った、美しく、気高い獣たち。

果たして今宵、自分の肉を食べ、骨を噛み砕くという怪物は、どの動物に似ているのだろうか……。

羊皮紙の上の獣を撫で、想像に耽るうちに、姫は眠りの境界線を踏み越えました。

そして夢と現の狭間でさ迷ううち、ペルラは気付いたのです。

来たと！

月が天の頂点で輝くころ……。

その獣は、まるで王のような足取りで、森の中から歩み出ました。力強い後ろ足で大地を蹴ると、馬よりも速く、生贄の待つ都へと一直線に走り出しました。

獣の接近を察した都の鳥たちは、夜にもかかわらず、一斉に飛び立ちました。

犬たちは威嚇の唸り声を上げ、獣が街中に入った途端、尻尾を巻いて家に逃げ帰りました。

猫たちは犬のように逃げ出したりせず、夜のように優雅な影をほればれと眺めていました。

賢い彼らはあの強くも大きな獣が、自分たちを決して傷つけないことを知っていたのです。

冷たく白い星と月の光に照らされた都は、遙かな昔に滅びた廃墟のように見えました。

都の住人はベッドの中で布団を被り、眠れない夜が早く過ぎることを祈っていました。

兵士たちは兵舎の中で酒と賭け事におぼれ、誰も夜の見張りに立つとうとしません。

泥棒たちさえも、仕事を休み、息を殺しながら、夜明けを待っています。

人間たちを脅かすために、わざと鉤爪で石畳を引っ掻きながら、獣は走りました。

膨れ上がる人間たちの恐怖を、鋭い耳と鼻で楽しみながら、街を駆け抜けました。

そして、何百年もの間、一人の敵も通さなかった宮殿の城壁に近づくと、これを一息に飛び越えました。

宮殿の中に入ってあと、獣は寄り道を繰り返しました。

庭師たちが心血を注いだ庭園で爪をとぎ、花壇の花を丁寧に踏みならしました。

王が妃のために立てた、四季の離宮を珍しげに眺め、海を模して造られた湖に浮かぶ月をすくい、そしてついに辿り着いたのです。

姫君の塔の上にはためく白い旗を見つけると、獣は鳶の這う壁に爪を食い込ませ、まるで地面を歩くように容易に塔を這いぼつていききました。

一歩、また一歩、最上階から漏れるオレンジ色の明かりを目指して……

冷たい夜風に頬を撫でられて、ペルラは目を覚ました。

先ほどまで、部屋の中を照らしていた蠟燭は、風に吹き消されていました。

母の手のように優しい風の出所を探ると、開かれた窓があり、窓

の先には星明かりに照らされたバルコニーが見えました。  
そのバルコニーの上で、くろぐろと横たわっていたのは、姫君の  
夢。

怪物は金を溶かしたような目を輝かせ、白い牙を剥いて、ペルラ  
に笑いかけました。

第五話『名前のない怪物』に続く。

第四話 『夜の風、姫の夢』 (後書き)

本当は怪物との会話まで、書こうとしたのですが……。

書きはじめたら、予想以上に伸びて、前後編に分けることにしました(汗)

次の更新は、明日か水曜日になる予定です。



第五話 『名前のない怪物』 (前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/s  
t/sst.php?act=dump&app:cate=or  
iginal&app:all=21573&app:n=0&a  
pp:count=1
```

## 第五話 『名前のない怪物』

それにしても、ペルラ姫と怪物はなんと違って見えたことでしょうか。

姫君の瞳は銀の水盤でしたが、怪物の眼は黄金の火鉢でした。

姫君の髪と肌は月光にはえる白でしたが、怪物の毛皮は全ての光を吸い取る黒でした。

まるで、鏡で映したように正反対な一人と一匹なのでした。

後ろ脚で立ちあがりながら、怪物は部屋の中に入ってきました。

星明かりで縁取られたその背中には翼の影、窓をくぐる際に牛のような角が見えました。

一言も放ちませんでした。怪物の姿は言葉よりも能弁に、その意思を伝えていました。

すなわち、恐れよ、怖がれ、そして俺を憎めと……。

しかし、ペルラ姫は静かに立ち上がると、消えた蠟燭に火を点しました。

そして、まだ影の中に留まっている怪物に向かって言いました。

「どうぞ、明かりの中へ。このままでは、お顔がよく見えません」

少しずつ姫との距離を詰めていた怪物は、不意を衝かれたように動きをとめました。

怪物はいつも、自分が食べる生贄たちの反応を楽しんできました。

ある者は泣きわめいて命乞いをし、死の瞬間を一秒でも引き延ばそうとしました。

またある者は隠し持った武器を取り出し、最後の、激しくも無駄な抵抗を始めました。

しかも、こんな風に静かに語りかけてきた者は、一人もいませんでした。

躊躇いながら、怪物はゆっくりと明かりの輪の中に入っ  
ていきま  
した。

蝋燭の火が照らされた怪物の顔は白く、男のようにも、また女のようにも見えませんでした。

しかし、その体は夜のように黒く、たくさんの獣を掛け合わせたような形をしていました。

怪物は身体を揺らしながら、ペルラに近づきました。

姫の周りを歩き、ネズミをなぶる猫のような声で言いました。

「お前が今夜の生贄か？　なんて痩せているんだ。その手についているのは、骨と皮か。肉はどこへ行った？」顔を近づけ、臭いをかいで「うへえ、なんだこの匂いは？　お前、薬臭いぞ！」

怪物はペルラの顔を覗き込み、そこに嫌悪や恐怖の色が浮かぶことを期待しました。

この時、少しでも悲鳴を上げるか、目をそらせば、姫は怪物に食べられていたことでしょう。

しかし、ペルラは怪物の眼を見つめ返すと、おもむろに手を伸ばし、その顔を触れ、

「聞いていたほど、怖いお顔ではありませんね。まるで人間みたい

……」

「な、なに？」

予想外の言葉に面喰った怪物は、一瞬どうしたら良いのか、解らなくなりました。

ペルラは立ちあがると、怪物が凍りついているのを良いことに、「ああ、前足は鷲に似ていますね」体のあちこちを観察し「鬣はまるでライオン」触ったり「でも、お身体は豹に似て」抱きついたり「背中に生えているのは歪んでいるけど翼かしら？」つねったり「尻尾には鱗、まるで蛇のよう」引っ張ったりしました。

これには怪物もたまったものじゃありません。

「おい、よせ！」とか、「触るんじゃない！」とか、「羽を引っ張るな！」とか、抗議を試みましたが、夢中になっているペルラの耳にはまったく届きません。

とうとう、我慢できなくなった怪物は、「尻尾はくすぐりたいからやめろ」と叫んで、蛇の尾を掴んでいた姫を振りほどきました。

ペルラにさんざん弄くられた怪物は、もう戸惑うやら、恥ずかしいやら。

とにかく何とかして相手を驚かそうと、大口を開けて、血も凍るような雄叫びを姫に浴びせました。

ところが、ペルラは怯えるどころか、自分から怪物の口の中に頭を突っ込み、「まあなんて、鋭い歯！」と嬉しそうな声を上げました。

びっくりした怪物は、雄叫びを悲鳴に変えて、飛び退きました。そして水を被った猫みたいに蠟燭の明かりの外に逃げ出すと、気味悪そうにペルラの方を見ました。

「な、何なんだ、お前はっ？」

「私はペルラ。この国の先の王の長女にして、今の王妃の義理の娘、

そしてあなたの今宵の生贄です」姫は平然と答え「そうやって私を何かと問う、あなたこそ何者なのですか？」逆に聞き返しました。「俺はこの世で一番でっかくて、おそろしい怪物だ！」怪物は胸を張って言いました。

「それはあなたのお名前じゃないでしょ？ 私は人間ですが、人間は私の名前ではありませんよ？」ペルラはさらに問い掛けます。

「お、俺に名前はない！」怪物は少しうんざりし始めました。

「あなたはどこから来たのですか？ この国に来る前は？ 生まれた時はどこにいましたか？」

「昔のことなんか覚えていない！」

「では、お父さまは？ お母さまは？ あなたを生んだ人たちも、やっぱり怪物だったのですか？」

「俺に親なんかいない！ 生まれた時から一人つきりだ！」

この言葉を聞いた途端、ペルラはからからと笑い出しました。笑われることに馴れていない怪物は、いらいらしながら、怒鳴りました。

「何がおかしい！」

「だって、あなたの言っていること、矛盾しているんですもの」

「む、矛盾とはなんだ？」

「辻褄の合わないことですよ」

「俺の話のところが、辻褄が合わないと言っただっ？」

「では、昔のことを何も覚えていないのなら、何故ご自分に親がないと言いきることが出来るんですか？」

言われてみれば、確かにその通りです。

思わず納得してしまった怪物は、ぬぬぬっと唸ったきり、何も言えなくなりました。

そこへ、ペルラ姫は畳みかけるように、質問を重ねていきました。

「あなたは、人間しか食べないそうですね」

「そうだ！」

「その理由は何ですか？」

「そ、それは……」

「他にも食べ物一杯ありますよね？」

「それがどうした……」

「別に、人間じゃなくて魚や野菜を食べても良いですよ？」

怪物の顔は、恥ずかしさと腹立たしさで、もう真っ赤です。

頭から湯気は出ていますが、口からは言葉がさっぱり出てきませ  
ん。

何とかペルラに言い返そうと、日ごろ全く使わない脳みそを必死  
に回転させました。

その時、怪物は突然閃きました。

これなら、この生意気な娘も言い返せまい！

「おい、お前は矛盾しているぞ！ さっき、お前は俺の牙が、とて  
も鋭いと言っていただろ！ それなら、俺の牙が人間を食べるため  
に、出来ていると言うことになるじゃないか？」

「なるほど、そういう考え方もありますね……」

ペルラが考え込んだのを見て、怪物は心の中で喝采を叫びました。  
ざまあみる！

余計なことを言われる前に、こいつを頭からバリバリ食べてやる  
う、そう思って、怪物は大口を開けて、姫に近づきました。

しかし、ペルラはすぐに頭を上げると、

「でも、熊も鋭い牙をしているけど、肉よりも木の実や山菜をたく  
さん食べますよね。猫も肉ばかり食べるわけじゃないし、宮殿で

飼っている猫たちは、みんな蜂蜜につけた胡桃が大好物でしたよ？」  
「ぐぐぐう……」と怪物は、また返事に困りました。

「それに肉と言っても、豚や牛の肉もありますよね？　なぜ、人間の肉じゃないといけないのですか？」

「うがががっ！」

混乱して頭を引っ掻いたり、身体の毛を引き抜いたりしている怪物を見る内に、ペルラは何だか怪物のことが可哀相になってきました。

「あのひょっとして……あなた、自分のことを何もご存じないのですか？」

ペルラに悪気は全くなかったのですが……。

この一言は、怪物のプライドにとって致命傷になりました。

限界に達した怪物は、うががあつと雄叫びをあげると、自分の腹の肉を噛んで丸まり、ごろごろと転がり出しました。

そして部屋の片隅にぶつかり、そこで横になってふて寝を始めました。

ペルラは立ちあがり、怪物の後ろを追うように部屋の隅に向かって歩き出しました。

大きな毛玉になって寝っ転がっている怪物のそばに、ちよこんと腰を下ろすと、

「ねえもし、あなたは自分が何者なのか、興味はありませんか？」

返事は、大きな嘘のいびきでした。

ペルラは我慢強く、怪物のそばで話し続けました。

「私はたくさんの本を持っています。もし、私を召し上げるのを待ってもらえるのであれば、その本の中から、あなたの正体を探してあげましょうか？」

怪物はまだ寝たふりをしています。

でも、山猫のように尖った耳が、ぴくぴくと動いていました。

「人間よりも、あなたの口に合うような食べ物があるどうか、調べてあげることできますし、そうしたら美味しいものも一杯食べられますし……」

怪物は薄目を開けて、ちらちらとこっちの方を盗み見るようになりました。

蛇の尻尾が、犬みたいに右に左に落ち着きなく動き始めました。

ペルラはもうひと押しだと思いました。

「また私のような女の子に出自を聞かれて、答えられないのはお嫌でしょ？ ご自分の正体がわかれば、もうこんな嫌な思いはしなくて済みますよ」

とうとう、怪物は寝たふりをやめて、ごろりと転がって姫の方を向きました。

握りこぶしのように大きな二つの眼で、興味深そうにペルラのことを見つめていました。

「お前の腹はわかっているぞ、ペルラよ、王の娘よ……昔、砂漠で食べた詩人の男から、こんな話を聞いたことがあったなあ」

鋭い前足の爪で、ぽりぽりとお腹を掻きながら言いました。

怪物の声は低く、恐ろしく、脅すような響きを秘めていました。



「昔、ある国に、王妃を娶っては、一晚過ごした後に殺す王さまがいたそうだ。一人の賢い娘がこの王さまに嫁いだのだが、その娘は毎夜一つ面白い話を王さまに語り聞かせては、一日分の命を買い取ったそう。そうして一日が十日になり、十日は百日、百日が千日となつて、その娘はついに一生分の時間を手に買い戻したとか……。今日は、お前の口車に乗ってやろうが、俺はその王さまのように気が長くないぞ。もし、お前やお前の持つてくる食べ物に飽きたら……」

「ええわかっております」につこり笑つて、ペルラはうなずきました。「その時は、どうぞ私をお召し上がりください」

第六話 『 奇妙な朝、ペルラの決断 』 に続く。

第六話 『 奇妙な朝、ペルラの決断 』（前書き）

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/st/sst.php?act=dump&app:cate=original&app:all=21573&app:n=0&app:count=1
```

## 第六話 『 奇妙な朝、ペルラの決断 』

さて、眠れぬ怪物の夜が明けて、地平線の向こう側で日の光が伸びを始めたころ。

うつすらと朝日に照らされた山吹色に輝く宮殿から、三人の兵士たちが姫君の塔を目指して歩き出しました。

この兵士たちは、昨夜少なからぬ労力と多大な血を流した上で、獣のような女王を取り押さえたあの逞しい男たちでした。

幼い女王の怨念と怒りが、乗り移ったせいでしょうか？

ベッドで横になった後も、瞼を閉じるたびに恐ろしい悪夢が次から次へと現れ、兵士たちは夜明けまでろくに眠ることもできませんでした。

やっと悪夢が立ち去り、うとうとし始めたと思ったら、今度は女王の母君がやって来て、兵士たちを寢床から叩き起しました。

そして北の塔へ赴き、ペルラ姫の遺体を引き取るように仰せつかった、と言っわけなのです。

「おお、我らが王妃のお優しいことよ！ あの方が早く地獄に落ちますように！」

兵士の一人が塔の扉を開きながら、毒づきました。

他の兵士たちも、その男をたしなめようとはしませんでした。みんな、同じことを考えていたのです。

兵士たちは熊のように逞しい肩を擦り合いながら、猫に忍び寄る鼠のようにそろりそろりと塔の階段を登って行きました。

男たちの足取りは重く、塔の頂につながる階段は長く、しかし到

着を永遠に引き延ばすことはできませんでした。

ついに姫君の部屋の前に立ち、食い散らかされた遺体を目にする  
と思っていた兵士たちの恐怖は、如何ばかりでしょうか？

そして勇気を振り絞り、扉を押し開け、その向こうに髪の毛一つ  
傷ついていない姫を見つけた兵士たちの驚きは、如何ばかりだった  
でしょうか？

お早うの言葉も忘れて、棒のように立ちつくす男たちの目の前で、  
今まで毛皮の絨毯のように見えていたモノが立ち上がり、大きく伸  
びをしました。

「ペルラ、ここはうるさくて気に食わん。俺はねぐらに戻るぞ」大  
きなあくびをして怪物が言いました。

「はい、ではまた今晚……」

のそのそと巣穴から這い出す熊のように、塔から出ていく怪物を  
見送ると、ペルラは我先に逃げようとして出口で詰まった兵士たち  
の方に目を向けました。

「あら、お早う、兵隊さんたち……ちょっとお願いをしてもいいか  
しら？」

（兵士たちは震えているのか、うなずいているのかわからないよう  
な勢いで、首をかくかくと動かししました）

「お義母さまと大臣たちに、大事なお話があるから、この塔に来て  
ほしいとお伝えください。私は疲れたから、皆さんが来るまで少し  
休んでいることにします」

そう言つとペルラ姫は、可愛く小さなあくびを漏らしました。

男たちが飛び出さんほど大きく目を開けて見つめているのもかま  
わずに、天蓋つきのベッドの上に横たわり、すやすやと眠ってしま  
しました。

驚き過ぎて頭が真っ白になった兵士たちは、ペルラ姫に命じられたままに宮殿に戻り、姫の遺骸の代わりに、その言葉を王妃に手渡しました。

続いてどれほどの騒ぎが起きたのかは、あえて言うまでもないでしょう。

ただちに惰眠を貪っていた廷臣たちが、心地よいベッドの中から引きずり出されました。

王妃を先頭に、ペルラ姫の乳母をしんがり、その間に大臣やら將軍を挟んで、人々は列を作って塔を登り、姫君の扉をたたきました。

ペルラの部屋はこれらの貴いお方たちで、ぎゅうぎゅう詰めになり、姫はベッドに腰掛けながら、居並ぶ王国の重鎮に昨晚の出来事を語り聞かせました。

さて、幼い頃から書物と物語に親しんでいたおかげで、ペルラは話し上手でした。

(王妃を除く)人々は姫の語り口に乗って、恐怖に歯を食いしばり、手に汗に握り、怪物の醜態に吹き出し、最後には当惑したようにお互いの顔を見つめ合いました。

ペルラ姫は凜とした声で、大臣や將軍たちに命じました。

「まずは私が怪物と約束した通り、この国の内と外を問わず、できるだけたくさんのお食糧を集めてください。一度に出す食べ物の種類だけ、その代わりに怪物の胃袋でも満足できるように量を多くしてください。いいですか、怪物が人間以外の食べ物に飽きるのを一晩引き延ばせば、一人の命が助かるのです。それから、これはもっと大事なことです……怪物に関わる書物や物知りの賢人を集めて欲しいのです。あの怪物の正体さえわかれば、もしかしたら、もう二度と犠牲者を出さずに済むかもしれません」

部屋からざわめきが消え、薄い氷のような沈黙が人々の口を覆いました。

今や貴族たちはお互いの顔ではなく、部屋の一方を見つめています。

その視線の先で、王妃はゆっくりと口を開き、低い声で張りつめた沈黙を破りました。

「娘や。今まで誰も姿すら見たことのない怪物の正体を探れると思っ  
つているのかい？」

「わかりません。今から、それを試してみるつもりです」

「ペルラさま、仮に正体がわかったとして、怪物に人食いをやめさせることはできるのでしょうか？」王妃のあとに続いて、大臣の一人が聞きました。

「わかりません。しかし、私が約束を守らせる限り、あの怪物をこの塔に引きつけておくことができます」

「では、姫さま。いつまで、あの怪物の気を引きつけておけるんでしょうか？」おそろおそろ、次の生贄の母親である乳母が聞きました。

「ああ、それはわかるわ、婆や。私の命が尽きるその時までよ……」

こうして、ペルラ姫と怪物の奇妙な生活が始まりました。

最初都の住人たちは、怪物と姫の間に交わされた約束を信じていませんでした。

今夜にも、怪物が気まぐれから約束を破り、ペルラ姫を食い殺して、次の生贄を要求すると思っていたのです。

しかし、一晩経ち、二晩経ち、三つめと四つめの夜が明けても……。

塔の上に昇った兵士たちが見つけたのは、空になったごちそうの皿と無傷の姫君でした。

ここでようやく、生贄の恐怖から解放された平民たちは、心から喝采を叫びました。

一方怪物の巣となった宮殿の住人は、憂鬱な顔で首を振り、ため息を漏らしました。

怪物が楽器の音を嫌ったせいで、音楽会や舞踏会は禁止になりました。

夜中に貴婦人や貴族の殿方が、庭園の茂みで密かに愛を交わすこともなくなりました。

夜更かしのお楽しみはすべて御法度。月が出ているうちに出歩くのは、もう命がけ。

窮屈な思いをしている貴族たちとは裏腹に、怪物は宮殿での自由を謳歌していました。

毎夜ねぐらから抜けだした怪物は、誰の目もはばからずに美しい庭を散策し、黒い太陽のようにペルラの塔を登りました。

そしてまさに王その人のようにシルクのクッションに座って、寶石や陶器の皿から、海や山の珍味美味を味わったのです。

怪物はペルラ姫との約束を守り、他の食べ物がある限り、人間に手出しをすることはありませんでした。

もつとも、たちの悪いいたずらを仕掛けるのはしよっちゅうでしたが……。

怪物のいたずらの標的になったのは、運の悪い侍女や執事たちでした。

怪物は彼らにわざと牙や爪を見せびらかし、悪趣味な冗談を囁きました。

（『おい、この肉はお前みたいに脂がのっているなあ？』とか『ちよつと塩が足りないぜ、お前のほっぺについている汗を舐めても良いか？』とか）

塔に昇った者は例外なく骨までがくがくと震え、降りる頃には立っているのもやつとの有様でした。

そしてみんな、こんな怪物と毎晩一緒にいるなんて、姫さまはどれほど心細く不便な思いをしているのだろうか、と胸を痛めました。

しかし、当のペルラ姫はちつとも心細くも無ければ、不便とも感じてもいませんでした。

それどころか、一生のうち、ペルラがこれほど充実した日々を送ったことはなかったと言っていていいでしょう。

毎日毎日、姫は日暮れと共に眼を覚まし、怪物が来るまでの時間を賢人たちと言葉を交わしたり、書物を調べることに費やしました。そして、怪物がやってくると、羊皮紙とペンを手に朝日が昇るまで、怪物と語り合ったのです。

ペルラ姫は、この仕事に夢中になりました。

姫君の目に映る怪物は、まるで神がその御手で削り出した黒い寶石。

おぞましさと美しさが絶妙に入り混じり、見る角度を変えるたびに違う色合いを見せ、見飽きると言うことを知りません。

ペルラ姫の手に握られたペンは、まるで働き者のハチのように羊皮紙の上で踊り、怪物の姿を言葉を、休むことなくスケッチや文字に変えていきました。



ところで、塔の頂にある部屋で相手のことをじっと見つめているのは姫君一人ではありませんでした。

ペルラが怪物を観察しているように、怪物もまた姫君を観察していました。

ペルラが怪物を理解しようとしている間に、怪物もまたペルラを理解しようとしていたのです。

ペルラ姫に傷つけられた自尊心は、癒えることなく怪物を苦しめていました。

その傷と痛みゆえに、怪物はこの世の誰よりもペルラに引きつけられていたのです。

ああ、恐怖を知らないペルラ、或いは恐怖を知り過ぎてしまったペルラ。

その白亜のような滑らかな顔に、どうやって感情という名の黒い傷をつけようか？

雪白のその心を、どうやって夜より戻す黒く染めることができるのか？

夜も昼も、寝ている間も起きている間も、怪物は考え続けました。そしてある日、ついに自分からペルラに話しかけたのです。

「おい、ペルラ。俺がこの塔に通うようになって、もうすぐ十日になるが、俺の正体について何かわかったか？」

「いいえ」と姫は正直に答えました。「ずいぶん調べましたが、まだ何も分かっていないも同然です」

今日この日まで、ペルラが集めた書物は数多、賢人もまた数多、しかし得られた知識はわずかでした。

書物と賢人が揃って語るには、怪物が姿を現したのは十六年前、ちょうどペルラが生まれたその年のこと。

それ以前は、怪物も、怪物に似たような生き物も、この世にはい

なかったと言つのです。

強いて言えば、怪物は伝説の竜によく似ていました。

鷹の翼と奇形の羽根、炎の鱗と闇の毛皮という違いはありましたが、二匹の獣は不思議と似通ったところがありました。

これを聞くと、怪物は鼻でペルラの言葉を笑いました。

「はっ、俺が竜の奴に似ているだつて？ 冗談じゃないね！」先ほどまで齧っていたダチヨウの丸焼きから顔を上げて「……まあ、良いや。お前と話しているうちに、俺の方はいろいろと思ひ出したぜ。今日はお前に俺の秘密を、一つ教えてやろうじゃないか」

「どんなことを教えて下さるのですか？」ペルラは興味に目を輝かせました。

「姫よ、お前は以前、俺がどうして人間の言葉を話せるのか、聞いたことがあつたな？」

今現在、こうしてペルラと話しているように、怪物は実に達者に人間の言葉を操ることが出来ました。

怪物と長い時間を過ごした姫は、怪物が大陸にある十の王国の十の言葉を全て話し、その知識はどんな賢人にも劣らないことを知っていました。

その中には、異国の宮廷作法や市場での宝石の値切り方など、本来怪物が知っているはずのない知識もたくさん混じっていました。

「ねた明かしをしてやろう。良いか。俺に食われた人間は、すぐに死ぬことはないのだ」

「それは……どういう意味でしょうか？」おずおずと姫は聞きました。

「ふむ、理屈はわからないんだが、俺に食われた人間は、しばらくの間、意識だけになって、俺の中に留まるのだ。その間、俺の眼を

通じてものを見、俺の耳を通じて音を聞き、俺と話をする事も出来るが、自分の意思で身動きすることだけは出来ない」

怪物は返事を待ちましたが、ペルラは何も言いませんでした。何も言えませんでした。

怪物の口から語られた残忍な事実が、姫から言葉を奪ったのです。始めてペルラの顔にひびを入れることに成功した怪物は、満足げにきざきざの笑顔を浮かべました。

「俺に食われた後、そのことに気がついて、泣きわめく奴もいる。怒る奴もいる。でも、面白いことにな、しばらくするとみーんな同じような反応をするんだ。最初、そいつらは独り言をはじめ。それから、俺に話をしてくれと頼むようになる。そうじゃないと、自分を保てなくなるのさ。それでも、みんな最後には消えていく……」

「もし、もし……」震える声でペルラ「貴方の中に誰が残っている間に、他の人間を食ったらどうなりますか？」

「おお、良いところに気付いたな！」嬉しそうに怪物が言った。「俺はこう見えても小食なんだ。一人食べれば一週間以上、いや一カ月以上、食べる必要はないのさ。それがどうして、毎日のように生贄を取っていたと思う？ 実を言うと、俺の中に一人以上の意識が入る余地はないんだ。一人入れば、一人消える。だから、腹の中にいる連中が、自分が楽になりたくて、他の奴らを身代わりにしたくて、俺をせかすのさ。さあ、早く食べる！ 人間を食べるとな！」

がはははと怪物は体をのけぞらせて笑い、ペルラは顔を覆って俯きました。

ひとしきり笑った後に、怪物は優しいとすら言える声で姫に話しかけました。

「この俺の中に黒々と燃える憎しみがある。ちりちりと内臓を噛む

炎がある。人間どもの憎しみや呪い、悪あがきの声を聞いた時、その黒い炎が少しだけ和らぐのだ。分かったか、ペルラよ、それこそ俺が人間を食う理由なのさ……」

怪物は姫の顔を覗き込み、そこに自分が残した酷く醜い恐怖の傷跡を探しました。

しかし……面を上げたペルラの眼は涙で光っていましたが、そこにあったのは混じりけのない悲しみ、海のように青く純粋な感情だけでした。

「では、あなたは寂しかったのですね……」

「なん……だと？」

怪物はまたしても姫への答えに窮しました。

ペルラ姫は白い絹のドレス越しに、自分の胸を押さえながら言いました。

「私も身に覚えがありません。この塔に来て、たった一人で部屋に残された時、話す相手もなく、聞こえるのは自分の声ばかりで、寂しくて、耐えきれなくて、胸の奥が火で焼かれるようにちりちりと痛みました。そんな時は、たとえ罵り声や恨みごとでも良いから、誰かに話しかけてほしかった。たった一言の言葉のために、恐ろしいこともできそうな気持ちになりました……」

そして、白い姫君は黒い怪物に聞きました。

「貴方は、寂しくなかったのですか？」と。

怪物は問いの答えを求めて、自分の中を探しまわりました。

一時も休まることなく燃え続ける黒い火の中を、山のように高く

積み上げられた骸を、その骸から得た分厚い知識の地層を隅々まで漁りました。

しかし、そのどこにもペルラの問いに、相応しい答えはありませんでした。

どうして、この小さな姫の目に自分の心を貫き通す力があるのか。どうして、こんなにも答えにくい質問ばかりすることが出来るのか。

悩みに悩んだ果てに、怪物の口から飛び出したのは、姫の質問とは何の関係もない言葉でした。

「お前は、なぜ俺を怖がらないんだ？」

「それはきつと、私に何もなくすものがないからですよ」「ペルラ姫は苦笑いを浮かべて言いました。「死を恐れる人は、死そのものを怖がるのではなく、死によって何か失うことを恐れているのです。私には何も失うものがありません。だから、貴方も怖くないのですよ」

「そんなバカな！ お前の言うことは矛盾しているぞ」怪物はいきり立ちました。「お前は王の一番年上の子供だ！ そのぐらい、俺だって知っている。この国にあるものは、全てのお前のものだ。なくすものがないなんて、有り得ない！」

「いいえ……お父さまがお亡くなりになって、私に残されたのは、この部屋と自分の命だけ。それすらも、私の思う通りにならないものばかりです」

そしてペルラ姫は怪物に、自分の奇妙な生い立ちを語りました。異国から嫁いだ母親が目に見えぬ恐ろしい何かと約束を交わして、自分が生まれたこと。

父親の再婚を、母親の違う妹の誕生を、そして父の死とその後の混乱、王妃との確執、塔の幽閉を話しました。

全てを聞き終わった後、怪物は再びペルラ姫の部屋の中を見渡しました。

塔の最上階は、今までと全く違った姿を怪物に見せました。絹の寝床や本棚は色あせ、灰色のレンガや天井の隅の蜘蛛の巣などが目につきました。

怪物は気付きました、ここは墓場なのだ。

わずかな副葬品と一緒に、ペルラ姫はここに生きながらにして埋葬されたのです。

姫の言葉か、部屋の景色か、それともその両方が切っ掛けになったのか。

何かが怪物の心の深く分け入り、黒い火を、骸の山を、亡霊の地層を貫き、その下に辿り着きました。

それは怪物の一番古い記憶、始めて人間を食べ、その知識を吸収する前の思い出、怪物が怪物になる前の……。

「ペルラ、外に行かないか？」

自分が何を思い出したのかも、思い出せずに怪物は言いました。

「外へ……ですか？」

「そうだ？ ペルラ、外へ行こう！ 本物の山を、川を見たくないか？ 壁も天井もないところで、星空を見上げたくないか？ お前が本で読んだり、人に聞いたものが、いやそれ以上のものが外にはあるぞ！」

今度は、姫君が怪物への答えに窮する番でした。

答えがわからなかったわけではありません。答えは常にペルラの中にありました。

自分の人生を愛さず、欲も望みも知らないかのように生きてきたペルラ姫。

しかし今、怪物の言葉は姫君の中に眠っていた欲望を呼び起こしました。

それは芽生えようとする種の餓え、北を目指して飛び立とうとする渡り鳥の渇き。

自分でどうすることもできない、自由と広い世界への渴望でした。砂漠で目覚めた人間のように、一度自覚してしまうと、その渇きは耐え難いものでした。

ペルラは言いわけを求めるように、机の上に置いてある砂時計を見ました。

玻璃の容器の中に収まっている砂鉄は、すでに大部分が下の器に滴り落ちていきます。

もうすぐ夜明けが、ペルラにとって地獄の釜戸さながらに燃えさかる太陽が昇る時間です。

それから、薬のこともあります。姫の命をつなぎとめ、同時にお城の中に縛りつけている薬は今や百種類に達して、飲むだけで一時間近くかかるようになっていました。

しかし、時至れば芽生えるものを、飛び立つものを誰が止めることができるでしょうか？

たとえ暖かい土の外に冷たい霜が待っているとしても、北の果てに弓矢を構えた猟師がいるとわかっていても。

『日が昇る前に塔の日陰に戻り、手遅れになる前に薬を飲めばいい』

その考えが頭をよぎると、ペルラの決心はもはや揺るぎないものになっていました。

誘うように差し出された怪物の手を取り、姫は震える声で問いに

答えました。

「外へ……私を外へ連れて行って下さい！」

第七話 『昇る日のごとく、墮ちるもの』 に続く。



第六話 『 奇妙な朝、ペルラの決断 』 (後書き)

お待たせいたしました。

病気の再発やら、休日残業やらで、更新が大幅に遅れました。  
次回はもっと早く更新する予定です (汗)

第七話 『昇る日のつとく、落ちるもの』(前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/s  
t/sst.php?act=dump&app:cate=or  
iginal&app:all=21573&app:n=0&a  
pp:count=1
```

## 第七話 『昇る日のごとく、墮ちるもの』

外へ行く、と決意したその時から、ペルラは夢の住人となりました。

眼に見える景色は陽炎のごとく、時間はあいまいになり、記憶は順序を見失いました。

怪物が自分の前に足を折って、横たわったのは覚えています。言葉一つも交わしていないのに、なぜか何をすべきなのか全てわかっています。

生まれてこの方、ペルラは馬に乗ったことはおろか、触れたことすらありませんでした。

病弱な姫の身体を心配して、父親である王が猫よりも大きな生き物をペルラに近づけようとしなかったのです。

怪物だって、人間を乗せたことなど一度もなかったはずです。

それなのに、気付けば姫は自然な動きで、怪物の差し出した手に足を載せ、鬣に手をかけてねじ曲がった翼と頭の間にあるくぼみに腰を下ろしていました。

怪物の頭の両側から突き出した二本の角は手綱がわり。

その象牙のような表面に触れた時も、姫はまだこれが夢なのか現なのか、判断がつかずにいました。

目の前に大きく開け放たれた窓も、その外に見える景色も、全部一枚の絵のように遠い世界のことのように思えました。

しかし、怪物が塔の床を蹴って走り出したとたん、現実が風のようにペルラの顔にぶつかってきました。

驚いて瞼を閉じ、また開けたその時、ペルラは、自分が窓を通り

抜け、バルコニーも飛び越して、夜の大気の中に躍り出ていることを気付きました。

視界の端では飛ぶような速さで塔の壁面が通り過ぎ、目の前には青黒い芝生が一枚の壁のように迫ってきます。

生まれて初めて味わう落下の感覚に、ペルラは思わず悲鳴を上げ、怪物は小さく笑い声を漏らしました。

地面に激しく叩きつけられるかと思ったその瞬間、怪物が背中の翼を大きく広げました。

骨まで曲がった翼は羽ばたくことはできませんでしたが、落下の速度をいくらか和らげることはできました。

ふわり、と綿のようにやわらかく地面に着地すると、怪物は姫君を背中に乗せたまま、再び走り出しました。

山のように黒く静まり返る宮殿、春と夏、秋と冬の四つの離宮に、森を模して造られた庭園と海を模して造られた池。

ペルラが一生をかけて見てきた景色を、怪物は一呼吸のうちに駆け抜けました。

十を数える前に、二人は宮殿と貴族たちを下々の世界から切り離している、あの大きな城壁に辿り着きました。

風と雨で傷だらけになったその表面に爪をかけ、怪物は地面を行くように壁を登り、その頂点で外に飛び出しました。

二回目の浮遊、そして魂消るような落下、しかしこの度ペルラの喉から零れたのは悲鳴ではなく、父の手に抱きあげられた幼子のような歓声でした。

姫は眼を輝かせ、噂話でしか知らぬ外の世界を見ようと思いました。そして見ました。

始めてペルラの目に飛び込んできたのは、決して美しいとは言

難い風景でした。

煤けた屋根、しみだらけの壁、路地には汚泥がたまり、曇りガラスの窓の向こうに見える無数の怯えた眼差し。

醜い世界は、しかしその醜さゆえに、これがこの上ない現実であることを姫に告げていました。

ペルラは背中を振り返り、さきほどまで自分の世界の全てであった宮殿を見ました。

姫のために造られ、姫のために国中の美しいものを選びすぐってきた贅沢な箱庭。

幼かったころ、あそこは何と大きく、そして今は何と小さく見えることか。

刻一刻と小さくなっていく我が家に哀しげな眼差しを送ると、ペルラは再び目の前に迫る未来の方に目を向けました。

石畳みを爪で削り取りながら、怪物は瞬く間に街を通り抜けました。

都の境目を越えれば、そこまた別の新しい世界、見渡すばかりの麦畑でした。

畑の間を網目のように走るあぜ道の上を、姫と怪物は一陣の黒い風となって吹き抜けていきます。

眼に見えるもので、ペルラの知らないものはありませんでした。

しかし、ペルラの知っているものも、何一つありませんでした。

書物は湿った土の甘い臭いを教えてくれませんでした。

狼の背のごとくなびく、麦畑の美しさも伝わりませんでした。

太陽よりも速く起き出し、仕事に精を出していた働き者の家族が姫君と怪物に気付きました。

鼻の上に泥をつけた男の子が、麦から頭を上げて、母親に言いま

した。

「見て、見て、母ちゃん！ お星さまが、夜の風に乗って走って行くよ！ 銀色の尻尾がきらきら光って、すごくきれいだよ！」

「お黙り、静かになさい！ 悪魔どもに見つかるわよ！」

男の子よりも長く生きて、その分用心深くなっていた母親は、我が子を抱きしめると地面に伏せて、神に祈りました。

しかし、男の子は母親の心も知らずに、頭を押さえつける指の間から、憧れに満ちた眼差しで、走り去っていく銀の煌めきを見つめていました。

あんなに綺麗なものが、恐ろしいものであるはずはないと思いなから……。

それは半分正しく、半分間違っていました。

都の何倍も広がった麦畑も、やがてペルラたちを置き去りにして消えました。

続いて地平線から次々に萌え出でたのは、果てしなく黒々と茂る森でした。

ペルラが文字や絵を通して知っている森が、枯れたインクや絵の具の染みならば、本物の森はまるで、枝や葉を揺らして燃え上がる墨色の火の壁。

風に乗って伝わってくる濃厚な生命の臭いと気配に、姫は圧倒されました。

とその瞬間、木々の頂から黒く巨大な煙が立ち上りました。

煙の正体は、怪物の気配に驚いて、飛び立った無数の鳥たちでした。

予想だにしなかった主の早過ぎる帰還に、森の獣たちは安眠の床から叩き起され、自分でもわからない隠れ家を目指して、めっちゃく

ちやに走り回りました。

怪物と一緒に森の中に入ったとたん、ペルラもまたこの混乱の中に叩きこまれました。

大地の上には、生きた絨毯のようにぞろぞろと走る小動物たちの群れ。

頭の上で、鳴り響く猿たちの甲高い鳴き声、振り子のように木々を飛び交う無数の影。

闇の中、葉と枝の間を乱れ飛ぶあの光る点は狼か熊か、それとも見知らぬ獣のものか。

凝縮された命の重みに、押しつぶされそうになって、ペルラは怪物の身体にしがみつき、その鬣に顔をうずめました。

その時、動物たちの騒音をすり抜けて、怪物の声が耳に飛び込みました。

「ペルラ、笑っているのか？」

何を言われたのかわからず、手で口元をまさぐりました。

そして指先が桜色の唇に触れた瞬間、今まで沈黙していた姫の喉が、新しい音楽を奏でました。始めは小さく、やがては大きく高く……。

「ええ、笑っているわ！ だって、こんなに楽しいんですもの！」

「そうか、ならもっと楽しくしてやろう」

怪物が一気に速度を上げました。

余りの速さに、木々と動物は溶けあつて、青く黒い影となりました。その闇の果てに、小さな光の点が見えたと思った瞬間、点は月ほ

どになり、月は窓となり、窓は二人が通れるほどの門となりました。ペルラと怪物はその光の中に飛び込みました。

光の扉、森の出口の外にあったのは、月の光を浴びて青白くうねる草の海。

森のざわめきがペルラの口から笑い声を引きだしたように、草原はペルラの口から声を奪いました。

言葉を越えた景色が、そこにありました。

天空には色とりどりの星々が花開き、地上には無数の花々がきらやかに輝いていました。

草原はどこまでも広がり、その果てに見えるのは雲の外套をまとった巨人たち、天を衝く本物の山々でした。

空気は水晶のように澄み切って、荘厳さが至る所に満ち満ちていました。

ペルラを乗せたまま、怪物が自然の花畑の一つに、飛び込みました。

蹴散らされた花びらは、雪のように舞い上がり、蝶のように姫の白い髪や衣に纏わりつきました。

そのかぐわしさはまるで夢のように、とても現実のものとは思えません。

もし叶うなら、ペルラは怪物の角から手を離し、この光景を抱きしめていたでしょう。

この一時を抱きしめ、口づけをして、知っている限りの歌と言葉で褒め称えたでしょう。

うるんだ眼には、遠くの山まで光り輝いているように見えました。

いいえ、気のせいではありません。山々は本当に光っていました。



その後から、燃える鬘を持った黄金の円盤が、ライオンのような足取りで近づいていたのです。

それまで母親のように、ペルラたちを見守っていた月がゆっくりと、西の地平線に隠れようとしていました。

もし、月に口が聞けたのなら、きっと姫に向かってこう言っていたことでしょう。

「ああ、娘よ。そっちへ行つてはいけません。もうすぐ火と光の大王さまがやってくるわ。あの人はとても美しいけど、その美しさはあなたには毒なのよ」

夜の冒険中で夢中になっていた姫は、月の忠告を見逃してしまいました。

しかし、誰がペルラを責めることが出来るでしょう。

姫が最後に太陽を目にしたのは、まだ赤ん坊だったころの事。

その時火傷をして以来、一度も日なたに出たこともなかったのです。

十数年の時間は、痛みと恐怖の実感を消し去っていました。

そうペルラは、忘れていたのです。

太陽が火のように、自分の身体を焼くことを……。

何も知らない怪物は、姫を乗せたまま、彼女の破滅へと一直線に走っていました。

そして今、夜明けを迎えて、世界はその装いを変えようとしていました。

山々の隙間から漏れ出る太陽の光は、夜のベールを一枚ずつ剥がしていきました。

優しい白い光に照らされた草原は、まず深海のように青い闇に充たされ、次に芳醇な葡萄酒の紫に沈んで、ついには薔薇色に燃え上

がりました。

ペルラは鼻の奥に痛みを感じ、頬から温かな滴がこぼれ落ちるのを感じました。

ペルラは泣きました。声も無く、泣きました。生まれて始めて、苦しみでも、悲しみでもなく、感動と喜びのため涙を流しました。

姫の心は、次々に溢れる喜びにわななきました。

と、その喜びは突然、刃に代わって、ペルラの心臓を貫きました。余りに激し過ぎる喜びに、姫の身体の方が耐えきれなくなったのです。

角の手綱を掴んでいた指から力が抜けて、ペルラは怪物の背中から滑り落ちました。

体が軽くなったことに気付いた怪物は、とっさに姫の身体を受け止めました。

まさにその時、太陽がついに山と山の間から、神々しい顔をのぞかせ、世界をその美しさで照らし出しました。

「ペルラ、どうした!?!」

焦った怪物が聞きましたが、ペルラはその問いに答えられませんでした。

今や姫が愛した世界が、丸ごと彼女に牙を向いたのです。

ことに激しくペルラに襲いかかったのは、彼女自身の身体でした。

大量の薬によって、辛うじて縛り付けられていた病が、その鎖を噛みちぎって暴れ出したのです。

発熱が、悪寒が、吐き気が、咳が、幾つもの幾つもの痛みがペル

ラを襲いました。

骨から染み入る酸のような痛み、頭蓋骨を叩き割る金槌の痛み、内臓に絡みつき、牙を立てる毒蛇の痛み、錆びたナイフの痛み、恐ろしい鋸の痛み、釘とねじの痛み……。

もはや頭のとっぺんから、爪先まで痛くないところありません。

苦しみに耐えきれず、ペルラが暴れると、その肩が怪物の手からはみ出し、日の光をまともに浴びました。

そのとたん、焼きごてを押し付けられたような悲鳴が、姫の口から飛び出しました。

怪物はペルラが苦しんでいる間、おろおろと戸惑い、ただ自分の身体を使って、太陽の眼差しから姫を守ることしかできませんでした。

身体を動かすこともできないペルラは、咳と喘ぎの声の間から声を絞り出しました。

「お願い……お医者さまの、ところへ、はやく……」

掛りつけの御殿医の住所を告げると、怪物の腕の中で気を失いました。

怪物はペルラを抱きしめたまま、人間のように二本足で立ちあがり、走り出しました。

焦りは心臓を焼き、泣きそうな悲鳴が牙だらけの口から飛び出しました。

怪物が怪物となった以来、こんなに怖いと思ったことはありませんでした。

今のペルラの身体は薄さを極める陶器も同じ、一瞬ごとにひびが入り、命という名の水が漏れていきます。

怪物のよく知る臭いが、死んでいく人間の匂いが、姫の身体から立ち上っていました。

もし日の光を遮る山の影がなかったら、もし森の闇がなかったら。ペルラは街に辿り着くこともできず、温かな朝日の中で焼け死んでいたかもしれません。

しかし、運に助けられて、手遅れになる一歩手前で、怪物は街に辿り着きました。

一夜明けた都では、商売人たちが早くも仕事の準備を始めていました。

その喧騒の中へ、怪物が飛び込んできました。

たちまち、早朝の市場は狼を投げ込んだ鶏の群れのような大騒ぎになりました。

怪物は後ろ足で立ちあがった馬車馬を跳び越え、壁をよじ登り、屋根から屋根へと走りまわりました。

馬よりも速く、猿のように軽やかに、医者の家を目指して、一目散に……。

その日の朝、王国一番と名高い医師の屋敷の扉が激しく打ち鳴らされました。

医師の召使いは、急患の相手をするために、仕方なくベッドの中から起き上がりました。

美女と戯れる香しい夢から叩き起された召使いは、その頭に意地

悪な言葉をたつぷりと蓄えていました。

ええ、申し訳ありませんが、ご主人様はまだお休みです。はいはい、また後でお越しくください。でも、次にお越しになる時は、予約を取ってください。駄目です。駄目です。待っているのはあなた一人じゃないのですよ。何と言われようと……。

だが、用意していた言葉を、召使いは一つも使うことはできませんでした。

口を開く暇こそあらば、鉤爪を具えた五本の指が扉を突き破り、金具もろとも根こそぎ引っこ抜きました。

怪物は扉の枠を壁ごと突き破ると、泡を吹いて倒れている召使いをひとまたぎして、家の中に入って行きました。

「医者はどこにいる！ 早く出てこい！ 出てこないと家ごと叩き潰すぞ！」

その声を聞いて、鶴のようにかくしゃくとした老人が、大広間の階段から降りてきました。

朝日を浴びてもうもうと立ち昇る埃の中で、仁王立ちしている怪物を見ると、眉をひそめて言いました。

「いったい、これは何の騒ぎなんじゃ？」

「お前が医者か、早く診てくれ！ ペルラが大変なんだ！」

姫の名前を聞くと、医師は足早に怪物に近づきました。

そして黒い腕の中で、苦しげに震えるペルラの姿を見た瞬間、目の色を変えました。

「これはいかん」と呻き、自分が羽織っていたマントを脱ぎ捨て、それで日差しを浴びないように姫の身体をくるみました。

「日の出前に、姫はわしの出した薬を飲んだか？」突き刺すような眼で怪物を睨みました。

「い、いや、俺はペルラが薬を飲んでる所なんてみたことはなかった……」

「何ということじゃ、何ということじゃ……」

医師はマントに包まれた姫の身体を、怪物の手から奪い取ると、屋敷の奥に向かおうとしました。

しかし、その前に怪物の大きな体が立ち塞がりました。

「おい、ペルラに何する気だ？ お前はちゃんとペルラを治せるのか。言っておくがな、万が一、こいつが死んだりしたら、俺はてめえの腸を噛みちぎって、その細い首を……」  
「だまらっしやいっ！！！」

医師の大喝は、雷のように屋敷の窓という窓を震わせました。

怪物までも、あまりの勢いに押されて一瞬、言葉を失いました。

「お、お前、そんな口をきいて……俺が誰だか分かっているのか？」  
「あいにくと、目はまだ悪くないからのう。貴様の醜い姿が嫌でも見えるわい」医師は怪物の脅しを、鼻で笑い飛ばしました。「貴様は脳たりんのケダモノじゃ。その鈍い頭にも分かるように説明してやる！ この子は今、生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされておる。そして、貴様がわしの邪魔をした分だけ、姫さまは死の方に近づくさあ、その象並みの頭がい骨の中にネズミ並みの脳みそが詰まっておるのなら、そこをどけ！」

「お前は誰なんだ？」横に退きながら、怪物が聞きました。

「わしは医者さ。しかも、ただの医者ではないぞ。老いばれの医者じゃ。死人なら、貴様にも負けないほど見てきたし、いまさら自分

がその中に加わったとしても何ともないわい」

医師はペルラを奥の部屋に運び入れると、まだ気を失っている召使いを蹴り飛ばして、日光が入らないように窓を板で塞がせました。そして、蝋燭の光と年老いた眼だけを頼りに、骨の折れる治療を始めました。

歯を食いしばった姫の口をこじ開け、芸術品のように調合された百種類の薬を少しずつ、少しずつ注ぎ込んで行ったのです。

やすりで少しずつ削られるように時間が、じりじりと過ぎて行きました。

全て終わった時には、太陽はすでに空の頂点をちよつとばかり通り過ぎていました。

部屋から出てきた医師の顔は前よりもやつれ、遥かに年老いているように見えました。

大広間にある机に腰掛けると、手に持った瓶から茶色い酒に杯に注ぎました。

それまで、広間の隅っこで借りてきた猫のように大人しくしていた怪物が、声をかけました。

「おい、医者がこんな昼間から酒を飲んでいいのかよ」

「ふん、貴様のせいで患者は、みんな逃げてしもうたわい。おかげで今日は商売あがったりじゃ。貴様もちよつと付き合え」

怪物はそのそと近づいて、酒の匂いを嗅ぎ、うえつと呻いて顔をそらしました。

「……そんなことより。ペルラはもう治ったのか？」

「いや、治つたらん」怒って、立ちあがりかけた怪物を手で制して

「じゃが、できることは全部やった。聞け。わしは姫さまが生まれ  
たその時から、王室お付きの御殿医として、あの方のお身体を診て  
きた。十六年間、わしは姫さまを健やかにするべく努めてきた。し  
かし、わしにあの方の病を癒すことはできんかった。できたのは、  
薬で死なないようにすることだけ。それも年々難しくなっておる…  
…」

強い酒を一気に煽り、医師は燃えるような目で怪物を見上げまし  
た。

「どういづつもりで、あの方を外に連れ出したか知らんがな。貴様  
は姫さまの残り少ないお命を最低でも一年は縮めたぞ！」

罵られた怪物は、やり場のない憤りを感じていました。

なぜか判りませんが、何が何でも、老医師の見立てを否定したく  
てたまりませんでした。

「ペルラは俺が食うのだ。そう約束したのだ！ それまであいつに  
生きていてもらわないと困る！ 医術が駄目なら、魔法があるだろ  
！ 何か心当たりはないのか？」

「そうだな……。この世に魔女や呪い師と呼ばれる者はたくさんお  
るが、真の魔法使いは一人しかおらん。わしの医術も、もとはその  
方から習ったものだ」

「それだ！ その魔法使いはどこにいる？」

「もう、この世におらんよ」

眼を見開いたまま、凍りついた怪物を見て、医師は笑った。  
笑い声は低く、まるで自分の心を抉る刃のように鈍かった。

「化け物め。貴様と同じことをわしが考えなかったと思うか？ 我



が師は、とつくの昔に海の向こうにある異国で亡くなったのだ。ちようど十六年前、姫さまが生まれ、赤い流れ星が、天を二度走ったその年にな……」

怪物は何か言おうとしましたが、しかしその舌は口の中で石となりました。

この舌で数え切れないほどの絶望を味わってきました。

しかし、この絶望の味は、自分の絶望の味がこんなに苦いものだったとは……。

日は傾き、心配げな月が再び地平線から顔をのぞかせました。

怪物は大きな体を小さく縮めながら、ベッドに眠るペルラを見守っていました。

太陽の燃える口づけを受けた姫の身体は、白い包帯に覆われ、見るも無残な姿に代わっていました。

まだいくらか苦しみの名残を残したペルラの寝顔を見つめながら、怪物は老医師から聞いた彼女の一生を思い返していました。

怪物は終りのない病氣と苦痛のことを思いました。

日なたで遊ぶ同年の子供たちを見ながら、たった一人、影と闇の中で過ごす毎日のことを思いました。

王家に生まれながら王族の務めを果たせず、ただ死ぬために生きる、一片の希望もない漆黒の未来を思いました。

怪物は、ペルラが目覚めることを恐れていました。

あれ程どうやって、姫君を脅かすことばかり考えていたのに、今は自分を見るペルラの目に恐怖が宿ることを怖がっていました。

その時、ベッドの中で可愛らしい声を漏らして、ペルラが体をよじりました。

白いまつ毛のついた目蓋を開き、銀色の瞳で自分を覗き込む怪物の顔を見て……

「どうしたの？ そんな情けない顔は、あなたに似合わないわ」

微笑みました。

病も苦痛も、孤独も絶望の闇も、何一つその笑みを損ねることはできませんでした。

今こそ、怪物はペルラの美しさに気付きました。

そして欲望のままに生きてきた自分が、どうしようもなく弱く思えました。

「ごめんよ、ペルラ……お前を外に連れて行くなんて、言わなければよかった」

「そんなことはないわ。私は楽しかった。とても、とても素敵だった……」

ペルラは手を伸ばし、自分に触れようか触れまいか、迷っている怪物の指を掴みました。

黒い毛皮と鱗に覆われたその指を、そっと頬に押し当てました。

姫の皮膚は柔らかく、脆く、しかし暖かく、その温もりが二人をつなぎ……

鼓動は朝日のように登りつめ、心は手をつないだまま、底知れぬ深みへと落ちていきました。

第八話 『 幸福なひと時…… 』 へ続く

第八話 『 幸福なひと時…… 』（前書き）

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/st/sst.php?act=dump&app:cate=original&app:all=21573&app:n=0&app:count=1
```

第八話 『幸福なひと時……』

さて、夜もどつぷりとふけて、月が天の頂上に腰を据えたそのとき……。

宮殿にほど近い街の一角から、色のついた煙のように音楽が立ち上り、華やかな服装に身を包んだ一団が汚れた石畳みの上をやってきました。

行列の先頭に行くのは、真っ白な馬に乗り、黄金虫のように着飾った貴族のお役人。

その後ろを走るのは、黒と茶色の馬に乗った岩のように厳つい体をした二人の兵士。

兵士たちの背後には金と漆の馬車、馬車の後ろにはまた兵士や楽師たちが長い列を作っていました。

一行はまどろみかけた住人たちの眼を覚まししながら、老医師の屋敷を目指して城下街を走り抜け、お屋敷の前で音楽と足をぴたりと止めました。

召使いの手を借りて、白馬の背中から降りたお役人は、屋敷の門が粹ごと壊されていること、また老医師が壊れた扉の前に立って自分たちを待っていたことに気付きました。

でっぷりと肥えた腹を揺らしながら、お役人は痩せた医師に歩み寄り、偉そうに言いました。

「我らはペルラさまを迎えに参った。姫さまはいずこにおわすか？」

老医師は黙ったまま、紙で出来た器をお役人に差し出しました。器を受け取ったお役人は、それをじろじろと眺めた後、わけがわ

かぬと言いたげに医師の方を睨みました。

「その器に水を充たし、一滴もこぼすことなく宮殿と我が屋を往復できるか？」医師は静かな声で言いました。

「面妖なことをおっしゃる……そのようなことができるはずもない」「ならば、ペルラさまをお渡しすることはできんのう。姫さまはいさつき、生死の峠を越えられればかり。そのお身体は弱り、紙の器のごとく脆くなっておられる。無理を押し、馬車に乗せれば、器の中身、すなわち姫君のお命がこぼれることになるやもしれん」

「なぜ、お主にそのようなことがわかる！」むっとした顔でお役人「なぜと問われれば、このわしが医者だから、と答える。さあ、お城へ戻り、わしの言ったことをそのまま、女王とお母上に伝えることじゃな」

お役人は紙の器を石畳の上に叩きつけ、それをめちやくちや踏みにじりました。

手を挙げて合図すると、後ろで控えていた兵士たちが恐ろしげな筋肉を見せびらかしながら、医師に詰め寄りました。

「我らは王妃さまの命令で参ったのだ！手ぶらで帰ることはできません。いくら、お主が先王のおぼえめでたき身とは言え、邪魔をするならただでは済ませぬぞ」

「ならば、二階におけるあやつにも、同じことを申し上げるのじゃな」

医師は意外にも、あっさりと門の前から退きました。

と、その時、屋敷の一階と二階を繋ぐ階段から、夜の化身である怪物が降りてきました。

ちようど門の敷居を跨ごうとしていたお役人と兵士たちは、真っ青な顔で凍りつきました。

「うるさいぞ、お前ら！ ペルラがゆっくり休めないだろうが！」

怪物は不機嫌な顔をして、人間たちの目の前で爪と牙を閃かせました。

月の明かりを受けたその切っ先が、ぎらりと凶悪な輝きを放ちました。

青を通りこして、真っ白になったお役人たちは、半ば転がり、半ば這いずりながらお屋敷の門から離れました。

そして、怪物に怯えて泣く哀れな馬たちの背中にしがみついて、自分たちを置いてさっさと逃げてしまった後続の馬車や楽師たちのあとを追いかけて、走り去りました。

老医師は遠ざかって行くお役人たちの背中に、からからと笑い声を投げかけていましたが、突然ぴしゃりと禿げた額を叩いて呻きました。

「おっといかん！ わしとしたことが、門の修理を頼むのを忘れておったわい」

しかし、老医師の心配は杞憂に終わりました。

翌日、宮殿から腕利きの大工たちが、七つ道具を抱えてやってきました。

大工以外にも、ペルラの乳母、身の回りの品々やたくさんのお衣装を携えた召使いが、次々に老医師の屋敷の中に入り込んできました。

あまりにその数が多かったので、老医師は屋敷に入りきれなかった家具や召使いを何人も宮殿に返さなくてはいけませんでした。

しかし、召使い以外には宮殿からペルラを見舞いに来る者はいませんでした。

王妃もお大臣も、貴族たちも騎士たちも、姫に会うため、わざわざ

ざ汚れた平民の町へ足を踏み入れようとしなかったのです。  
たった一人を除いて……。

ペルラの妹であるアンブラ女王は、姉姫に会うために毎日のように宮殿の城壁に猛烈な攻撃をかけていました。

気の毒なのは、城壁の警備に当たっていた兵隊たちです。

長い王国の歴史を通してみても、この兵隊たちほど奇妙な運命に翻弄された者はいないでしょう。

何しろ、彼らは城壁の外ではなく内を守るために、敵ではなく自分たちの女王と戦わなければならなかったのですから。

しかも、いくら手ごわくても、五人力の怪力の持ち主であっても、相手は女王です。

武器を使うのはもちろんのこと、傷つけることもご法度でした。

気の毒な兵士たちは、女王がやってくるたびに、殴られたり蹴られたり踏まれたり、接着剤で壁にくっつけられたり、油の罫で足を滑らせて背中や腰を打ったりしていました。

それでも、働きの兵士たちは、最後には小さな女王を捕まえ、宮殿で待つ母上のもとに連れ返しました。

アンブラが起こす毎度の大騒ぎを除いては、宮殿はつんとすました顔で保っていました。

まるで、ペルラ姫が城を抜け出したことも、彼女が太陽の光を浴びて死にかけたことも、自分たちの責任ではないと言いたげに……。



一方、宮殿を離れたペルラは、老医師の家で満ち足りた生活を送っていました。

外に出られないことは、塔にいた頃と同じでしたが、ペルラはもう孤独ではありませんでした。

老医師は毎日、自分のところにやってきた患者の何人かをペルラのもとに送り、彼女に診察を任せました。

経験豊かな医師は、時にはベッドよりも適度な運動が、静寂よりも会話が病んだ者にとって、何よりの妙薬になることがよくわかっていたのです。

そして実際に（乳母は眼をひそめました）患者たちの世話を見る内に、ペルラ自身の体調もどんどん良くなっていきました。

泣いている子供たちをあやし、老人たちの何気ない世間話に付き合い、患者たちのために薬を調合しているうちに、姫は自分の身体の中にたまった孤独や失望が、朝日を浴びた霜のように溶けていくのを感じました。

そして日が沈んで、夜の帳が下りると、今度は怪物が姫を訪ねてきました。

最初の頃、怪物は夜も昼もペルラの側において、一時も離れようとはしませんでした。

そのせいで、患者が一人も寄り付かなくなり、姫にたしなめられた怪物は仕方なく、今まで通り昼間は寢床に帰り、真夜中になつてから姫のもとを訪れるようにしたのです。

ペルラの部屋にやってくるたびに、怪物は森から綺麗な羽根をした鳥やふわふわもこもこした小さな動物、珍しい花などを手土産に持ってきました。

可哀相だったので、ペルラは小さな生き物たちは離しましたが、

怪物の爪で手折られた花だけは手元に置いておきました。

毎晩、姫は硝子の花瓶に入れた花を窓辺に飾り、月の明かりを空かして光るその花弁を見つめながら、怪物が新しい花を持つてくるのを待っていました。

怪物と姫がどんな言葉を交わしていたのかは、誰にもわかりません。

ペルラはそのことを決して話しませんでしたし、二人の会話を盗み聞きする者もいませんでした。

ただ老医師の召使によれば、姫君の窓にはいつも夜遅くまで明かりが点っていたそうです。

或いは、それはペルラにとって始めて味わう、幸福なひと時だったのかもしれない。

月は順調に齢を重ね、ペルラが始めて老医師の屋敷に来てから三十日が過ぎました。

姫の包帯を取り去った医師は、太陽の狼藉の跡がほとんど消えていることを認めました。

哀しげにため息を吐くと、医師は白い鳩にも似た手紙を一枚、宮殿に送りました。

その晩、再びきらびやかに着飾った一団が、再び屋敷の前の道を埋め尽くしました。

医師は花嫁の父のように、自らペルラの手を引き、彼女を馬車へと導きました。

口を開きかけては声に詰まり、言葉の代わりに潤んだ老いた瞳で別れを告げました。

馬車の椅子に腰を下ろした時、姫も泣きこそしませんでした。その肩は微かに震えていました。

一度宮殿に戻れば、機嫌を損ねた王妃が二度と外に出してくれないことを、姫も老医師も良く分かっていたのです。

これで見納めとなる街の様子をもう一度目に焼き付けておこうと、顔を上げた時、姫の唇から驚きの声が漏れました。

暗い街角に、オレンジ色に光る果実が実りました。

一つ、一つ、また一つとその光は増えていきました。

果実の正体は、手に大小様々な明かりを持った街の住人たちでした。

ペルラが背中をさすってあげた老人がいました。

泣いているのをあやしてあげた子供がいました。

老医師のもとで姫が癒し、また姫を癒してくれたたくさんの、たくさんの人々がいました。

誰一人口を開きませんでした。どんな言葉よりも能弁な沈黙が辺りに満ちていました。

みんなペルラと過ごした時間を懐かしみ、姫との別れを惜しんでいました。

時を追うごとに明かりは増えていき、最後には遥かな闇の向こうを照らす、長い長い列になりました。

その明りの道に導かれるように、ペルラを乗せた馬車は、宮殿への道をひた走りました。

長いようで短かった道を越え、馬車は再び王の城へ入りました。

とたん、世界は再び、その彩りを変えました。

空には花火が咲き乱れ、地上では音楽が空気を震わせました。

絹や宝石に身を包んだ公達たちが、手を叩いて、ペルラを迎えたのです。

突然の歓待に呆然としているペルラの前に、華やかな貴族の中でもひととき目立つ王妃が姿を現しました。

王妃は姫の両腕を痛いほど掴むと、その頬に二度口づけを落としました。

「良く戻ったね。待っていたよ」

王妃の唇と言葉はまるで、そのお顔のように硬く冷たいものでした。

王妃の後に続いて飛び出したのは、小さなアンブラ女王。

ペルラの妹は鋭い歯で破れそうなほど唇をかみしめ、両目いっばいに涙をためて、姫の腕の中に飛び込みました。

その勢いがあまりに強かったために、ペルラはもう少し押し倒されそうになりました。

姉姫の腰を抱きしめると、アンブラは一カ月の間、押し殺していた声を上げて泣き出しました。

妹の頭を撫でて慰めながら、ペルラは再び、自分を囲む人々を見渡しました。

貴族たちは、皆顔に笑顔を浮かべ、その言葉はまるで口に砂糖を含んだかのよう。

もちろん、何故抜け出したのかと姫を責め、叱るものは一人もいません。

ペルラは自分を見送ってくれた明かりの道のことを思い出しました。

あのとき、誰も口を開きませんでした。彼らの想いははつきりと伝わってきました。

しかし今、姫の前にいるこの人たちは、老いも若きも様々な言葉を口にしていますが、その中身は空っぽで、心は霧に覆われたよう

に隠されています。

ペルラは口やかましい老医師のいるあの家が、急に恋しくてたまらなくなりました。

第九話 『 変わりゆく世界 』 へ続く。

第九話 『 変わりゆく世界 』（前書き）

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/s  
t/sst.php?act=dump&app:cate=or  
iginal&amp;:all=21573&app:n=0&a  
pp:count=1
```

## 第九話 『 変わりゆく世界 』

さて、月が地平線に姿を隠すように……。

ペルラが乳母に手を引かれて塔の階段を上ると、姫を迎えに集まった廷臣たちはようやく一息ついて、胸を撫で下ろしました。

厚化粧のごとく塗り固めた笑顔がほころび、その下に隠された安堵や疲労が外に染みだしました。

ペルラが宮殿を離れていた一月の間、貴族たちはひたすら姫の安全を願い、食物も喉を通らぬ日々を過ごしていたのです。

といつても、別に彼らは死ぬほど、前王の姫君を敬愛していたわけではありません。

宮殿の住民たちが心配していたのは、ペルラが亡くなり、姫と怪物の約束は反故になることでした。

そうなれば、再び怪物の狩りが始まり、恐るべき生贄の儀式が復活するのは眼に見えていました。

怪物が城下町の住人を食べつくすのが早いか、我慢が限界に達した民が反乱を起こすのが早いか。

いずれにしても、想像するだけで身の毛もよだつような未来が貴族たちを待っていたはずで。

ともあれ、待ち焦がれていた姫君は戻ってきました。

ペルラの家出は、宮殿の日常に一石を投じ、大きな波風を起こしました。

が、その波紋はもはや薄れて形を失い、消えかけています。

後はこの宴の始末をすれば、再び平穏な日々が戻ってくると貴族たちは考えました。

しかし、それは大きな間違いでした。

音なき流れは水深し、との言い伝えのごとく、大きな変化は常に眼に見えぬ深みで起こるものです。

そしてそれが水面に顔を出すころには、もはや後戻りすることなど出来なくなっているものなのです。

その変化とは、このようなものでした。

ある日、ペルラの世話をしている乳母が、彼女の愛する姫君の様子がおかしいことに気づきました。

普段、ペルラは鏡を眺めることもまれで、姫の化粧箱はいつもほこりをかぶっていました。

皮肉なことに、同じ年の貴族の娘たちが、武器を丹念に磨く騎士のように、自分の美しさに磨きをかけている間、王国で一番美しい姫君はその輝かんばかりの美貌にずっと無頓着だったのです。

いや、ひよっとしたら、ペルラは自分のことを美しいとすら思っていないかったのかもしれない。

宝石よりも絹よりも、獣の牙や毛皮、羽毛を愛していた姫君のこゝと、美について普通の人間とは違う考え方を持っていた可能性もあります。

ところが、老医師の家から戻ってからと言うもの、ペルラが鏡で自分の顔を眺める回数が増えました。

愁いを帯びた面持ちで、鏡に映る月の女神のようなお顔を見つめ、しきりにため息を吐きました。

草原で太陽との謁見を果たし、死の淵を眺めてからというもの、ペルラは自分と怪物の将来について思いを馳せることが多くなりました。

この先何が起こるのかはつきりとはわかりませんが、もし始めて



会った夜に交わした約束に従えば、ペルラはいずれ怪物の餌食になることになっています。

姫の白い肌に怪物の青い唇が触れ、ゆで卵のようにつややかな肌を鋭い牙が裂き、切り開かれた傷口から血が赤い玉となって浮かびこぼれ落ちるのです。

その血を怪物の舌が舐めとり、さらに桃色の肉を白い骨から引きはがし、すらりとしたお腹を食い破って……。

その様子を想像するだけで、ペルラは自分の中に怪しいざわめきが生まれるのを感じました。

それは例えるなら、姫の胸の奥に小さな雨雲があつて、自分が食べられる様子を思い浮かべるたびに、細い雷の爪先を伸ばして、ペルラの心臓やお腹の中を甘く痺れるような感覚で引つ掻いているように感じました。

しかし、その雨雲の中に小さな氷の欠片が宿ったのは何時のことだったでしょうか。

たおやかなその腕を見るたびに、ペルラは思い出すのです。

この腕を見て、怪物は言いました。それは骨か皮か、肉はどこへ行ったのかと。

そしてその手で頬に触れるたびに、ペルラは思い出すのです。

この頬を舐めて、怪物は言いました。うえ葉臭いと……。

最初は気にもしなかったそれらの言葉は、胸の中を巡るうちに、冷たい触手を伸ばし、鋭い棘を生やし、大きな雪の結晶となって、ちくちくと姫の心を突き刺しました。

死ぬことは怖くありません。苦痛には慣れていきます。あの優しい怪物に食べられるのなら、本望です。

でも、食べられるなら、せめて美味しく食べて欲しいと思う。

わたしは、そんなに不味そうに見えるのかしら……。

「ねえ、乳母や。私、もうちょっと太ったほうがいいのかしら？」  
独り思い煩うことに疲れた姫が、乳母に聞きました。

「何を言っているんですか。お野菜しか受け付けないお体なのに！  
この間お肉を無理に召し上がるうとして、お腹を壊したのを忘れ  
たんですか？」

呆れた顔で乳母が言いました。

姫はため息を吐いて、哀しげに肩を落としました。

しかし、しばらくするとまた顔を上げて、乳母に聞きました。

「ねえ、乳母や。私、ちょっとお薬の量を減らしたいと思うのだけ  
ど……」

「冗談じゃありませんよ！ 一月前に、お薬を忘れて死にかけたば  
かりじゃないですか！ お医者さまはもっとお薬を増やしたほうが  
いいと言っていましたよ」

しょんぼりと俯くペルラの背中を見て、乳母は首を傾げました。

「いったい、私の姫さまに何が起きたのかしら？」

「これは新しいご病気なのかしら？」

それとも、ようやく姫さまも年頃の女の子のようにおしゃれに気  
を使うようになったのか？

きつと、おしゃれのほうね！ そうよ、もともと姫さまはご自分  
のお美しさに無頓着すぎたのよ！

いいことだわ。今度、女の子の身だしなみについて、いろいろと  
教えてあげないと……。

自分で出した都合の良い解釈に乳母は満足し、それ以上深くは考えませんでした。

そしてほくほく顔で、ペルラに白粉の塗り方や紅のつけ方を教えるところを想像しては、独り悦に入りました。

よもや愛する姫さまが、自分に塩をかけた方がいいのか、それとも胡椒をかけた方がいいのか、悩んでいるなどは夢にも思わずに…。

さて、ここでちょっと人間たちから目を逸らして、森のほうを見てみましょう。

人の都の何倍もの広さを持つ緑の王宮の中で、森の道化師とも言うべき、猿たちが目を丸くしていました。

猿たちの視線の先には、森と獣の君主である怪物のちょっと信じられないような姿があったのです。

ペルラに出会うまで、怪物は姫以上に外見と言つものに無頓着でした。

ときたま、悪ふざけにやってくる竜を除いては訪ねてくるものもなく、腹の中の哀れな犠牲者以外に話し相手もいませんでした。

（竜は引つ掻きあったり、噛み付いたりするには最適でしたが、とても知的な会話を楽しめるような頭の持ち主ではなかったのです）  
ところが、ペルラの元に通うようになってから、怪物は急に自分の見た目を気になり始めました。

頭に生えたこの角はちょっと長すぎやしないか？

水鏡で見たこの黒い毛皮のぼさぼさしていること！

ああ、ペルラはこの爪や牙をどう思っているんだろうか？

あら捜しと言つものは、一回始めたらきりがありません。

一つ目に付いた欠点は次の日には二つに増え、二つは四つに、四つは八つに……。

こうして、少しでも見栄えを良くしようと思った怪物の涙ぐましい努力が始まったのです。

山猫や狼の真似をして毛づくろいを試みたり、池の水をすくって毛皮に撫で付けたりもしました。

ちょっと可愛い感じを出そうと思って、花やら鳥の羽やら、果ては生きたウサギなんかを頭に乘せてみたこともあります。

さて、ここまで頑張ったからには、俺も少しはましになったに違いない。

そう思った怪物は、勇気を出して池の水鏡を覗き込んでみました。そこに映っていたのは

「……………」

自分の姿を見た怪物は何も言いませんでした。

代わりに猿や小鳥が忍び笑いを漏らしました。

そのとたん、怪物は何もかもがいやになりました。

せつかく整えた毛をぐしゃぐしゃ掻き毟り、頭乗せてあったものを全部投げ捨てました。

腹の皮を噛んで丸まり、もうこんなこと二度とやるか、と思いつながらふて寝を始めました。

でも、しばらくするとまた起き上がり、森の住民たちが見つめる中、おかしいな一人芝居に興じるのでした。

姫君は灰色の天井の下で、怪物のことを思ってたため息をつきました。

怪物は緑色の天蓋の下で、姫君のことを思ってたため息をつきました。

た。

二人はさながら、共鳴しながら、響きあう二つの器。

言葉を交わすたびに、目が合うたびに、指先が肌が触れ合うその  
おりおりに……。

怪物と姫の心をつなぐ眼に見えない音色は、根を広げ、幹を伸ばし、葉を茂らせ、ついに小さな蕾をつけたのです。

もし、十分な時間があれば、その蕾はいつか花開き、何かを実らせることもできたかもしれません。

しかし、運命は二人にその時間を許しませんでした。

ペルラと怪物が手に手を取り、二人だけのワルツを踊っていたところ、二人を取り囲む世界もまたゆっくりと、しかし絶対に後戻りの出来ない道を歩み始めていたのです。

まず最初に声をあげたのは、王宮を取り囲む城下町の住人でした。街の平民たちにとって、城壁の向こうにいる貴族たちは、雲の上の住人でした。

そして、貴族たちの中でも一際深い謎に包まれた白いお姫さまは、まさに冥界の奥深くに住居を構える魔女にも等しい存在でした。

ところが、そんな伝説の生き物がある日、流れ星のように自分たちの近所に落ちてきたのです。

その人はやさしい上にもやさしく、卑しい自分たちにも丁寧な言

葉づかいで話しかけてきました。

姫君の美しさが、酒毒のように人々を酔わせたことは言うまでもありません。

ペルラが城下町を立ち去った後も、いや姫が姿を消したその後こそ、人々は声高に上の姫君について話し合いました。

ペルラと言葉を交わしたと自慢するご婦人がた、姫君があそんでくれたと無邪気に言う子供たち。

老人たちはペルラが自分らを癒してくれたことを感謝し、姫君がいたころを懐かしみました。

男の衆は幼い女王でも、その母親でもなく、上の姫君こそが怪物から自分たち平民を守ってくれたことを思い出させました。

これに姫君が怪物に乗って駆け抜けるのを見た農民が加われば、話しの弾まないはずがありません。

姫の孤独を慰めるために、城下街に滞在させた老医師は、この傾向に反対しましたが、一人の人間が数百数千の舌に叶うはずもありませんでした。

ペルラ姫を巡る噂話はたちまち、尾びれを生やし、背びれを生やし、角を生やして手足を生やし、ついには翼を得て国中を飛び回るようになりました。

今や姫を讃える声は、老若男女の壁を越えて一つの大きな合唱になろうとしていました。

人々は謳います。

ペルラ姫よ、王の娘にして癒し手なるお方よ。

天より地に落ちた星のごとく優しく輝くお人よ。

死の貴婦人を産婆に生まれ、黒い怪物の背に乗り、月夜を駆ける

……

## 魔女の中の魔女！！

歌は歌を呼び、大樹のように育った民衆の声はついに城壁を乗り越えて、王宮の中にまで影を落とすようになりました。

この声を耳にした宮殿の老人らは、さっそく老いても衰えぬその舌の刃を振るい始めました。

「なあ、わしらはちと早まったかもしれんな」と一人目の老人が言いました。

「早まったとは、何のことじゃ？」と慎重に二人目の老人が聞き返します。

「もちろん、ペルラさまのことじゃ！」と鼻息も荒く三人目。「わしは昔から言っておったのじゃ。あの人を北の塔に閉じ込めるべきじゃなかったと」

「確かに。ペルラさまがおられたときは、何もかも上手くいったなあ」

「ともかく、アンブラは借りてきた猫のように大人しくなさっていった。ところが、今のあのお方は……」

「まるで小さな山猫……いや、血に飢えた猛虎と例えるべきか」

ここで三人の老人たちは不安げに互いの顔を見つめました。

後で述べることになりましたが、このとき宮殿の小さな厄介者であったアンブラは、王国の巨大な悪夢に成長しようとしていました。

アンブラが名実ともに女王に相応しい年齢に成長した時のことを想像すると、老人たちは枯れた神経や骨が痺れるほどの恐怖を覚えるのでした。

「アンブラさまの治世がどんなものになるかわからんが、一つだけ

確かなことがある」

「ああ、そのとき、わしらは長生きしたことを後悔することになるじゃろう。わしら全員がな……」

「なあ、今からでも遅くない。何とかペルラさまにお戻りいただくわけにはいかんかのう」

三人目の老人が哀願するような口調で言いました。

一人目と二人目の老人が、気まずそうに口ごもり、首を横に振りました。

「そうしたいのは、山々じゃよ」

「山々なのじゃが……」

突然、三人の老人が一斉に口を閉ざしました。

宮殿の廊下を真つ赤なドレスに身を包んだ王妃が、猫のように高慢かつ優雅な足取りで通り過ぎたのです。

歳をとって萎び、目や耳ばかり大きくなって、鼠そっくりの風貌になった老人たちは急に柱の彫刻や床の絨毯が気になったふりをしました。

そして、王妃が完全に姿を消し、戻ってこないことを確認すると、またぺちやくちやくと始めました。

かくして、宮殿の城壁の内側からも、小さくともペルラを讃える歌声が響きはじめました。

王妃の目を盗んで、ひそかに北の塔を訪れ、姫に目通りを願い出るものが次々に現れるようになりました。

ペルラは体調がすぐれないことを理由にこのような輩を遠ざけましたが、彼らは構わず、塔の床に様々な贈り物を山のように積み上げました。



仕方なく姫は、贈り物を他の貴族の名義で、街の人々に寄付することしました。

しかし、有史以来、この手の慈善事業が人目を忍ぶことに成功した試しがありません。

姫から施しをもらいうけた人々はますますペルラを崇拜するようになり、それに呼応するように貴族たちの贈り物はますます数を増やし……。

宮殿の内と外で、ペルラの名声が果てしなく高まっていくにつれて、奇妙な出来事が姫の身の回りで起こるようになりました。

ある時には姫の小物が消えうせたり、またある時にはドレスにかぎ裂きが出来ていたり、お気に入りの本のページが数枚千切り取られていたこともありました。

しかし、もとよりペルラは物に執着する性格ではありません。手先が器用なので、小さな傷程度なら、自分でドレスを繕うこともできます。

本を破られることには辟易しましたが、中身は全部覚えていたので、問題はありませんでした。

ペルラは繰り返される悪戯に、徹底した無視で報いました。

事実、この程度の嫌がらせでは、姫に引つ掻き傷ほどの痛痒を与えられることもできませんでした。

しかし、ペルラは大事なことを忘れていました。つねに姫のことを観察し、彼女のことを気にかけている者がいることを失念していたのです。

ある日、怪物との会話に熱中してつい『朝ふかし』してしまったペルラは、ちよつと遅めの朝食を取るようになりました。

淡泊な野菜のスープをさじですくったペルラは、その中に一本の

針を見つけました。

ちょうど中指ほどの長さの大きな針です。こんな大きなものでは、たとえスープの中に隠したとしても、人を傷つけられるはずがありません。

相手の小心ぶりに、おかしさを覚えながら、ペルラはその針を丁寧にハンカチで包んで、脇に置こうとしました。

そのとき、錆びた金属がきしりあうような声が聞こえました。

「スープの中に針が入っていたのか……」

怪物が顔を上げて、こっちの方を見ていました。

相手の声音に不穏なものを感じながら、ペルラは努めて平静を装うとしました。

「ええ、たいしたことじゃないわ。きつと、料理した人が間違っ……」

「前にお前の小物を隠したり、ドレスや本に傷をつけたりしたヤツだな……」

相手の凄まじい剣幕に、ペルラは息を呑みました。

怪物とこれほど長く一緒にいたのに、いいえ怪物と過ごす時間が長かったからこそ、ペルラは、彼が如何に恐るべき存在であるかを失念していたのです。

「どうして、そのことを……」

「聞こえるのさ。あいつら今、この城の庭の中で話し合っている。お前の料理に針を入れたことを自慢している。お前が針を噛めば良いと言っている。お前を、ペルラを、俺のペルラを傷つけようとした！」

ペルラは昔、怪物から聞かされた炎のことを思い出しました。怪物の身体の中に宿り、彼の内臓を掻きむしり、憎悪を際限なく煽り立てるあの黒い炎のことです。

そして今こそ、ペルラはその例えの意味を知りました。

怪物の両眼は黄金色に燃え上がり、黒い毛皮が火柱のように逆立っていました。

あまりにも強い怒りと憎しみの感情が、溶鉱炉から漏れ出す熱のように押し寄せてきました。

そのとき怪物が背中をのけぞらせて吠えました。

その声はさながら雷獣の咆哮。

北の塔は稲妻の直撃を受けたように震え、姫お気に入り薬草をいれた鉢の幾つかにもひびが入りました。

そして宮殿では、惰眠を貪っていた貴族たちは、怒声の一撃を受けて一人残らず寝床の中から叩き起されました。

ペルラの目の前で怪物が大きく身をたわめました。

姫は一目で怪物の意図を見抜きました。

漆黒の鬘に覆われた首すじに飛びつけたのは、過去の経験と驚くべき幸運のなせる技他なりません。

とっさにペルラが鬘を掴んだその瞬間、怪物は頭の窓から外に飛び出していました。

空気が目に見えない拳となって姫にぶつかってきました。

前回の羽毛だとするならば、今回のそれはまるで砂で出来た壁。風圧は容赦なくペルラの身体を殴りつけ、彼女の意識を外に叩き出しました。



した。

怪物は口を開け、火のように熱い息で、冷たい朝の空気を白く濁らせました。

「お前があいつにペルラの小物を盗ませたんだな？ ペルラの服を切つて、大切にしていた本を千切つて、料理に針を入れさせたのもお前なんだな？」

蛙に忍び寄る蛇のような動きで、怪物は王妃に近づいて行きました。

王妃はようやく震えはじめました。何とか立ち上がろうとしましたが、そのたびに手が滑るか足が滑るかして、上手くいきません。

王妃の目の前で、怪物が薄れていく星明かりを掴むように鋭い爪を構えました。

「八つ裂きにしてやる！」

まさにそのときに、ペルラが目を覚ましました。

目覚めてすぐ、ペルラは鉄のような怪物の鬣が、自分の掌を切り裂いていることに気付きました。

しかし、姫はひるむことなく黒い獣毛から自分の手をひきはがすと、怪物の腕に抱きつきました。

「ペルラ、どうしてここに！」

「駄目よ！ その人はまだこの国に必要な人なの！ 殺しては駄目！」

怪物は姫の存在と、彼女の血の匂いに気がついて、唾を飲み込みました。

天を衝くような怒りが、それ以上の驚きと衝撃にかき消されたの

です。

このとき怪物は、自分たちがどこにいるのか気付き、冷たい怖れに貫かれました。

「ペルラ、もうすぐ日が昇る！ 早く塔に戻らないと！」

怪物の言うとおり、夜は長い衣を引いて退きはじめ、すでに庭園はラベンダー色に染まり始めました。

ペルラの脳裏に、あの日味わった日の光の凄まじい苦痛が蘇りました。

しかし、姫の決意は一寸たりとも変わることはありませんでした。

「いやよ！ 貴方と一緒にじゃなきゃ、私は塔に戻らないわ」

「今殺しておかなきゃ、こいつは必ずお前に仇を成す！ 何故それがわからない！」

怪物の熱い感情と姫の静かな覚悟が、金と銀の瞳を通して火花を散らしました。

睨みあい、心臓が三回脈打つ間続き、二人の荒い息づかいだけが庭園に木霊しました。

結局……最後に折れたのは怪物の方でした。

赤紫に変わりゆく空に二度目の咆哮を放つと、怪物の大きな身体から空気が抜けたように肩を落としました。

上げていた手を下ろし、ペルラを日の光から守るために彼女の身体を抱きしめました。

「ありがとう。私のことを心配してくれたのね。本当にありがとう」

ペルラもまた血に濡れた両手で怪物の身体に抱き返しました。

そして、王妃の方を向き直ると、彼女にしては珍しいほど冷たく

棘のある声で言いました。

「お義母さま、これに懲りましたら、もう子供っぽい悪戯は止めてください。私は気にしません、彼が機嫌を損ねます。貴方はこの国にとって大切なお人、どうかお体をご自愛ください」

王妃は何一つ答えずに、黙ったまま地面を睨んでいました。

そしてペルラと怪物が立ち去り、他の召使いたちがやって来て、王妃に手を貸そうとしても、その手を乱暴に払いのけ、立ち上がるうとせませんでした。

王妃の手は綺麗な爪が割れるほど強く地面を掻きむしっていました。

強く強く噛みしめた唇から……赤い血が一筋流れ落ちました。

普通ならば、ペルラがこれほど遺恨を残すような言葉を使うことはなかったでしょう。

しかし、このとき姫の心は様々な怖れと不安に満ちて、他のことを顧みる余裕がなかったのです。

ペルラは怪物が変わったかと思っていました。しかし、それは間違いでした。

怪物が優しいのは姫君ただ一人、怪物が気遣うのもペルラただ一人だけなのです。

彼女以外の人間にとって、怪物は依然として恐るべき人食いの魔物のままだったのです。

そして、怪物の秘めた凶暴さよりも恐ろしいことがありました。塔に帰る道の途中で、ペルラは怪物に聞きました。

「ねえ貴方、最近ちゃんとご飯は食べているの？」  
「もちろん食べているさ。お前だって見ているじゃないか」

しかり、ペルラはちゃんと覚えていました。

毎日、怪物に出される献立を考えているのは、彼女なのです。

そしてまたペルラは覚えていました、始めてあつたあの夜、抱きついた怪物の腕の感触を。

しかし、今日抱きついたあの腕、まだ遅しかったものの、あれははっきりと肉が落ちていかなかったでしょうか？

今まで読んだ書物は、こうペルラに語りかけています。

怪物のような魔法の生物には、普通の動物の法則は通じないと。

たとえば、竜は肉も食べますが、草や木の果実、ときには石や金属までも口にします。

それとは逆に、怪物は人間の肉以外の栄養を受け付けられないのではないか？

ペルラと交わしたあの約束が、怪物を緩慢な死に追いやっているのではないか？

そんな不安が、頭に付きまとい離れようとしませんでした。

そして何よりも姫を恐れさせたのは

『一瞬だけ私　あの怪物ひとを助けられるなら、誰かを食べさせても良いと思った……』

始めて気付く自分の中の闇の深さに、ペルラは肩を抱き、独り震えるしかありませんでした。



第十話 『果ての见えない奈落』へ続く

第十話 『果ての見えない奈落』 (前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/sst  
/sst.php?act=dump&amp;cate=ori  
ginal&amp;all=21573&amp;n=0&am  
p:count=1
```

## 第十話 『果ての見えない奈落』

怪物が王妃を襲ったその日を境に、ペルラは再び孤独の衣を纏うようになりました。

他の人間を塔に招き入れるのは昼の間だけ、夜になれば親しい乳母と言えども、容赦なく塔の中から締め出しました。

そして、日が沈んでいる間は、病弱な身体に鞭打って、身の回りのことも、怪物の食事の給仕も全て一人でこなしました。

今になってようやくペルラは、知らないとはいえ、自分がどれほど危うい綱渡りをしてきたのか、分かりました。

塔に出入りする人間が怪物に慣れることはあっても、怪物が人間に慣れることはありません。

小さな間違いや些細な行き違いで怪物がかんしゃくを起こせば、いつでも血が流れ、命が失われる危険があつたのです。

恐れは幸福に浮かれていた姫の心に冷水を浴びせ、瞼を開かせました。

目の前を覆っていたもやが晴れて、初めて見えたのは未来へ通じる二本の道。

王国の民を生かすために、自分を信じてくれた怪物をだまして飢え死にさせるのか。

それとも、怪物を生かすために、自分を慕ってくれた人々を生け贄に差し出すのか。

一つ目の道は冷たい闇に消え、今一つの道は真っ赤な血の海の中に沈んでいました。

闇の道を選ぶにはペルラはあまりに優しく、血の道で狂うにはあ

なりに賢すぎました。

姫が選んだのは第三の道、民衆も怪物もひとしく救う方法を探すことだったのです。

しかし、それは例えるなら砂漠の中に一粒の宝石を求め、麦わらの中の黄金の糸を見出そうとするようなもの。

もっとも険しく、厳しく、苦しみ多くして、報われる可能性は限りなく少ない道でした。

ペルラは希望を過去に託しました。

怪物の正体とその憎しみの理由さえ分かれば、この出口の見えない迷路に一筋の光が差し込むかもしれないと思ったのです。

けれども、時の川をさかのぼるにしたがって、伝説や噂は数を減らし、姫はついに怪物にまつわる人々の記憶の源流に辿り着きました。

ペルラが怪物のことを調べ始めてから、どれほどの学者や哲人、僧侶らが北の塔を訪れたでしょうか。

しかし、最後に姫の塔に足を踏み入れたのは、哲学にも学問にも縁のなさそうな太っちょの行商人でした。

商人はたっぷりと脂肪の詰まった腹を抱え、ひいひい呻きながら階段を上り、汗だくになつた身体をペルラの足元に投げ出し、跪きました。

「これはこれは姫さま。このたびは、あつしのような卑しいしもべにお声をかけてくださったこと。まことにまことにありがとうございます。ここですらとたるんだ瞼の間から姫の様子を伺い「いやはや、まったく噂に違わずお美しいお方でござります。まさに真珠の中の真珠、銀の中の銀。あけ行く空の彼方に浮かぶ月のとき

」

「顔をお上げなさい」商人の言葉を遮って、姫が言いました。  
「今日、貴方を呼んだのは、お世辞を聞くためではありませんよ、お爺さん。私が欲するのはまことの言葉のみ。真実には銀を持って報いますが、いつわりにはいつわりに対応しい報いが与えられるでしょう」

商人は命じられるままに顔を上げ、噂に名高い、白い姫君のお姿を眼に焼き付けました。

姫の美しさは蜜酒のように老いた心を蕩かせましたが、目から溢れる知性は氷の刃となって商人の背中を撫でました。

（こりゃ心してお答えせねばならんようじゃ）冷や汗を流しながら、商人は世間知らずの姫君のために用意した血沸き肉躍る冒険や砂糖のように甘い恋の作り話を心のひだの中に仕舞い込みました。

「貴方は怪物を見たことがあるそうですね」  
「はい……ああ、いいえ。見ることは見ましたが、あつしが目にしたのは、怪物そのものじゃなくて、そいつの影の影みたいなもんだったのです。ありゃはあつしがもつとスリムで男前だったころのことです……」

まだ若かったころ、商人は儲け話を求めて国中を旅しておりました。

財布も腹も空っぽのときが多かったのですが、胸にはいつも満杯の野心が燃え盛り、若い手足は疲れを知らず、商人を国の隅々まで運びました。

そして十と八年前のある日、ついに国境のはしのはし、老いた獣の牙をかたどった荒山のふもとに、しがみつくように息をひそめている小さな村に至ったのです。

この村は見るからに貧しく、みすばらしく、銀貨はおろそか銅貨

すら見たことがないようなお百姓たちが暮らしていました。

男は商人らしい親しげな態度で村人たちに接しました。つまり、網のように甘い言葉を投げて、漁師のように村人の懐をさらおうとしたのです。

ところが、岩山と同じ灰色の顔をした村人たちは商人の言葉に耳を貸さず、（商人いわく）貴重な品物を見ても、興味を示すどころか唾を吐きかけようとしてました。

ふつつの物売りならば、痩せた意地悪な雄鶏たちに呪いの言葉を浴びせ、もつと純朴なよく太った鴨たちのいる土地に向かったことでしょう。

しかし、雄鶏のように誇り高くも冷たい村人たちの態度は、商人の中に眠る一匹の獣を目覚めさせてしまいました。

ほら、数多の英雄や賢者たちを破滅に追い込んだ、あの猫によく似た魔性のケモノ……好奇心です！

商人は石のように頑なな村人の中では口の軽そうな男を一人探しだすと、その男を酒場に誘いました。

酸っぱくも薄い安酒で攻めること六杯、商人はついに酔いつぶれた男の心の城門を突破し、その中に隠された秘密を暴くことに成功しました。

その秘密とはこのようなものでした。

いわく、この地には力強き神がおわし、村人らは一年に一度、秋の満月の夜に岩山にある秘められた祭壇に赴き、秘密の神を祭る秘密の儀式をするというのです。

岩山の神はまた恐るべき荒神であり、そのことを余所者に話すのは御法度、もし儀式を見られたのならば、かならず血を流して許しを請わねばなりません。

そして、商人が村にやってきたのはまさに秋、その夜の月は杯の

ように満ちようとしていました。

古来より、鍵を閉めれば必ず開けられ、扉を造れば誰かがそれを乗り越えようとする者が出てきます。

見るなと禁じれば禁じるほど、余計に眼を見開くのが人間の性と  
言うものです。

商人はさらに三杯、安酒をおごって口の軽い男を酔い潰すと、荷物をまとめて村から出て行く振りをしました。

道の途中で引き返し、遠い昔に死んだ藪の残骸の中に身を潜め、じつとそのときを待ちました。

そして夜、果たして男の言った通り、村から松明の行列が現れ、荒山目指して行進を始めました。

商人はじつと息を殺しながら、村人の列の後ろに付いていきました。

いく度、足を止めて、安全だが退屈な行商の旅に戻ろう、と思つたことでしょう。

天を貫く山々の穂先は真っ黒、その間を歩く人々の列は、さながら地獄の山脈を彷徨う亡者の群れのように見えました。

しかし、足を止めるたびに、好奇心の獣が長い尻尾で背中を鞭打ち、商人はまたしぶしぶと村人たちのあとを追って歩き出すのでした。

ついに一行は枯れた河で出来た谷に辿り着き、村人たちはそこで足を止めました。

手に持ったいくつもの松明が、枯れ谷の不気味な光景を照らして  
します。

正面、小さな人影らにのしかかるようにそびえ立つのは、黒曜石を削って造つた神の像。

その顔は見るも恐ろしく、まるでライオンの身体に人間の首をつけたような姿をしています。

そして獣神の足元、松明の赤い光を受けてきらきらと輝くいるものがありました。

あれは無数の骨、少年や少女、もつと小さな子供、あるいは……。そのとき、甲高い泣き声が儀式の荘厳さに凍りついた夜の闇をつんざきました。

獅子の仮面をかぶった神官が、村の女から何か包みのようなものを取り上げたのです。

商人は恐怖に心臓をかじられながらも、もつとよく見えようと、隠れていた岩陰から身を乗り出しました。

神官の持つている包みの中から、丸々とした小さな足が見え、手が見え、涙で潤んだ黒い瞳が商人の目を覗きかえました。

商人は冷や汗でつま先までずぶ濡れになりながら、なんとか自分のほうをじっと見つめる赤ん坊をあやして、黙らせようと思いました。ここで見つければ、命はありません！

商人の必死な形相がよつぽど可笑しかったのでしよう。

赤ん坊は涙を忘れ、口元を押さえてくすくす笑い、隠れている商人に向かって手をパタパタと振りました。

（商人は恐怖のあまり、もうちよつとで気を失いそうになりました）

しかし、儀式に夢中だった神官は何も気づかず、角で出来た杯から酒のようなものを赤ん坊に飲ませました。

気づけば神官も村人たちも姿を消し、商人と赤ん坊は二人きりで、獣の神の前に取り残されました。

先ほど飲まされた薬のせいか、赤ん坊は目を擦り、可愛らしくあ



くびをすると、祭壇の上で横になり、すやすやと眠り始めました。その小さく、あまりに無防備な姿を見ているうちに、商人の心中に恐怖や好奇心を押しつけて、新しい感情が込み上げて来ました。

この子を連れて逃げ、守り育てたいと言う、強い強い思いでした。しかし、祭壇に向かって一歩足を踏み出そうとしたそのとき、遠雷のような音がごろごろと山肌を震わせ、小石の雨を商人の頭の上を降り注ぎました。

とたんに恐怖が全ての感情を押しつぶし、商人は悲鳴を上げながら、その場から逃げ出しました。

神に、祭壇に、夜に、そして何より助け育てるはずだった幼子に背を向けて……。

「今でもどきどき夢に見るのです」赤くなつた目から涙をふき取り、鼻を擽り上げて言いました。「あつしが見捨てたあの子のことを。あの子につけるはずだった名前のことを考えるのです。男の子だったらシャムシャル、女の子だったらシャルトル……きつと美しく育つたはずです。赤ん坊のときですら、あんなに愛くるしい子だったので。でも、あつしにどうすることができたでしょう？ あつしは戦士でもなければ、呪い師でもありません。ただの商人なのです。そしてあの枯れ谷には何かがありました。何かは分かりませんが、恐ろしい何かがつ！」

ペルラは商人が描いたという、獣の神の絵を見ました。

確かに、いくらか怪物に似ているところがないではありません。

しかし、この絵には牛のような角がありません。

背中に曲がつた翼もなく、あの蛇のような尻尾も見当たりません。

「その村がどこにあるのか教えてください。村人を呼んで話を聞きます」

「残念ですが、それは無理でしょう」老いた商人は悲しげに首を振りました。「あの村はもうこの世から消えました。あっしがあそこから逃げ出してちょうど一年後、天に大きな流れ星と小さな流れ星が走った夜に。食べつくされたのです。つまり……」

『姫様の怪物に』と言う言葉をかろうじて、老人は呑み込みました。

失望が槍のように心臓を貫きましたが、ペルラは泣きませんでした。

涙を流す代わりに、目を閉じ、石で出来た天井に向かって細く長いため息をつきました。

そのとき、姫君がたった一つの希望を託して、たどり続けた糸がついに途切れたのです。

長い思い出話の代価として、ペルラは商人に約束どおり、一袋の銀貨を与えました。

商人はずっしりと重たい報酬を抱えながら、登りよりもはるかに軽い足取りで、塔の階段を駆け下りました。

外はすでに薄暗くなっていましたが、老人の未来は明るく輝いていました。

この銀貨と長年の蓄えをあわせれば、都で念願の店を出すことが出来ます。

老人は店が繁盛したら、若くてまるやかな腰つきをした娘を嫁に

もらつことを夢見ました。

子供も生まれるでしょう。何人もの息子や娘たちが、でも、最初の子供の名前は決まっています。

それは彼がああ赤ん坊につけるはずだった……。

そのとき、薔薇色の夢は突然色あせ、夕焼けの闇の中へ逃げていきました。

商人にとって最悪の悪夢が、あの獣神の像が息をし、黄金の目を輝かせながらそこにいたのです。

名高いあの人食いの怪物が、庭園の奇怪な彫像の間を王のような足取りで、近づいてきました。

夕闇の中に立つ怪物はさながら一つの音楽でした。

黒い毛皮を撫でた風の中に、裂ける皮膚の、砕ける骨の、命尽きる無数の人間の声を聞こえてきます。

老いた商人はすぐさま、潰れた蛙のように芝生の上にひれ伏し、必死に息を殺しました。

怪物はアブラムシみたいな汗がびっしり浮いた商人のうなじを、好奇心と困惑が入り混じったような目で見つめました。

「はて？ 昔どこかでお前を見たような気がするのだが、どこだったかな？」

「どんでもございませぬ！ 森の王よ、獣たちの神」（このとき、怪物が不機嫌そうな唸り声を上げたので、商人は慌てて言い換えました）「王女さまのご友人よ！ 前に貴方様にお会いしたことがあるのなら、どうしてあつしのように脂の乗った人間が生きていられるでしょうかっ！」

「ははは、確かにお前は美味そうだ。俺がペルラに会っていたことを、神に感謝するんだな」

それつきり、商人に興味を失ったのか、怪物は姫君の塔に向かって再び歩き出しました。

商人はそのあと窒息する寸前まで伏せていましたが、怪物の気配が完全に消えたとわかると、衰えた手足と腹のぜい肉の許す限りの速さで王宮から立ち去りました。

少しでも過去を振り返る余裕が出来たのは破れそうな心臓を押さえて、安宿の寢床に横になった後のこと。

相手に見覚えがあったのは、怪物ひとりだけではなかったのです。商人はベッドの中で呟きます。あの顔、黒いたてがみと角に隠されたあの顔。

思い出そうとしても思い出せないと言うよりも、忘れようとしても忘れることが出来ないあの顔はいつたい誰のものであったのか……。

その日、最後の希望を断られた後も、ペルラは何時もと変わりなく優しく怪物に接しました。

自分の手で食べ物を与え、べつ甲の櫛を使って、艶やかな光を放つまで黒いたてがみをとかしてあげました。

そして髪に隠された少し尖った耳にささやきかけたのです。

「ねえ、今日あるおじいさんに聞いたわ。貴方は昔、山の神さまだったそうね。なら、なぜ自分の山を降りてきたの？ なぜ貴方を崇めていた人たちをみんな食べてしまったの？」

「そんな昔のことは忘れちゃったよ」眠たそうに怪物は答えました。「そんなことより、歌を聞かせてくれ。楽器のやかましい音は吐き気がするが、お前の声は聞いていると幸せな気持ちになってくる」

姫君は請われるままに、静かに歌い始めました。

その歌は子守り歌でしたが、曲は哀しげな響きを帯び、聞く者の瞼を重くする代わりに、涙をにじませました。

怪物はすこし目を開いて、ペルラの顔を見ました。透き通るように白いその肌と骨の下に、隠された深い苦悩と痛いほどの悲しみを見出したのです。

はじめて塔の中であつたあの日から十日よりも、百日よりも長い時間が経っていました。

千日にはまだ届いていませんでしたが、怪物にはもうペルラを食べるつもりはありませんでした。

二人の間には、魂の底まで続く深い絆が生まれていたのです。

ペルラが喜んでいるとき、怪物の世界は、たとえ冬でも春色に輝き、刃のように鋭い北風も絹のごとく感じられ、ささやき交わす小鳥たちの声はまるで天から降ってくる銀の粒のようでした。

しかし、姫君の心が悲哀に閉ざされた今、怪物の眼に見える世界もまた、灰色のベールに閉ざされ、鳥や獣たちの鳴き声はまるで、亡き人をいたむ挽歌に変わったです。

ペルラと怪物の世界が、物言わぬ青い悲しみの結晶に包み込まれてから、一月ほど経った後のこと。

黒い鷹のような翼が、怪物のすむ森に珍妙な客を運んできました。不死身の竜の名で知られる巨大な獣は、木々をばきばきとへし折りながら、森に降り立つと大きな声で叫びました。

「おうい、バケモノ！俺が遊びに来たぞ」

竜は耳を済ませました。しかし、聞こえてくるのは自分の大声の  
こだまだけです。

そこで竜は「あいつめ、どこへ言ったんだ？」とぼやきながら、  
怪物を探し始めました。

杉やヒノキをかけ分けても見つかりません。  
洞窟の中を覗いてみましたが、空っぽです。

熊や鹿を小虫のように追い回しているうちに、竜はついに泉のほ  
とりで怪物を見つけました。

久しぶりに会う怪物は酷くやつれているように見えました。

艶のないたてがみの上に萎れた花や色あせた鳥の羽を乗せて、じ  
っと泉の水鏡を覗き込んでいました。

「おい、何で俺が呼んでも返事をしなかったんだ」竜は爪の先で軽  
く怪物を突つつきました。

「なんでもねえよ……」怪物は気のない返事をしました。

「声に元気がないぜ。具合が悪いのか？」竜はちよつと心配そうに  
聞きました。

「なんでもねえよ……」怪物は上の空で答えました。

「何か悪いものでも食ったのか？」竜はだんだん不安になってきま  
した。

「なんでもねえよ……」しかし怪物の返事はやっぱり同じです。

竜はしばらく考えた後に聞きました。

「お前の鼻の穴の数は？」

「なんでもねえよ……」

「どうやら、けっこう深刻のようです。」

竜は怪物の隣にでっかいお尻をどすんっと下ろしました。

怪物もかなり大きいほうのようですが、こうして竜と並ぶと、まるで象の隣に座った子犬のように見えます。

「なあ、俺たちはいつも顔を付き合わせるたびに喧嘩ばかりしているよな。でも、人間どもと違って、お前と殴りあった後は、なんと言っか、こう、すっきりして良い気分になるんだよ」「うんうん」と竜はひとりうなずきます。「逆にお前が落ち込んでると、俺もじめえっとしたいやな気分になるんだ。だからさ……何か悩んでることがあるのなら言ってみろよ。力になるぜ」

怪物は水面に向けていた顔を上げ、竜のほうをちらっと見ました。

竜は牙を剥いて、にこつと笑い返しました。

怪物はため息と一緒に、しゅしゅ言葉を吐き出しました。

「まあ、困ったときには猫の手だつてないよりマシだつて言うしな……」

それから頭の上の花びらや羽毛を取りながら、少しずつ話し始めたのです。

いつも通り、ある国で生贄を求めたこと、そのとき自ら生贄に志願した一人の少女がいたこと。

その少女の強さと美しさと脆さ、そして彼女をいま包み込んでいる深い憂いの影について竜に話しました。

「俺はあの子に笑って欲しいんだ。感情を押し殺したような作り笑いじゃない。心の底から笑って欲しい。だけど、どうすれば良いのかさっぱり分からない」

そう呟く怪物の顔は、本当に苦しげでした。怪物の中には、何千人もの死人たちの記憶や経験が眠っています。

だけどその血まみれの記録のどこを探っても、白い姫君を笑わせる方法一つ見つからないのです。

しかも、ペルラと一緒に過ごすようになって以来、なぜか自分の中にある屍の山から知識をあさることが段々と難しくなっていました。

竜は神妙な顔で、怪物の話最後まで聞き、そして言いました。

「一緒に牛を盗みに行けば良いんじゃないか？」

「ペルラは王女だぞ、王女がなんで牛を盗みに行く！」

「牛がだめなら、二人で空を飛んで気晴らしするとか？」

「お前とは違うんだ、俺もペルラも空は飛べねえよ！」

「じゃあ、じゃあ、一緒に火を吐いたり、引つかいたり、噛み付き合ったり……」

「それ全部、お前の好きなことばかりじゃないか、さては、何も考えてないな、この野郎！」

それから、竜はいろいろと提案してみたのですが、どれもしつくり来ません。

こうして、この世で女心からもっとも程遠い二匹の生き物は頭をつき合わせ、どうやって女の子を喜ばせるのか、うんうんと唸りながら、考え続けました。

と、竜の鼻の穴から小さな太陽のような火の玉が飛び出し、ぶ厚い頭蓋骨の中に名案が浮かびました。

「そうだ、良いことを思い出したぜ！」

「なんだ、それは？」疑いのまなざしを向けつつ怪物が言いました。

「昔、俺がでっかい農場から牛を盗んでたときのことなんだけどさ。」



俺が牛を一匹ずつ丸呑みしてたら、屋敷の中から歌声が聞こえてきたんだよ。その歌が言うには、どこかの竜がお姫様をさらって、山の中の洞窟に隠したんだそうだ。それから、さすらいの騎士だの、うさぎに化けた魔法使いだの、面白い話が一杯出てきた。これは楽しそうだと思つて、俺はさっそく自分でもお姫さまをひとりさらつて、山の洞窟の中に隠してみたんだ」

「で、楽しかったか？」

「いや、ぜんぜん！ そのお姫さまときたら、泣くわ、叫ぶわ、お漏らしするわ。うるさくてたまんなかったよ。おまけにいくら待つても、勇敢な騎士とかやつてこないし、牛で腹も膨れてたから、けつきよくお姫さまをもとの城に戻すことにしたんだ」

「その話と俺の姫を笑わせることと、どう繋がるんだよ」ちよつとうんざりした声で怪物。

「最後まで聞けつて。俺がそのお姫さまを背中に乗せて、城に戻る途中のことだ。突然、さつきまで生まれたてのコイ又みたいにやかましく泣いていたお姫さまが急に黙ったんだ。何だと思つて、見たら、そのお姫さま、俺が鱗を飾るのに使っていた大きなダイヤモンドに見とれて泣くのを忘れてたのさ！」

竜はちよつと得意げな顔で、怪物を見下ろしました。

「なるほど、宝石か……」空を見上げながら、怪物がひとりごちました。

今まで、なぜそのことに気づかなかつたのか、不思議といえば不思議でした。

思い返してみれば、ペルラはこの大陸で一番大きな国の姫君だといふのに、ほかの貴族のように貴金属を身につけているのを見たことがありませんでした。

これはきつと、あの意地悪な継母の王妃の仕業に違いありません。

怪物は飛ぶような勢いで泉の岸から走り去ると、住処にしていた

洞窟の中に飛び込みました。

そこには、今まで彼が食いつぶした国のさまざまな宝物が山のよ  
うに積み上げられていました。

その中でもいちばん大きく、一番見栄えのする品をいくつか選ん  
で、また洞窟から飛び出した。

泉の前を通りかかったとき、竜はまだそこに座っていました。

怪物は足を止め、ちよつと迷いながらも、自分を見下ろす大きな  
獣にたずねました。

「なあ竜、お前、自分の親が誰か知っているか？ どうやって生ま  
れたのか、覚えているか？」

「ほとんどぜんぜん！」

「じゃあ、お前がどこから来たのか、気になったことはないか？  
自分が誰なのか探ってみたことは？」

「まったくぜんぜん！ それがどうしたのさ。親がいなくても、俺  
はここにいるぜ。昔の思い出なんかなくて、今日の牛は美味い  
じゃないか」

それは竜にとって考え込んだり、悩んだりする価値もない、当た  
り前の答えでした。

しかし、その答えを聞いた怪物は息に詰まり、一瞬、その場に凍  
りつきました。

今まで竜がどんなに強く噛んだ時よりも、深く傷つけられたとい  
う風に。

「俺は……お前をたつた一人の友達だと思っていた」辛うじて絞り  
出した声で言いました。

「俺も、お前を友達だと思っているぜ、バケモノ！」竜は何時もど  
おり明るく言いました。

「いろいろと話を聞いてくれて、ありがとよ。助かったぜ……」  
返ってきた声は深く沈んでいました。

両腕の中にいっぱい、王冠や首飾りや指輪を抱えたまま、怪物はそこから逃げるように走り出しました。

あとにひとり残された竜は、呆然とした声でその背中に呼びかけました。

「おーい、相談に乗ってやったのに、俺と遊んでいかないのかよ」

竜と分かれた後、怪物はわき目も振らずに走り続け、太陽が地平線に顔を隠す前に姫君の塔に着きました。

日も沈まぬうちにやってきた怪物を見て、ペルラと困惑と喜びの入り混じった声で言いました。

「今日はずいぶんと早くいらっしやったのね」

「ああ、良い物を持ってきたんだ。お前にひと目見て欲しくてな」

そう言って怪物は、腕一杯に抱えた荷物を姫君に見せました。

蠟燭の薄明かりを浴びて宝物はさん然と光を放ち、塔の一室を七色の輝きで彩りました。

ペルラもまた息を呑み、声を失いました。

と言っても、ペルラが驚いたのは貴金属の細工の見事さでも、宝

石の麗しさでもありませんでした。

姫君が視線を注いだのは、王冠に絡まった髪の毛、指輪に残る血痕、宝物の美の陰に隠れた犠牲者たちの断末魔の名残りでした。

このとき、ペルラは初めて自分の前にいる怪物がただの美しい獣ではなく、人食いの魔性であることを言葉ではなく、眼に見える証拠として突きつけられたのです。

小さく細く、しかし針のように尖った恐怖が、姫君の心臓を突き刺しました。

残酷な痛みのもとに、心は張り裂け、その傷跡から長い間、押し殺してきた感情がこぼれました。

青い高波は恐れも痛みも呑み込んで、姫君の胸の中を満たし、ついに銀の瞳から溢れ出しました。

「ペルラ、何故、泣くんだけ、誰かお前をいじめたのか？ 教えてくれ。そいつを懲らしめてやるぞ！」宝物を放り出して、怪物が吠えました。

「いいえ、違うの……」悲しみに息も止まりそうなペルラが言いました。「私に優しくしてくれたあなたを、怖いと思ってしまったことがつらいの、近くににいるあなたはとても遠いところにいるのが悲しいの」

「俺は、どうすれば良い、俺にどうして欲しいんだ？」姫君の涙に溺れそうになった怪物が言いました。

「側にいて」ペルラは怪物の身体にしがみつき、黒い毛皮を透明な涙で濡らしました。「お願いよ、私の怪物、いっしょにいて、離れないで、私をひとりにしないで！」

（それは矛盾しているぞ、俺のお姫さま）ペルラの肩を優しく抱き寄せながら、怪物は心の中で漏らしました。（俺と一緒にいたら、お前はひとりになってしまうじゃないか）

怪物は決して盲目でも、おろかでもありません。

彼はペルラが自分のために他の人間を遠ざけていることに気づいていました。

あれほど狭かった部屋が、たった二人でいるだけでなんと空っぽで大きく感じられることでしょうか。

怪物は恐る恐る、ペルラを抱き寄せました。

ああ、望めば、この世で引き裂けないものはないのに……。

この鉤爪の生えた指では、姫の涙をぬぐうことすら出来ません。

第十一話『咆えぬ虎、炉の中の炎』へ続く

第十話 『果ての见えない奈落』 (後書き)

どうも、皆さま、お久しぶりです。

ちよつとした事故のせいで、病院で年を越すことになった作者です。

一人暮らしで、入院すると大変です。

インターネットは見れないわ。更新は出来ないわ(；；)

まあ、とにかく私は戻ってきました。

これからもお話を書いていきますので、またよろしく願います(平伏)

第十一話 『 炉の中の火、咆えぬ虎 』（前書き）

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/sst  
/sst.php?act=dump&amp;cate=ori  
ginal&amp;all=21573&amp;n=0&am  
p:count=1
```

## 第十一話 『 炉の中の火、咆えぬ虎 』

西に傾きかけていた太陽は、夜の君に天の玉座を譲り、闇の衣をまとった月や星が開け放たれた窓から、塔の中を覗き込みました。

塔の最上階では、地上の月であるペルラ姫が夜よりも黒い怪物の毛皮にしがみ付きながら、泣いていました。

姫君の涙も悲嘆も尽きることなく、怪物はどうすることも出来ずに、ペルラを抱いたまま、彼女を慰めることしかできませんでした。

やがて流れ出る涙と共に体力も限界に達し、ペルラは怪物のたてがみを掴んだまま、泥のような眠りに落ちて行きました。

姫君が目覚めないのを確かめると、怪物は鋭い爪でたてがみを切り、ペルラをベッド寝かせてから、そつと離れました。

そして、心配そうに姫の方を何度も振り返り、幾度も心の中で詫びながら、昼のあいだ棲家に行っている森へ戻りました。

目覚めた姫が傷つき、さらに酷く嘆くことはわかっていました。しかし、他にどうすることが出来たでしょうか。

怪物がそばにいる限り、姫の世話をする人間たちは塔に近づけないのです。

天球が一巡して、怪物と一緒に夜が地平線の彼方に去り、再び太陽が顔を覗かせたころ。

廷臣たちを引き連れ、王妃が北の塔の階段を登り、姫の部屋の扉を叩きました。

王妃は返事も待たずに、部屋の中に踏み込み、目を覚ましたばかりのペルラを言いました。



「娘や。今朝、忠実な兵士らより、奇妙な報告があった。あの怪物の住む森から、お前の塔まできらめきが、星の足跡のごとく続いておったそう。近づいて拾ってみれば、なんと、これがすべて形も色も見事な宝石であったとか。何か心当たりはないかえ？」

ペルラは義母の問いかけに答えませんでした。

それどころか、今が朝であること、部屋の中に自分以外の人間がいることにも気付いていないようでした。

「行ってしまった」呟く声には血が滲んでいました。「あの人が行ってしまった。そばにいてくださいとあれほど言ったのに……」

ペルラの様子がおかしいことに気付いた王妃は、そばに歩み寄りました。

子羊の毛皮のスリッパを履いた爪先が、何かに硬いものに躓き、そして 姫を除く、その場にいた全ての人間が驚きに息を呑みました。

一番最初に目についたのは五重塔を象り、七種類の宝玉で飾られた重い黄金の王冠でした。

それから、太陽の涙のような黄色のダイヤモンドに、砂漠の王が焦がれ死んだと言う滴るような緑のエメラルド。

少し傷がついていますが、王妃の掌に余るほど大きなルビーもありました。

名高く、歌にも唄われた伝説の宝の数々が、暗い蝋燭の光を浴びて、あちらこちらで赤く鈍く輝いていたのです。

たちまち、王妃もお付きの廷臣たちも我を忘れて、床に転がる宝物を拾い集めました。

その騒ぎの中で、ペルラだけは回りに血生臭い宝物に目もくれず、自分の手元だけを見つめていました。

姫君の指の中にあつたのは、夜の切れ端のごとく黒い怪物のたてがみ。

血が出るほど強く握り締めたその一束のうえに、また新しい涙がこぼれ落ちました。

さて、王妃と廷臣らが豪華極まりない収穫を手に、急ぎ足で立ち去った後、姫君の塔に近づくと一組の影がありました。

ひとりには姫の世話係である乳母、もうひとはペルラの妹であり、この国の女王であるアンブラその人でした。

見張り番の兵士が慌てて、塔に入ろうとする二人を遮ろうとしましたが、小さな女王の一睨みを浴びてその場に凍りつきました。

その眼差しはこう言っていました。

「わたしはお前の女王だ。今はそうではないかもしれないが、いずれはそうなる。一言でも気に障る言葉を吐いてみる！ その無礼な舌を切り取って、きさまの頭に釘で打ちつけてくれるぞ！」

今や石像になりきっている兵士の隣りを、ゆうゆうと通り抜けて、女王は塔の階段を登りました。

部屋の門を開き、悲しみにやつれたペルラを見たとき、乳母は心痛のあまり悲鳴を上げ、アンブラは声を出しませんでした。喉の奥で猛獣のような唸り声を漏らしました。

アンブラと乳母は力をあわせ、ペルラから服を脱がせ、暖かな湯でいいねいに身体を拭いて、優しくベッドに寝かせました。

その間、姫は血の通わぬ美しい人形のように、なすがままになっていましたが、ときおり思い出したように愛しげに妹君の琥珀色の髪を撫でるのでした。

そのたびに、小さな女王は鼻の奥に刺すような痛みを感じ、目が涙で一杯になりました。

半年近くのあいだ、アンブラは母親である王妃とペルラ自身の命で、塔から遠ざけられていました。

もちろん、それにはちゃんとした理由がありました。

半年前、ペルラは初めて、愛しい妹を怪物に紹介しようとした。た。

ところが、怪物と女王は顔を合わせるなり、まるで不倶戴天の敵同士のようにいきり立ったのです。

アンブラは赤茶色の髪の毛を根元から逆立て、毒蛇みたいにしゃーしゃーと威嚇の声を上げました。

怪物もまた、赤ん坊の虎をからかう獅子のごとく、牙を剥いて怒り狂う女王をせせら笑いました。

ペルラが急いで妹を怪物から引き離さなければ、その場で凄まじい殺し合いが起こっていたのは間違いないでしょう。

その結果、小さな女王が死せる女王になっていたこともまた……。

虎と獅子は一つの森では、暮らしていけません。

その気性も姿も、ペルラを慕っているところも含めて、アンブラと怪物はあまりに似すぎていたのです。

大切な妹を守るために、ペルラがアンブラを怪物の立ち寄る塔から閉め出したのも無理からぬことでした。

しかし、遠ざけられたせいで小さな女王は姉君と怪物の間に何が起きたのかを知りませんでした。

二つの心が響き合ったことも、姉君と怪物が一つの体を持っているように離れがたい存在になっていることも知りませんでした。

何も知らないアンブラにとって目に見える事実こそ全てでした。

山猫のように光る眼に映ったのは、透き通るほど痩せた青白い裸体、痛々しいほどに浮き出た肋骨。

ほっそりした肩には太陽の激しすぎる口づけのあと、銀色にひきつった火傷の痕跡がありました。

ペルラの眼もとには一晩中泣き明かしたあかしが残っていました。アンブラは尖った舌を伸ばし、姉君の涙を舐めました。

その味は口には苦く、はらわたの底で蛇の毒よりも熱く煮えたりしました。

さて、ここでペルラの妹である小さな女王についてちょっと話しておきましょう。

怪物が姉君のそばで暮らすうちに変わっていったように、姉君から引き離されている間、アンブラの身に同じように変化が訪れました。

姉君であったときも、女王になったあとも、アンブラにとって姉

姫こそは唯一の理解者であり、道を照らしてくれる太陽でした。ペルラから引き離された後、女王の激しすぎる性格と溢れんばかりの活力は、光を見失いねじ曲がったまま、成長を続けました。

今も昔も宮廷の人間たちにとって恐怖の的でしたが、その恐怖の質が変わりました。

以前の女王は気の狂ったやかましい子猫であり、突然現れては雷鳴とともに立ち去っていく通り雨のような災害でした。

だが、今のアンブラは王宮を支配する神、それも常に血に飢え、いつ牙を剥くかわからない恐ろしく冷酷な女神でした。

アンブラはもう大声で喚き散らしながら、暴れるようなことはいなくなりました。

代わりに、無言で壁紙を引き裂き、何の前触れもなく高価な壺を床に叩きつけました。

アンブラは怒りに我を忘れて、侍女や召使いを殴りつけることはしなくなりました。

代わりに、爪で血が出るほど侍女の肌をつねり、針で召使いたちを刺して回りました。

このとき、女王のお爪は伸びに伸びて三センチ余りになり、その先端は鉄の板に傷痕を残せるほど鋭利でした。

またその針と言うのは、髪の毛のように細く、血を流さずに骨に響くほど酷い苦痛を与える残忍な道具でした。

西の国には、このようなことわざがあります。

炉の中に隠されてこそ、火はもっとも熱く燃えろと。

また東の国には、このようなことわざがあります。

吠え声を上げず、静かに忍び寄る虎こそ、もっとも恐るべしと。

愛する姉から引き離されたこと。

息も詰まるような宮殿にただ一人孤立し続けたこと。

合い続く不幸は幼い女王の心に深い傷を残しました。

傷口から溢れ出た血は、アンブラの魂の炎に新たな彩りを添えま  
した。

夜の一番深い闇に似た色合いを。

あるいは怪物の毛皮によく似た色合いを……。

その夜、王妃はペルラの寝室から持って帰った何十個もの宝石を  
眺めていました。

王妃のお気に入りには、傷の付いた大きなルビーでした。

その傷物の紅玉は、怪物が持ってきた宝物の中では大した値打ち  
ものではありませんでしたが、何故か王妃はその石に強くひきつけ  
られるのを感じました。

石に透かした明かりをうっとり味わっているうちに、視界の端  
で何か動くのが見えました。

次の瞬間、王妃は口から飛び出しかけた悲鳴を、辛うじて掌で抑  
え込みました。

蝋燭の光が生み出した錯覚でしょうか、一瞬、王妃の目には奇妙  
なケダモノがそこにうずくまっているように見えていたのです。

「ま、まあ、女王陛下。ノックもなさらず、どうしたのです  
か？」

震える声で、扉の影に佇んでいるアンブラに声をかけました。  
心から自分が産んだ娘を愛していたものの、彼女の激しすぎる性格を同じくらい恐れてもいました。

「お母さまが、こんなに遅くまで何をなさっているのかと思って…」

小さな女王はゆっくりとした足取りで蝋燭の明かりの中には入ってききました。

王妃は戸惑いを隠せませんでした。自分のお腹の中から出て以来、アンブラが母親にこんなに優しい言葉をかけたことはありませんでした。

鋭い爪の生えた指を背中に隠し、はにかんだ微笑みで獣のような牙を隠していると、アンブラはまるで年相応の愛らしい少女のように見えました。

しかも、その声の甘さときたら、

「お仕事も大事ですが、お母さまのご健康はもっと大切です。貴女さまは、私にとってなくてはならないお方。愚かにも最近、ようやくそのことがわかってきたのです」

「ま、まあ、なんともつたいないお言葉……」

王妃は恐怖以外の感情で、胸が熱く震えるの感じました。  
長い間餓えていたもの、肉親の愛情に満たされ、涙で目が見えなくなりしました。

そう私はずっと信じていたのよ。私のアンブラはあの女の娘にけっして劣らない、美しくて賢い子だと。いつか女王に相応しい人物になると。誰も気付かなかったけど、私だけは、私だけは！

「あの恐ろしい怪物が、陛下の姉さまに贈り物を持って来たのです。姉さまはお疲れのようだったので、私が代わりにその宝石の見聞をしていました。ああ、ご覧くださいませ、このダイヤの美しいこと！」猫撫で声で言いながら、宝石の一つを差し出しました。

「へえ、まあまあ、と言ったところかしら？」

アンブラは渡された宝石を指の間でもてあそぶと、テーブルの上に放りだしました。

王妃は顔をしかめて、

「ああ、なんとということ。それは太陽の黄玉と言いまして、聖人の手で掘り出され、太陽神の像の眼に嵌めこまれ、何万という信徒に崇められていた、たいへんな宝物なのですよ」

「そう。確かに、ここにあるのは、あの怪物の宝物の中でも一番大きな宝石の一つかもしれない。でも、怪物の蓄えの全部じゃないわ」

長い爪で、宝石をおはじきのように弾きながら、アンブラが言いました。

王妃は返事に困りました。

血がつながっているにも関わらず、娘が何を言っているのか分からなかったのです。

アンブラは口元に謎めいた微笑みを浮かべたまま、母親の側にそっと体を寄せました。

「あの怪物が滅ぼした国の数を思い出して下さいませ、賢いお母さま。あいつの寝床にはきつとこの何倍ものお宝が眠っていますわ」

「え、ええ、そのとおり。でも、それは決して手に入らない宝物よ」「怪物が生きている限りは……なら、簡単じゃないですか」



くすりと笑って、アンブラは蜜のような声で王妃の耳に毒を注ぎました。

「あの怪物を殺しましょうよ」

雷で撃たれたように、王妃は飛び上がりました。

指の先まで震えながら、信じられないものを見るような目で、娘の顔を見下ろしました。

「なんという、なんという恐ろしいことを言うのです!」

「どうして、優しいお母さま? 私はそんなにおかしなことを言うたかしら?」

「殺すなどと……あの怪物を怒らせるだけです。陛下も御存じでしょう。あいつは槍でも剣でも殺すことは出来ないのですよ」

「怪物を武器で殺せないことは間違いないわ。でも、毒ならどうかしら?」

「毒でも駄目です!」王妃は叫びました。「あいつに毒は効きませんわ。何故なら……」

「何故なら、怪物は生きた人間以外食べないから。そして、人間一人を殺す程度の毒では怪物を殺すことは出来ないから」女王は歌うように言いました。

「でも、今はそうじゃない。そうでしょ?」

王妃は絶句しました。

黙り込んだ母親の逃げ道をふさぐように、アンブラはじわじわ近寄っていきます。

気のせいでしょうか?

蝋燭の明かりの外に出た時に、女王の体がうつすらと光を放っているように見えました。

アンブラは王妃の手に自分の手を重ね、耳元に唇を寄せて、さらに言葉をささやきかけました。

「想像してごらんさい、ああお母さま、怪物を殺したあとのこと。この国すべての人間が声を揃えて、お母さまをたたえるわ。見て、あの人を、王の妻にして女王の母。女の身でありながら怪物を殺し、天の下に並ぶ者なき英雄となったあの女性を！そして、お母さまの足元には怪物の死体とその宝が横たわるのよ」

アンブラの目が王妃を覗き込んでいました。

王妃は、その目の中に果てしない栄光と歓喜に包まれた自分の姿を見ました。

黄金を溶かしたように輝くその両目の中に……。

「ああ、でもまだお姉さまがいるわ。怪物の食事は、あの方も毒見をするのですよね」

アンブラは今さら思い出したように付け足しました。

「もちろん、賢いお母さまには、どうすればよいのか、もうおわかりなのでしょうけど」

姉君は傷つけないように、怪物を殺せと釘を刺したのです。

王妃はもう何も言い返しませんでした。

第十二話 『絶望』へ続く

第十一話 『 炉の中の火、咆えぬ虎 』（後書き）

ペルラの父親がなくなった章で一部が抜けていることに気付きました。

アンブラの出生や次の章に関わる大事な伏線なのに！！  
早いうちに修正するように気をつけます（汗）

第十二話 『絶望』 (前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/sst  
/sst.php?act=dump&app:cate=ori  
ginal&app:all=21573&app:n=0&am  
p:count=1
```

## 第十二話 『絶望』

あくる日、王妃は自ら料理の盆を持ち、侍女らを引き連れて、姫君の塔に登りました。

出迎えたペルラに、にっこりと笑って言いました。

「見よ、娘や。先日、都の近くの泉で紅玉の鱗と金の背びれをもった魚が取れてな。それを宮廷の料理人に手を尽くして、調理させたのだ。美しいとは思わないかえ？ これならお前の怪物の胃袋を満足させるとは思わないかえ？」

一晩休んだペルラは、いくらか元気を取り戻していました。

厳しい眼つきで、王妃が差しだした料理を眺めると、取りばしで揚げた魚をひっくり返し、じつくりと調べました。

すべてが済んだあと、ペルラは彼女にしては珍しく、棘のある声で言いました。

「……お義母さま、私は病弱ではありますが、そのおかげでこの国の誰よりも薬と毒に詳しくなりました。毒見をした私が死なないように、魚の裏側に毒をぬったことは感謝します。しかし、この料理をあひの怪物に出すことは出来ません。どうぞ、お引き取り下さい。そして次は毒のついていない料理を持ってきてください」

ペルラは王妃が怒ったときに備えて、身構えました。

ところが、王妃は怒るところか、溢れんばかりに悪意に満ちた笑顔を浮かべたのです。

義母のその満足げな笑顔を見た瞬間、ペルラは自分が間違いを犯

したことに気付きました。

「愚かな小娘め。それで知恵比べに勝ったつもりかえ？ お前に料理の毒が分からないと、この私が考えていたと思うかえ？」

ペルラの耳元で、ささやくその声は針よりも細く鋭く。

次いで王妃は雷のように大きく断固とした声で、周りに控えている侍女らに命じました。

「ペルラを捕らえよ！ 思っておった通り、我が娘は乱心のようじや、我が王国を脅かす怪物をかばうとはな。傷をつけてはならぬぞ。だが、私の邪魔をせぬように、その子を地下の牢獄に閉じ込めておくのじゃ！」

たちまち、侍女らは姫君を囲み、弱っていたペルラはなす術もなく押さえ込まれました。

姫は侍女の優しくも容赦のない腕に抵抗しながら、義母の名前を呼びました。

王妃はそんなペルラの様子を凍えるような眼つきで見つめながら言いました。

「おお、そうじゃ。薄着のドレスで地下牢に入るのは寒かろう。その子の服を脱がし、もっと暖かな服を着せてやるがよい。脱がした服は……あとで私のところに持ってくるのじゃ」

侍女らは命じられた通り、ペルラが着ていた服をはがし、新しい服を着せました。

宮殿の地下にある、王国そのものと同じくらい古い牢の中に姫を閉じ込めました。

王族のためにつくられた贅沢な檻の中で、ペルラは苛立ち、ぐるぐると歩き回りました。

深い焦りと怒りに囚われていましたが、絶望はしていませんでした。

結局、ペルラがいなくては、怪物を毒殺することは不可能なので、

おそらく、王妃は姫を牢に閉じ込め、時間をかけて説得するつもりなのでしよう。

ならば日没まで王妃の要求を拒み通せば良いだけです。

日が沈んで怪物がやってくれば、姫を牢屋から出さないわけにはいかないのですから。

そのとき、地下牢の扉の鍵が音を立てました。

ペルラは足を止め、当然そこにいるはずの義母の姿を求めました。

その瞬間、驚きが痛みとなって姫の胸を貫きました。

生まれたときから、ペルラは病を通してあらゆる痛みと苦しみを味わってきました。

だが、稲妻のように心臓を撃つ、これほどの衝撃は今まで経験したことはありません。

地下と地上を繋ぐ階段の上に立っていたのは、ペルラにそっくりな少女でした。

白い髪も銀の瞳も、輝くようなその美貌まで瓜二つ。



着ている服を除けば（侍女らの手で脱がされたあの服です）、まるで等身大の姿身がそこに置いてあるようです。

「ほう、さしもの恐れ知らずの姫も言葉が出ないようじゃな」  
「お義母さまっ？」少女の声を聞いて、ペルラが喘ぎました。

姫の顔と王妃の声を持ったその少女は、牢屋にあった松明の明かりの下に出ました。

そうすると、その顔が思っていたほど、ペルラに似ていないことがわかりました。

両の瞳がオレンジの光を浴びて、細い金色の切れ込みと化したからです。

「この目が気になるかえ？」からかうように笑いました。「これはわが祖先の置き土産よ。私が『山の王』の出身なのは知っておろう？ かの山の上には魔法の泉があり、百年に一度その泉に竜の形をした流れ星が落ちるのじゃ。だが、今から三百年ほど前、山が年老いたか、星の力が強すぎたのか、山肌が崩れて、竜の血が下界まで流れ落ちた。それを口にしたのが、名も知らぬ私の祖先よ。たった一口であったが、以来我が一族は獣のような外見を持って生まれるようになったのじゃ。熊のように大きな者、山羊のように毛深い者、蛇の瞳をもつ者、或いは……狼の牙と虎の爪をもつ者」

王妃は口元を歪め、その笑みに皮肉な苦みを加えました。

「先王は、ずっとお前の白い髪とお前のアンブラの齒について悩んでおった。自分の呪われた種のせいだと思っておった。しかし、この通り、少なくともお前の妹に関する限り、我が夫君に非はなかったというわけだ」

「では……お父さまが病に伏せたおり、現れた亡霊や子鬼は、貴女

の仕業だったのですね」

「うすうす感じておったのではないか？ 勘のよい娘や。竜の血が与えたのは獣じみた姿ばかりではなかったのさ。我が一族は、みな妖術師か魔女なのじゃ。山を動かし、河の流れを変えたと言う伝説の魔法使いほどの力はないが、鷹や犬に姿を買え、雲と風を操り、或いは……」

王妃の手が、ゆで卵のようにつるりとしたその頬を撫でました。

「どうじゃ、似ているとは思わないかえ？ 幻とはいえ、たつぷり手間と時間をかけたのじゃ。お前の愛しい怪物もこれは見抜けまい。そして全てが終わった後、下々の者は声をそろえて言うであろう、王の妃にして女王の母、黄昏時に怪物を殺した、魔女の中の魔女とな！ もはやペルラを女王にと叫ぶ舌は一枚もなくなるであろうよ」

毒の蜜を滴らせる花のごとく、ペルラの顔をした王妃は艶やかに美しく笑いました。

自分に向けられたその悪意の濃密さに、姫は眩暈すら覚えました。それでも、ペルラは何とか言葉で義母を説得しようと思いました。

「お義母さま、お聞きください。私は今まで王位を欲しいと思ったこともなければ、これから欲しいこともありません。アンブラを、愛しているのは貴女だけではないのです。あの子を傷つけるぐらいなら、私は死を選びます」

この言葉を聞いて、王妃の顔から表情が消えました。

ドレスの懐を探り、その中から取り出したものをペルラに見せました。

「ペルラよ、これが何か分かるか？」

「ルビーです。面に大きな傷のある……」戸惑いながら、姫は答えました。

「違う！」

王妃は咆えました。

その声の大きさに牢獄の壁までも震えました。

「これは石じゃ、お前が昨晚、忘れて省みなかった石ころじゃ。だが、知っておるか、かつてはこの石を巡っていく度も戦が起き、何千と言う血が台地に流されたのだ。お前が捨てた石ころのために、命を賭けた者もおったのじゃ。清らかなペルラ、優しいペルラ、お前が王位を望んでいないと、この私が知らなかったと思うのか！」

刹那、王妃が被った幻が破れ、その下にどす黒く煮えたぎる感情が外にこぼれ出しました。

酸に似た憎悪の匂いが牢屋の空気を焼き、姫は背中があわ立つのを感じました。

自分に対する義母の怒りが、王族の権力争いを越えて、遙かに根深いものであることに知ったのです。

「お義母さまのお怒りのほどは良く分かりました。私が目障りとお思いでしたら、今すぐこの王宮から立ち去ります。怪物と一緒に人いない土地へ移り、そこで誰の目に入らないよう生きていきます。そうすれば、怪物を追い払ったと言う名誉はお義母さまのものになるでしょう。ですから、どうか、どうか、私たちを捨て置いてくださいー！」

ペルラは冷たい石の床に膝をつき、王妃に懇願しました。

しかし、慈悲を請うその声は、義母の胸の中で燃え立つ想いに油を注いだけでした。

王妃は手に持ったその宝石を、牢屋の壁に打ち付けました。

「この私の怒りが、私の気持ちが分かっただと！」

宝石がぶつかったところが火花が散り、松明の火が狂おしく身をよじりました。

「ならば、貴様に死んだ薔薇と比べられる花の気持ちが分かるか！床の中で、夫の口から他の女の名を聞いた妻の気持ちが分かるか！腹を痛めて生んだ我が子に、目を向けてさえもらえない母親の気持ちが分かるか！王に、アンブラに、民に、怪物にさえ愛されたとお前に、生まれながらの宝石であるお前に、石ころである私の気持ちがわかってたまるかっ！」

王妃はいく度もいく度も、壁を殴りつけました、石が手を切り、血が流れ出た後も。

そのたび、ルビーからほとばしる稲妻が天上を焦がし、松明の火は次々に色を変えました。

憧れの白、妬みの緑、血を流す痛み、赤と悲しみの青を経て、ついには失意と苦悩と苦い紺色に……。

「魔法の力は私の最後の誇りだった。それすらも、お前は魔女の名前と一緒に私から奪い取った。お前など死んでしまえばよかったのだ、あの怪物に食われて死んでおれば、そうすれば」

次々と飛び出た叫び声が途切れしました。

そして、喉の奥に詰まった嗚咽と一緒にこぼれ出たのは、

「少しは、お前を愛してやることのできたのに……」

皮膚が破れ、血に濡れた王妃の指から、ルビーが転がり落ちました。

ふたたび橙色に戻った松明の火が、涙に濡れた二人の顔を照らしました。

王妃は自分が吐いた言葉に鞭打たれて泣き、姫は知らぬ間に人を傷つけていた惨い事実には涙を流しました。

もはやここに至っては、どんな言葉も王妃を説得できるとは思えません。

だが、ペルラは床に座り込んだまま、王妃に向かって手を差し出しました。

倒れた赤子が母親を求めるように、無心に助けを求めたのです。

その無防備さ、その無垢さに一瞬、王妃も進み出て、ペルラの手を取るかに見えました。

しかし、彼女の傷はあまりに深く、傷つけられていた時間はあまり長く、王妃は結局足を止め、姫に背中を向けました。

最後に呟いたその言葉は、謝罪であったのか、あるいは別れの挨拶であったのか、小さすぎてついにペルラの耳に届きませんでした。こうして、義理の母と娘の最後の会話は、嘆きと涙のうちに終わったのです。

ペルラを悲嘆と檻の中に残して、王妃は北の塔にある姫の部屋に戻りました。

目の前には、温めなおされ、毒を塗りなおされた揚げ魚が湯気を上げています。

姫の幻を衣のように纏いながら、王妃は日没と怪物の訪れを待ちました。

熱く沸き立つた感情は潮を引き、後に残されたのは、砂のように不毛な物憂さだけでした。

牢の中でペルラに吐きつけた言葉の数々が、ただの逆恨みであることを、王妃自身が一番良く分かっていました。

だけど、王妃は自分の感情を抑えることができなかったのです。

半生を通じて、彼女は良き王妃、良き妻、良き母親になろうと努めてきました。

しかし誰よりも努力してきたのに、その努力が報いられることはありませんでした。

誰よりも愛して欲しかったのに、誰も彼女を愛してくれませんでした。

一体、誰が悪かったのでしょうか。

誰がこの灰色の人生の責を負うべきなのでしょう。

自分ではありません。そんなはずはありません。

もし、過ちを認めれば、唯一支えてくれた誇りが挫け、もう立ち上がることができなくなります。

自問自答を繰り返す王妃の耳に、乾いた音が届きました。

気づけば、太陽は既に地平線に顔を隠し、世界は青紫色のベールに覆われていました。

夕暮れとともに、怪物がやってきたのです。

鋭い爪が石をこする音が、次第に近づいてきました。

掌はじんわりと汗にぬれ、息を吐くたびに、電気のように緊張が背中を走り抜けます。

そして、怪物がその黒い身体で、夜空を遮りながら、部屋の中に入ってきました。

王妃は喉もとまで込み上げた悲鳴を辛うじて押し殺しました。

間近に迫った怪物の姿は見上げるほど大きく、記憶にあるよりもずっと恐ろしく映りました。

身体が恐怖で痺れるのを感じながら、王妃は何とか声を絞り出しました。

「よ、ようこそ、お待ちしておりましたわ」

「ペルラ……？」怪物が首を傾け、顔を近づけてきました。「元氣になつたみたいだが、お前、ちょっと太ったんじゃないか？」

もう少しで跳び上がって、逃げ出しそうになりました。

完璧な幻を作り上げていたはずなのに、姫の服を着て匂いまで同じだったはずなのに！

どうやってか、この怪物は、魔法を見破りかけているのです。

王妃の胃はすくみあがり、血と肉はその場から逃げると急ぎ立てました。

彼女をその場に踏みとどませたのは、自分を見つめる怪物の金色の眼でした。

思いやりの籠ったその眼差しの暖かいこと、慈しみに満ちたその声の滑らかなこと。

王妃の人生の中で、こんなに愛情に満ちた目で話しかけられたことは一度もありませんでした。

アンブラにはペルラがいました。ペルラには怪物がいました。

だが、王妃には誰がいたでしょうか？

彼女は嫌われていました。彼女は疎まれていました。

一国を治める立場にありながら、彼女はどうしようもなく孤独でした。

消えかけていた怒りが再び腹の中で燃え上がり、恐怖の闇を押し返しました。

王妃は獲物に忍び寄る猫のような優しさで、毒料理の皿を捧げました。

「このお魚を食べたおかげですわ、愛しい人。あなたに精をつけて欲しいと、特別に料理をさせたのよ」

「ああ、確かにこいつは美味そうだ……」

怪物はペルラの振りをした王妃の言うままに、料理に手をつけました。

尾びれを摘まんで魚を持ち上げると、まるごと口の中に放り込みました。

狭い部屋の中に、頑丈な歯が魚を骨ごと噛み砕く音が響き渡りました。

傍らに立つ王妃にとって、息の詰まるような時間が過ぎていききました。

もし、怪物に毒が効かなかつたら？

たくらみを見破られ、呑み込む前に吐き出されたら？

蝶の羽根のように薄い時が一瞬また一瞬と積み重なり、ふいに怪物が肩を震わせました。

それから、血も凍るような雄叫びが、牙だらけの口からほとばしりました。



怪物の巨体が跳ね上がり、天上にぶつかって、塔をゆるがせました。

床に落ちてのた打ち、前足後ろ足をばたつかせ、空気をめっちゃくちゃに引っ掻きました。

そして、激しい痙攣の後、血を吐き、ついに怪物は動きを止めたのです。

怪物の爪を避けて、逃げ回っていた王妃は、恐る恐る倒れた黒い獣に近づきました。

毛深い前足を爪先で軽く蹴ってみました。怪物は動きませんでした。

次に体重をかけて踏んでみました。怪物はやはり動きませんでした。

ようやく怪物の死を確信し、安堵と誇らしさが胸一杯に広がった、そのときでした。

死んだと思っていた怪物の腕が跳ね上がり、王妃の腰を捕まえま

した。

万力を思わせる凄まじい力に、肋骨と内臓が悲鳴を上げます。

「お前、は、ペルラじゃないな……」怒りにまばゆく輝く両目「俺に、何を、食わせた！」

恐慌に襲われた王妃は、言葉の代わりに雷を呼び出し、投げつけました。

魔法が生み出した小さな火花は、怪物の中で燃え盛る暗黒の炎にかき消されました。

しかし、顔をチクリと刺され、激怒にかられた怪物は、王妃の体を力任せに壁に投げつけました。

壁にぶつかる一瞬前に、王妃の脳裏を今までの人生が矢のように通り過ぎていきました。

結婚式の日、ベールの間から覗いた若い王の顔、苦痛に始まり、失望に終わった出産、無残に捨て置かれ、鏡の前で積み重なる顔のしわと時間を数えるだけだった日々。

その全てが駆け抜けたあと、瞼の裏によみがえったのは、花嫁の輿から見た『山の王』の雄姿、ああ夕焼けを浴びてお山の肌は黄金に輝き、山頂には透き通った氷の冠が……。

一瞬のあとに、体がバラバラになりそうな衝撃が背骨を貫きました。

そして暗黒が王妃の全てを包み隠しました。

王妃が壊れた人形のように崩れ落ちたあとも、怪物は荒れ狂うのをやめませんでした。

咆え猛り、ペルラが育てた薬草の鉢をひっくり返し、本棚を倒し、貴重な書物を紙くずの山に変え、手の届くところにあつたあらゆるものを壊しました。

それでも内臓をかじる苦しみの蛇は、その牙を休めようとはしません。

同じころ、地下牢では、ペルラもまた苦しんでいました。

怪物の悲鳴は壁を伝わって、地下にも届き、姫の神経をかきむしっていたのです。

怪物が泣き叫んでいたように、ペルラも泣き叫びました。

牢獄の鉄格子を叩き、我が身も砕けよとばかり、体をぶつけました。

と、姫の体の中で何かが弾けたような感触がありました。

生温かい塊が、泣き声を押しつつぶしながら、喉の奥からこみ上げ

ました。

口を押さえようとした指の隙間から真っ赤な滴が滝とこぼれま  
した。

自分が吐き出した大量の血を、信じられない目で見ているうちに  
二度目の吐血。

視界は急速に狭まり、鉄格子を掴もうとした指は空を切って……。  
手折られた水仙のように、ペルラは自分の血だまりの中に倒れて、  
気を失いました。

そのとき、怪物はついに激痛に耐えかねて、ベランダから飛び降  
りました。

地面に激突し、起き上がり、叫びながらまた走りだしました。

走るうちに怪物の肩が裂け、その傷口から牙が生えて新しい口が  
出来ました。

それから一筋、また一筋、黒い毛皮に傷が開きました。

その傷は全て顎となり、顎は目や鼻や角を備えた新しい首に変わ  
りました。

山羊のような首がありました。

虎のような首がありました。

人のような首もありました。

まるで体の中に激しい爆発が起きているみたいに、怪物の体はよ  
じれ歪み、変形しながらも膨れ上がり続けました。

王宮の城壁に達する頃には、怪物の体は壁をひと跨ぎできるほど  
大きくなっていました。

その壁を押しつぶし、城下町の建物を揺るがしながら、怪物は走  
り続けました。

姫君の塔に背を向け、遠く、遠く、地平線の果てまで。

まるで何かが逃げるように……。

その晩、怪物が逃げ去った方向から、地を揺るがすような雄叫びが聞こえてきました。

「ペルラ、俺を裏切ったな！」とその声は言いました。「ゆるさないぞ！ 絶対に許さないぞ！ かならずお前を食ってやるからな！」  
声は夜通し鳴り響き、そのせいで都の住人誰一人眠ることさえできませんでした。

城下町の住人は不安にかられて王宮の扉を叩き、王宮は混乱の極みにありました。

姫君の塔で王妃は義娘の服を着たまま見つかったのも不思議でしたが、それ以上に不可思議だったのは、ペルラ姫がどんなに捜しても見つからなかったことです。

実は王妃の侍女らは姫の居場所を知っていたのですが、彼女らは血を吐いて倒れたペルラを死んだものと勘違いし、女王の逆鱗に触れることを恐れて、とっくに逃げていたのです。

打つ手も見つからぬまま、廷臣らはずいぶん命惜しさに王宮から逃げ出す道を選びました。

そのとき宮殿に残ろうと言う人間は二人しかいませんでした。

一人はペルラの乳母でした。

乳母は行方不明の姫を探すために、城に残ろうとしました。

しかし、彼女は愛娘と生まれたばかりの孫の涙にほだされ、「姫は先に逃げた」との言葉を信じて、最後には王宮から落ちのびました。

もう一人は、ペルラの妹であるアンブラ女王その人でした。

女王は怒り狂って剣をふるい、自ら軍を指揮して怪物を迎え撃と

うとしました。

だが、王家の血を惜しんだ家臣らは、薬で女王を眠らせると、こっそり彼女を王宮から連れだしました。

そして、寂れた王宮に、血の中で眠り続けるペルラがただ一人で取り残されたのです。

第十三話 『 名付け親の贈りもの 』 へ続く

第十三話 『名付け親の贈りもの』 (前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/sst  
/sst.php?act=dump&app:cate=ori  
ginal&app:all=21573&app:n=0&am  
p:count=1
```

第十三話 『名付け親の贈りもの』

気がつくくと、ペルラは不思議な世界の中にいました。

そこには上も下もなく、光と闇は入り混じり、灰色の河となって空間を満たしていました。

終わりも始まりもない時間の中で漂ううちに、何者かが髪に触れてくるのを感じました。

澄んだ水に手を遊ばせるように姫の髪を漉き、頭を撫で回しました。

その指の優しさと心地好さに、ペルラの心は灰色のまどろみから浮かび上がり、瞼を開きました。

姫君の側に佇んでいたのは、黒一色に身を包んだ女でした。

フードを下ろした顔の半分は月のように眩く燃え、もう半分は夜色のヴェールに隠されていました。

蒼白い唇に浮かんでいたのは、心をおののかせ、魂をとろけさせる微笑。

凄まじい美に晒されて、ペルラの心に残っていたまどろみの霧は、跡形もなく吹き散らされました。

「目を覚ましました」とつさに心に浮かんだ言葉が、口から出ました。

『いや、お前は眠ったのだ』黒衣の女の声は言いました。『かつてなく深く深く眠った結果、妾の領域に入り込んだのだ。旧いことわざにも言うのではないか、眠りは短い死、死は長き眠りである』

「では、貴女は『死』なのです」ペルラは問いました。

『命と言葉を持つものは、妾をそのように呼ぶ』

「子供のころ、貴女が私の名付け親であり、守り手であると聞きま

した。もしそれが本当なら、早くその名高い骨の手でこの命を手折ってください。この世には、哀しくて辛いことが多すぎます。私は……疲れました」

ペルラは両手で顔を覆いました。白い指の隙間から、涙がこぼれ光りました。

『死』は自分の手を 命を摘み取る左手ではなく、肉と皮を備えた右手を 姫の手に重ねました。

『我が名付け子よ、そなたの言葉は半ば正しく、半ば間違っておる。いかにも、妾はそなたの名付け親であり、守護者たらんと誓った身である。しかし、今日来たのは、そなたの命を手折るためではない。それはまだ先のこと。さあ、我が手を取るがよい。お前の知りたいことを教え、見たいと思つたものを見せてやるう』

そこで、ペルラは言われるままに『死』の指を握り返しました。

伝説では『死』の手は、火のごとく燃えているか、氷よりも凍てついていることになっていました。

しかし、姫の触れたその手は、柔らかく涼やかで、まるで人間の手のようでした。

『死』の手を取つたとたん、ゆるやかに流れていた世界が、突然大きく揺らぎました。

眼に見えぬ刃が灰色のベールを引き裂き、開いた隙間から小さな明かりを散りばめた闇がのぞきました。

いつの間にか、ペルラは『死』と一緒に、雲ひとつない夜の空に浮かんでいたのです。

頭上には凍つた光を投げかける満天の星、足元には石の牙のように、尖つた岩山が並んでいました。



そのとき、『死』が口を開き、闇が空が風が山が大地が、世界そのものが姫に語りかけてきました。

『姫の生まれた都から、北を目指して馬で走ること数ヶ月、そこには岩と荒地がノコギリの刃のごとく連なる厳しい大地。その岩山の中でもとりわけ大きくて鋭いものは、腹の中に磁力を帯びた鉱石を大量に含み、山の磁力は時折り、落ちた天の星をその懐に引き寄せた……』

また、磁石の山の谷には、一匹の獅子が住んでいました。

この獅子は天から落ちてきた星を食べ続け、そのおかげで鉄の皮膚と青銅の筋肉を手に入れました。

かつてはこの獅子を倒して名を上げようと、英雄たちが列を作つてこの土地にやってきたこともあります。

だが、星の魔力を呑んだ獅子は余りに手ごわく、痩せた大地は余りに魅力に乏しかったので、何時しか英雄たちはこの土地のことを忘れ果てました。

後に残された英雄ならぬ人々たちは、殺すことも忘れることも出来ぬ獅子を神と崇めるようになりました。

人々は溪谷に獅子似せた神像を作り、祭壇を造り、豊作と安寧を祈つて、一年以内に生まれた赤ん坊を獣の牙の前に差し出すようになったのです。

しかし、こうした村人たちの儀式は無益でした。

いくら、星の力で魔法の身体を手に入れても、動物に人間の崇拜が理解できるはずありません。

村人の生贄は、ただ山に住む獅子に人間の味を覚えさせただけで、何のご利益もありませんでした。

本当のところ、生贄の儀式には、豊作以外にも、大きな声では言えない意味がありました。

厳しい冬を前にして、良く食べる小さな口を一つ減らす、間引きという名の意味が。

人々は子殺しの汚名を生贄という名の衣の下に隠し、罪の意識を信仰の火酒で紛らせていたのです。

こうして毎年、青葉が枯れて、冬が目覚め始めるころになると、村人たちは生贄を選び、選ばれた子を伴って山を昇りました。

『……ちょうど、今お前の足元で行われておるようにな』

『死』に言われて見下ろすと、果たしてそこには山を目指して歩く松明の群れがありました。

もつと良く見たいと思つた瞬間、ペルラの視点は猛禽のように空を舞い降り、村人たちの肩の高さで止まりました。

村人らは麦わらと粘土で作つた獅子の仮面をかぶり、笛を吹き、銅鑼を鳴らし、音楽で恐怖と闇を押しつけながら、山を登っていました。

やがて枯れ谷の底に在る祭壇に着くと、神官は生贄の赤ん坊を渡る母親の手から奪い取りました。

そのとき、赤ん坊の身体を包んでいた豹の毛皮がほどけ、真っ白な裸体が星の光にさらされました。

ペルラが顔を赤らめました。赤ん坊は男の子でした。

神官は眠り薬を赤ん坊を飲ませると、早口で祈りを捧げました。

短い祈りが終わると、人々は泣き叫ぶ母親を引きずりながら、逃げるようにその場を立ち去りました。

神として崇める一方、心の片隅で獅子にとって生贄も自分らも大して変わらないことを知っていたのです。

後には松明に赤く染められた祭壇と、その上でスヤスヤと眠る赤ん坊が残されました。

ここまででは、ペルラが牢商人に聞いた話の通りでした。

姫はぐるりと辺りを見渡ししました。

(光もないのに、なぜか真昼のように闇を見通すことが出来ました) 見つめました。溪谷の岩影に隠れて、若き日の行商人がこちらのほうを覗いています。

行商人(十七年後の彼が言うほど痩せているわけではなく、ハンサムでもなかった)は迷いながらも、松明の光の中に入ろうとしていました。

だが、突然、溪谷の崖から大きな岩が滑り落ち、雷鳴のような唸り音が灰色の山肌を震わせました。

奮い立たせた勇氣は一瞬にして萎え、若い商人は押し殺した悲鳴を漏らしながら、村人たちの後を追って谷の神殿から逃げ出しました。

商人の後悔に満ちた人生を知っているペルラは、彼の背中を目で追いながら、少し胸を痛めました。

それから、商人の話の続きを見定めるために、また赤ん坊のほうに目を向けました。

生贄の祭壇では、まさに谷の主がその悪夢じみた姿を現そうとしていました。

星の光は獅子に、獣はおろか、人間の限界をも越えるほどの寿命を与えていました。

金色の毛皮は、長い年月に白く色あせて、鋼の体は山のように膨れ上がっていました。

獅子は逃げていく商人と眠り続ける赤ん坊を見比べました。

少し考えた末に、二本の足で逃げた脂身よりも、目の前の柔らかい肉のほうを選びました。

獅子の大顎が下り、夢の中にまどろむ赤ん坊の身体を噛み砕こうとした、そのときでした。

毛皮をはやした一陣の風が、大顎と祭壇の間を駆け抜けたのです。獅子の鼻先から獲物をさらったのは、一匹の若い豹。

黄色と黒の毛皮は月光を浴びて金ときらめき、目は滑らかな頭蓋骨にはめ込まれた一対の緑玉。

白くつややかな牙が、毛皮のおくるみごと赤ん坊を啜えていました。

この無礼に、激しく怒り狂ったのは獅子です。

老いた獣は谷間の王でした。

王が口をつけようとした肉を食卓からさらうのは、許されざる侮辱でした。

岩山をゆるがせる、凄まじい追跡劇が始まりました。

豹は赤ん坊を啜えたまま、迷路のような岩の隙間をぬって走り、山肌を駆け上がりました。

老いた獅子は力任せに岩を砕き、砂利のなだれを引き起こしながら、その後を追いました。

山を半ばをまで駆け昇ったとき、豹が岩に開いた亀裂の中に飛び込みました。

獅子は執念深く岩の間に前足を突っ込みました。

だが、亀裂は余りに深く狭く、ついに獅子は不満げな唸り声を残して立ち去りました。

ここで鷹のように空を舞っていたペルラの視線は、地面に降り立ちました。

狐のように岩の隙間にもぐりこみ、その奥で起こっていることを目撃したのです。

巢穴の奥まで逃げ延びると、豹は加えていた赤ん坊を地面に下ろしました。

爪を引っ込めた前足で、男の子を包んでいた毛皮を綺麗に剥がしました。

谷間の王から生贄をさらった豹は雌でした。

豹はこの夏に美しい雄の豹と恋に落ち、少し季節外れの赤子を産み落としていました。

しかし、夫は獅子に食い殺され、残された赤子も人間の獵師の手にかかって命を落としました。

生贄の男の子をくるんでいた毛皮は、まさにこの豹の子供の毛皮だったのです。

変わり果てた我が子に頭をこすり付けていたそのとき、薬の抜けた赤ん坊が目を覚ましかけました。

母親の体温を求めて手を伸ばした男の子の手が、豹の濡れた鼻に触れました。

こうして、子供を失った豹は人の子の母となり、母に捨てられた子は豹の養い子となったのです。

続く冬の数ヶ月を男の子は、暖かい毛皮を備えた母と一緒に過ごしました。

雌豹の乳房から乳を飲み、乳が枯れると、今度母が持ってきた獲物を食べました。

生贄の男の子には、生贄として選ばれた理由があったのです

赤ん坊は『鬼子』でした。

生まれたそのときから頭髪を生やし、口には綺麗な歯が揃っていました。

その小さいが頑丈な歯で、男の子はウサギの肉を食いちぎり、小鳥の骨を噛み砕きました。

厳しい冬が過ぎ、春が若草と共に芽生え始めると、豹は養い子を連れて外の世界に出ました。

このとき、赤ん坊の柔軟な心は、すでに雌豹を母親と、自分自身を小さな豹と思い込むに至っていました。

男の子は短い手足で、よちよちと母親の後を追いかけて、大自然の中で、豹が学ぶべきことを学びました。

獲物に忍び寄るときは風下から。

鳥の卵と雛は簡単に手に入る美味しい餌。

だが、崖にある鷹の巣には手を出してはいけない。

ウサギを殺すときは、首をひねって一気に骨を折ること

食べるときは、緑のぐによぐによした内臓を口にしてはいけない。

そして、絶対に、絶対に、谷間の獅子に近づいてはならない。

男の子は人間らしい好奇心と、豹の素直な心で、母の教えてくれる知識を貪欲に吸収しました。

うつすらと緑の絨毯に覆われた山は教室であり、食卓であり、遊び場でもありました。

長い間、豹の母親と人間の子供は、楽しく幸せに暮らしていました。

しかし、春も終わりに近づいた、ある夕暮れのこと。

狩りの帰り道で、親子は巨大な影が、巣穴の入り口を塞いでいるのを見つけました。

谷間の獅子は、けっして生贄の肉を諦めたわけでも、豹の無礼を

許したわけでもなかったのです。

雌豹は恋人が自分を守ってくれたように、養い子を守ろうとしました。

そして恋人のように獅子に殺されました。

男の子は豹が望みのない戦いをしている間に、何とか巣穴の中に滑り込みました。

岩の影でなす術もなく震えながら、獅子の爪と牙が優しい母を血と肉の塊に変えるのを見たのです。

この日を境にして、山での生活は男の子にとって辛く悲惨なものになりました。

豹は養い子に多くのことを教えていましたが、男の子は余りに小さく、豹ではなく弱い人間でした。

教室であり、食卓であり、遊び場であった山は地獄となりました。庇護者を失った幼子は、餓えた肉食獣にとって、汁気たっぷりのもろちん肉に過ぎません。

空には鷲が、地には狼、河では大蛇が、何よりあの執念深い獅子がつねに男の子を狙っていました。

食事の内容もずいぶん変わりました。

男の子には鋭い爪や牙はなく、獲物を追いかけて山を駆け回るしなやかな手足もありません。

美味しいウサギや鳥を捕まえるのは、夢のまた夢。

今や、主食は簡単に捕まえられる青臭い虫と苦い草の根だけになりました。

唯一のご馳走は鳥の卵でしたが、これは競争相手の多い食べ物でした。

苦勞して取った卵を、狐や猿が横取りされたことが何度もありま

した。

ひもじさと寂しさは、砂漠で迷った人間を追うハイエナのように、男の子の後をつけ回しました。

ついに、餓えに負けた幼子は、母親の教えを破り、崖にある鷹の巣を狙いました。

雛の悲鳴を聞きつけた鷹の両親は、すぐさま駆けつけ、厚かましい盗人に襲い掛かりました。

突っつかれ、引つ掻かれ、羽根で叩きのめされた男の子は足を踏み外して崖から落ちました。

がけ下で待ち構えていた鋭い石が、綺麗な目を一個潰し、左膝の皿を割りました。

こうして、数奇な男の子の人生は、さらに暗く厳しい奈落へと転がり落ちていったのです。

目と逃げ回る足を失った幼子は、それ以後、山の地下を走る洞窟の中で暮らすようになりました。

一筋の光もささない暗黒の中を、両手を使って蛇のように這い回る毎日。

口にするものといえば、洞窟の壁に生えたコケとぬるぬるした嫌らしい虫だけ。

極限に達した餓えは、成長期にある身体を蝕み始めました。

もう男の子は愛らしくも、太ってもいませんでした。

身体の肉はごっそり落ち、皮は伸びていく身体についていけず、骨にべったりと張り付いています。

普通の人間ならば、とつくに命を落としていたことでしょう。

しかし、男の子は普通の赤ん坊ではなかったのです。



人の間で成長していれば間違いない英雄に。

運に恵まれていれば、一代で王になっていたかもしれない器の持ち主だったのです。

だが、その人並外れた生命力も、いまは残忍な拷問の道具以外の何者でもありませんでした。

昼も夜もない闇の中で、男の子はうずくまり、泣きました。

胃袋を満たしてくれる食べ物と、心を満たしてくれる優しい温もりと子守り歌を求めて泣きました。

だが、泣き声に答えるのは蝙蝠の甲高い叫びだけ。

身体をほぼ食べつくした飢餓は、ついに内側に爪を伸ばし、幼子の心を虫食い穴だらけにしました。

あまりに幼いために自ら命を絶つことも思いつかず、火で炙られるような日々だけが続きました。

それから夏がやってきて夏が去り、秋が訪れて恐ろしい冬が近づきました。

何ヶ月もの時間が過ぎ去りました。何ヶ月もの餓えと孤独に満たされた時間が……。

男の子はもう動きませんでした。

骨と皮の塊となって、泥の中にうずくまり、口元を流れる塩辛い水をなめて生きていました。

いま、肉体の内側に覗き込んでも、男の子の心を見つけることは難しかったでしょう。

眼に見えるのは、二つの餓えが食べ散らかした痕跡、無惨な大穴。その穴の上を走る細くはかない蜘蛛の糸のような筋が、幼子に残された精神の名残りでした。

ここまでの経緯を全て見守っていたペルラの心に、耐え難い痛み

が走りました。

自分も苦痛に満ちた一生を送ってきたために、男の子の苦しみに激しく共感したのです。

少しでもいい、その苦しみを和らげてあげたくて、ペルラは幼子の身体に触れようと思いました。

しかし、何度手を伸ばしても、透き通った姫の指は、男の子の肌をすり抜けるだけでした。

深い悲しみにとらわれたペルラの耳に、『死』の声が早すぎる冬の雪のように降り注ぎました。

『ここで見たものを心に刻んでおけ。我らはそろそろ、次の舞台へと移らねばならぬ』

「この子を置いていくのですか！」ペルラは愕然と顔を上げました。「こんな、苦しみの中に、この子を置き去りにしていくというのですか！」

『ここにおいても、その子供に何もしてやることはできん。我らは未来の亡霊なのだ。そなたが見ているのは、すでに終わったこと。もはや変えることは出来ぬ。そして案ずるな。後でまたこの場所に戻ってくるのだ』

『死』が手を上げると、世界が嵐に包まれました。

洞窟も死にかけた男の子も、全ての風景が解け崩れて渦を巻き、はるか彼方に流れ去りました。

そして嵐が収まったとき、ペルラと『死』は若緑色に染まる山中にいました。

『時を夏まで巻き戻した。姫よ、見るが良い。長らくそなたが目にしたいと願い、目にするのが叶わなかったものが見られるぞ』

ペルラが立っていた山道を、一人の婦人がよろめきながら、上ってきました。

岩の階段を踏む靴には血が滲み、綺麗な髪と服は汗でぐっしょりと濡れていました。

だが、女の目にはダイヤモンドのように硬く、苦痛にも疲労にもひるまない決意が宿っていました。

一目で誰か分かりました。

赤子のころから、乳母の胸の中で、父の膝の上で、何度も聞かされた光景でした。

「お母さま……」

愛おしさで喜びで息が詰まりそうになった娘の前に、若き王妃は崩れ落ちるようにひれ伏しました。

「この山に住む聖者様とお見受けいたします」額を地面に押し付けて言いました。「なにとぞ、王のお世継ぎを授かる方法を教えてください！ もし、お子が生まれたときは、名付け親となってその子をお守りください！」

ペルラの隣に立つ『死』は、跪く王妃を無言で眺めたあとに口を開きました。

『王妃よ。生に関わることを妾に頼むことは、賢明とはいえぬ』その言葉の響きに、夏の日差しまでも凍りついたようでした。『だが、このように丁寧に頼まれたのは、始めてゆえ、問いに答えてつかわそう。しかし。汝は王の子を孕むであろう。しかし、その代償は、金銀では購えぬものであると知るがよい』

王妃は頭を上げて『死』の顔を正面から見つめ、何を目にしたの

か、悲鳴を上げて気を失いました。

ペルラは階段を駆け下り、倒れた母を助け起こそうとしました。しかし、今度も姫の手は母の身体を通り抜けるばかりでした。

ペルラは唇を噛んで涙を堪え、『死』のいる方向に向き直りました。

「金銀では購えぬ代償は、お母さまの命のことですか？」言葉の中に怒りが滲んでいました。

『その通り。姫よ、恨まれることを承知で言うが、妾はそなたの母を騙っていた。いや、全てを話さなかった。出産の代償は、若き王妃の命ばかりではない。ペルラ、そなたの命も含まれておったのだ』  
「私の……命？」

ペルラは胸元を掴み、震えました。

真夏の光景の中にいるというのに、冬の吹雪にさらされている心地でした。

「でも、私は生まれてきました。生まれ、育って、この通りまだ生きています！」

『そなたは母親と一緒に死ぬはずであった。王の初子は死産となる運命にあった。だが……』

『死』はお付の侍女らに開放されているペルラの母を見やりました。

瑠璃色の唇に、あの謎めいた微笑が浮かべながら、

『王妃は妾がそなたの名付け親となり、そなたの守護者となることを望んだ。『死』に我が子の誕生と加護を祈るとは！ この世界の始まりより、古くから存在しておる妾だが、このような願い事は聞いたことがない。勘違いの結果とはいえ、その無邪気さが愛らしゅう

うてな。その健気さがいじらしゅうてな。妾はそなたの母親の願いを聞き届けることにしたのだ』

『死』はペルラに背を向けると、ゆっくりと山道を登り始めました。

そのたおやかな右手を伸ばし、階段の隣りを並ぶ木々を順番に触れていきました。

姫は心配そうに母のほうを見てから、『死』の後を追って歩き出しました。

「では、貴女は運命を変えたのですね。死ぬはずだった私の運命を……」

『そうだ。だが、この世に生まれ出る命の量は定められておる。それは『死』を司る妾にも変えられぬ決まり。命を購うのは命のみ。死すべきものが生きるとき、誰かが死なねばならぬ』

『死』は足を止め、触れていた木に問いかけました。

『木よ、生まれる前に死なんとしている女の子がおる。その子のためにそなたの命をもらいたい』

木は枝を擦り合わせ、葉っぱを震わせて答えました。

「いやです、来年の春に咲かせる花が、来年の秋に実る種が私を待っています。おお、『死』よ。私は死にたくありません」

『ならば仕方があるまい。妾は『死』であるゆえ、無理に命を奪うことはできぬからな』

そこで『死』は再び歩き出しました。

黒い裾からのぞく白い素足が大地を踏むたびに、目の前の風景が

飛ぶように移り変わります。

一步ごとに『死』は足を止め、そこにいる鳥や獣や人間に同じことを話しかけました。

『生まれる前に死なんとしている女の子がある。その子のためにあなたの命をもらいたい』

鳥は答えました。「いやよ。これから産む卵が私を待っているわ」  
獣は答えました。「だめだ、俺には巣立っていない子供が一杯いるのだ」

人間の答えはもう少し複雑でした。

多くの人々が夢の中で『死』の問いに答えました。

神官は「神の祈りがある」からと言い、学者が「読む本が残っている」と言い、騎士たちは「名誉と誇りのために命を使いたい」と答えました。

そして最後に、誰も彼もが同じことを言ったのです。

「『死』よ、あたしは（俺は）（わしは）（某は）まだ死にたくありません！」

『死』は歩き続け、同じやり取りを繰り返しながら、ペルラに語り掛けました。

『見ての通り、骨の折れる仕事であった。だが、妾はついに求める相手を見つけたのだ』

早足に通り過ぎていた時間と風景が、急に足取りを緩めました。  
ときは晩秋、ところは紅葉に燃え立つ森の中。

風が吹き抜けるたびに、木々が真っ赤な吐息を空へ吹きかけてい

ます。

ペルラたちの前には、森を二つに分けて伸びる長い一本道がありました。

数歩先を、一人の年老いた男が杖をつきながら、歩いていました。

その老人の髪は処女雪のように白く、日焼けした顔はかすかに笑っていました。

若者のような快活で無謀な活力に満ちた笑顔ではありません。

長いときと果てしない経験によって磨かれた者だけが手に入れる、円やかな表情でした。

老人の後姿を見つめていると、ペルラの心に言いよのない懐かしさが込み上げました。

しかし、どこで老人を見たのかは、思い出せませんでした。

老いのせいか、あるいは怪我をしているのか。老人は片足を引かずっていました。

歩くスピードはゆっくりでしたが、その足取りは確かで自信に満ちていました。

老人の背中を追ううちに、ペルラたちは森の中にある大きな空き地にたどり着きました。

それは何とも不思議な空き地でした。

恐ろしく広い面積の更地が広がり、うっすらと草が生えています。木は一本もありません。

土は何度も掘り起こされたようですが、作物を植えるために耕したわけではないようです。

空き地に着くと、老人は歩くのをやめ、背中を振り返って言いま

「やあ、良く来たな。待っておったぞ」

一瞬、ペルラは老人が自分たちに向かって話しかけたのかと思いましたが。

しかし、それは間違いでした。

次の瞬間、突然、姫たちの頭上を巨大な影が覆い、雷より大きな声が空から降ってきました。

「魔法使い、魔法使い、今日も俺はやってきたぞ！」

紅葉を枝からふるい落とす大声に驚き、頭の上を見上げ……。

そしてペルラは生まれて初めて、本物の竜を見ました。

続いて起こったことは、姫が書物から学び取った言葉を全て使っても、とうてい言い表せません。

天は嵐と雲のなだれとなって地に注ぎ、大地は沸き立つ土と水の竜巻となって天に上り詰めました。

全てが混沌のように入りまじり、至るところで稲光と炎がひらめきました。

ペルラは小さな子供のように悲鳴を上げて、「死」の細い腰にしがみつきました。

天地をかき混ぜる恐ろしい戦いが、どれほど続いたことでしょうか。

いつの間にか、雷と炎の嵐はおさまり、耳鳴りのする静寂が辺りを包み込んでいました。

臉を開けたペルラの目の前には焼かれ、抉られ、凍りつき、穴だらけになった大地が広がっていました。



掘り返された空き地の只中に、あの老人、魔法使いが横たわっていました。

魔法使いは胸を押さえ、苦しげに息を止めていました。

竜は小さな犬のようにうるたえ、大きな身体でぐるぐると魔法使いの周りを歩いていました。

やがて魔法使いが息を吹き返しました。

竜は回るのをやめ、巨大な頭を倒れている老人に近づけようとしてきました。

一瞬、ペルラは竜が魔法使いを、一口で食べてしまうのではないかと心配しました。

しかし、竜は大きな口をあける代わりに、顔を傾け、耳を魔法使いのほうに向けたのです。

すると魔法使いは辛そうに頭を上げ、竜の耳元に小声で何事かをささやきかけました。

その様子を見る姫の目にはなぜか、蟻と象ほども違う二つの生き物が、親子のように映りました。

魔法使いは巨大な耳から口を離し、竜は憤然とした様子で顔を上げました。

そして拗ねた子供のように何か吐き捨て、鷲の何百倍もある翼を広げて飛び去ったのです。

太鼓のような騒がしい羽ばたきの後には、魔法使いとペルラたちだけが取り残されました。

竜の影が消えた後、『死』は倒れている魔法使いに近寄りました。魔法使いは、寄る年波で少し濁ったその目を黒衣の婦人の方に向けました。

「おおそこにおわすのは『死』か。なんと黒くまぶしく輝いておられることよ」

『魔法使いよ。頼みがある。生まれる前に死なんとしている女の子がある。その子のために、そなたの命をもらいたい』優しい声で、『死』が問いました。

「どうぞ、ご随意に」魔法使いはあっさりと答えました。「今日、私は一生の仕事を終えて、もう思い残すことはありません。好きなようにこの命を使ってください。ただ一つ、お聞きしたいのですが……」

『何なりと申してみよ』

「私の時間はどれくらい残っておりますか？」

『余り長くはない。一年ほどか。が、なるべく長続きするように手配はする』

「そうですね」魔法使いは溜め息をつきました。「もう少し長い時間を、その子に渡してあげたかったが、この期に及んで嘆いても仕方がない。ただ願わくば、私の短い命が、その子にとって幸多いものとならんことを……」

『その願いは聞き届けた。叶えられるかどうかはわからぬが』

魔法使いは瞼を閉じ、胸の上で祈るように指を組み合わせました。

『死』は袖の中に隠していた手を、名高いあの骨の左手を老人の胸の中に差しこみました。

魔法使いは一瞬、電気が走ったように体を震わせ、それから静かに息を引き取りました。

『死』が魔法使いの胸から左手を引き抜いたとき、その指の間には光が灯っていました。

蠟燭のように小さく細く、しかし凜と立った白い炎でした。

その火を見たとき、ペルラは思わず胸を押さえました。

掌の下に同じ炎が燃えていることを感じ取ったのです。

『死』は右手で愛おしげにその火を撫でながら、姫に話しかけました。

『これがそなたの命、そなたの長き苦しみの源だ。妾は一年ほど残っていたいなかった魔法使いの命を、何倍にも引き延ばしてそなたに与えた。ゆえにそなたは半死半生の身となり、ゆえにそなたは常に生死の境をさまようこととなった。姫よ、我らを恨むか。そなたの母と妾、魔法使いを恨むか。憎いと言うのなら仕方がない。そなたにはその資格がある』

ペルラは眼を閉じて横たわる魔法使いを見ました。  
彼女にとつては二人目の父親とも言うべき男を見ました。

胸の奥深く、心臓よりも深いところから、激しい疼きが湧きあがりました。

それは姫が生まれてから今に至るまで味わってきた、苦渋を全て呑み込んであまりある、途方もない感情でした。

「恨むなどと……」首を振って言いました。「お母さまは私を生むため、掛け替えのない代償を払いました。この人は、死の間際に私に幸多くあれと祈りました。嬉しいと思ひ、有り難いと思うことこそあれ、恨むなどとてもできません」  
『おお、ペルラよ。まさしくそなたは魔法使いの娘』

『死』は微笑んで、手に持った白い火を姫を差し出しました。  
ペルラは腕を伸ばして、優しく燃える魔法使いの命に触れました。  
触った瞬間、白い火は消えました。

しかし、姫は何かが皮膚を伝わり、血管の中を走って自分の中に流れ込むのを感じました。

ただの命ではなく、ただの記憶でもない、もっと深く大きな何かを……。

『さあ、劇の終わりは近い。間もなく最後の幕が始まる。竜の翼に乗り、それを見届けるとしよう』

『死』が骨の指を鳴らすと、時間がまた駆け足で走り始めました。森の道から、素朴な顔をした村人たちが現れ、魔法使いの遺体を見つけました。

蟻のようにせわしない動きで、人々は嘆き悲しみ、老人の遺体を埋葬しました。

太陽と月は目に見える速さで空を駆け、ひと月余りの時間が一瞬のうちに過ぎました。

地平線に小さな点が現れたかと思うと、竜となって地面に降り立ちました。

竜は魔法使いを探しまわり、代わりに魔法使いの墓を見つけました。

小さな墓石を見つけた途端、竜はその場から走って逃げだしました。

ペルラは自分の視点が空を飛び、竜の背に乗るのを感じました。姫は竜と共に走り、竜と同じものを見、竜の不安と焦りを分かち合いました。

魔法使いを求めて、竜は人里をさまよいました。

しかし捜し人は見つかりません。

魔法使いを求めて、竜は大地を掘り返し、地獄の悪魔と戦いました。

しかし捜し人は見つかりません。

魔法使いを求めて、竜は天に登り、星界の天使たちと渡り合いました。

しかし捜し人は見つかりません。

ついに竜は悲しみに胸を引き裂かれ、失意のうちに大地に落ちて行きました。

そのとき、一緒に墜落していたペルラは、竜のお腹の一部が剥がれ落ちるのを見ました。

それは地獄で竜の体にこびり付き、天界の星の塵を吸った、地獄の溶岩の塊でした。

その中にオレンジ色に脈打つ光を宿した岩はくるくると回りながら空を飛んでいました。

ふいに、岩の塊にひびが入り、さらに小さなかけらが剥がれました。

ペルラの頭の中で、記憶を司る部分が、稲光を上げて叫びました。

(十七年前、私の生まれた年、あの年に天を走った二筋の流れ星！  
大きな星と小さな……)

姫の眼は竜の背を離れ、小さな流れ星のあとを追い掛けました。  
大気のやすりが小さな星を、少しずつ少しずつ削っていきます。  
丸く丸く川底を転がり落ちる石のように、円やかに円やかに鳥の卵のように。

そして小さな流れ星が、分厚い雲の層を突き破った瞬間、ペルラは我知らず叫びました。

全てが、ここまで見てきた長い長い物語の全てが、一つにつながったのです。

眼下にあったのは、あのノコギリ刃のような鋭い峰々の連なり。  
その刃の中でも、ひと際大きな磁石の塊に、流れ星は引き寄せられました。

山肌にぶつかり、斜面を転がり落ち、大きく口を開けた亀裂の中に吸い込まれて、流れ星は山の奥へ奥へ入っていきます。泥の中に落ち、ついに白い湯気を上げて止まりました。

その流れ星は、ただの流れ星ではありませんでした。

魔界の溶岩の中に天の星をまぶし、竜の炎と雷を浴びて、混沌な命を宿していました。

大きな可能性を秘めながら、小さすぎて、巨大な双子の兄弟のように孵ることが出来なかった、竜の卵でした！

小さな卵から、わずか数歩離れた闇の中で何かが動きました。

それは親に捨てられて豹に拾われ、再び親を失ったあの男の子でした。

死にしかけた体のどこにそんな力が残っていたのか、幼子が起き上がり、卵に近づきました。

或いは、竜の卵が男の子に力を与えたのかもしれませんが。

見捨てられ、寂しく消えようとしている命が、お互いを引き寄せたのです。

男の子は卵を手に取りました。

空気の乱暴な手に擦られた熱が、まだ幾らか残っていました。

だが、血の気のない指は何も感じませんでした。

虚ろな穴となった体の中で、微かに残った心の線が震え、か細い感情を紡ぎました。

（卵、美味しい、食べ物、温かい、寂しい、寒い、お腹が空いた、お腹が空いた、お腹が）

男の子は捧げるように卵を持ち、一口で飲みこみました。

竜の血を一口飲んだ王妃の祖先は、異形の姿と魔法の力を手に入

れました。

ならば、竜の卵を丸ごと口にしたもの？

小さな熱の塊が喉を滑り降り、お腹の中に落ちて行きました。しばらくは何も置きませんでした。不思議な静けさが続き……。そして、幼子の体の中で、山をも揺るがす爆発が起きました。

男の子は口を開けて、叫びました。

遠い昔に枯れたはずの音が、次から次へと飛び出して来ました。とても子供の声とは思えない、千の雷が咆えたか、火山が爆発したような絶叫。

それでも、体の中で荒れ狂う力の奔流を一万分の一も吐き出すことは出来ませんでした。

耐え難いほどの渴きに襲われ、幼子は地下の泉に口をつけ水を飲み始めました。

間もなく小さな泉は飲みつくされましたが、渴きはちっとも治まりません。

抑えきれない渴きと力に鞭打たれて、男の子は洞窟の入り口目指して走りだしました。

走りながら、その体は、溶けた鉄のようにどんどん形を変えて行きました。

大地の裂け目を突き破って外に飛び出したとき、幼子は既に十倍近く膨れ上がっていました。

その体は天井知らずに、なおも大きくなり続けました。

巨大化した体は力を持て余し、それを吐きだす場所を求めています。

男の子は、男の子であった生き物は、岩山の肌に指を食い込ませ

ると登り始めました。

登るうちにも、体は変身をやめませんでした。

頭には雄牛の角が、尻には蛇の尾が、背中にはねじ曲がった憧れのようにいびつな翼。

蒼白い肌を分厚い毛皮が覆いました。

幼子の焼け焦げた心のように、黒い黒い毛皮が……。

岩山に住む獣たちは、異常な恐怖に襲われ、巣穴の中に逃げ戻りました。

今や、食べられることに怯えるのは幼子ではなく、肉食獣たちの方でした。

だが、一匹だけ恐怖に負けず、かえって怒りを燃やした獣がいました。

渓谷の王である星の獅子でした。

獅子は月の光の下に、色褪せた体を晒すと、威嚇の雄叫びを上げました。

幼子であった黒い獣は、その鳴き声を聞いて、吐き気を催すような憎しみを憶えました。

かすかに残った豹の子供の記憶が、復讐を求めたのです。

岩山の頂近くで、白い神獣と黒い魔獣はぶつかり合いました。

肉が肉を打つ音が、山の端から端まで伝わり、幾つかの斜面で岩崩れを起こしました。

二匹の獣は絡み合ったまま、噛みつきあい、引っ掻きあいながら、山肌を転がり落ちました。

同じよう鋼鉄の体を持ち、同じように無類の怪力を誇る獣同士、互角の戦いは長引きました。

しかし谷の底に辿り着いたとき、ついに勝負に幕が下りました。



黒い獣が、白い獅子の首を掴み、母の教え通り、一息のその骨を砕いたのです。

獅子の体が力を失っても、黒い獣の怒りは収まりませんでした。腕を口の中に突っ込むと、胸元まで引き裂き、まだ少しだけ脈打っていた心臓を抉り出したのです。

黒い獣は激しい餓えに促されるままに、獅子の心臓にかぶり付きました。

だが、どうしたことでしょう。

いくら獅子の肉を食べても、底なしの餓えは一向に満たされる様子がありません。

そのとき、音楽が聞こえてきました。

懐かしくも、胸の奥を騒がせる響き、頭の奥を疼かせ、痛みにも似た感情を呼び起こす音。

奇しくも、その日は男の子が神に捧げられてから、ちょうど一年後の生贄の日でした。

山の頂上に登った怪物の目に音楽と共に、松明の列が近づいてくるのが見えました。

黒い獣の中に、男の子だったころの記憶は、もうほとんどありませんでした。

しかし、消えずに残っているものもありました。

死の淵を覗き込んでいたころ、男の子の心の大部分を占めていた、二つの大きな穴。

食べ物に対する餓えと人肌に対する餓えが。

暗黒を充たした二つの大穴は、変身を経て、黒い獣の中で奇妙に混ぜ合わされました。

かつて自分を祭壇まで運んだ村人たちの姿を見ると、獣の目から血のような涙が、牙の間から鮮血混じりの涎がこぼれました。口を開き、背をそらせ、怪物は哀しげに上天から見下ろす月の顔に、咆哮を浴びせました。

悲しみ、憎しみ、恨み、妬み、苦しみに餓え、孤独に憧憬。

そのほか言葉に出来ぬ百以上の感情を込めて呪詛の声。

自分を見捨てた世界の、温かく優しい世界への、長い長い復讐の始まりを告げる合図でした。

『涙は乾いたようだな』

ペルラは目の前で起きている惨劇を見つめていました。

生まればかりの怪物が起こした始めての、そして最も哀しい殺戮。自分を生んだ母を、父を、兄弟たちを泣きながら引き裂き、食らうのを見ました。

『死』の言葉通り、その目はもう涙に濡れていませんでした。

『見たいものは見えたか？ 知りたいことを知ったか？』

「はい、見るべきものを見、知るべきことを知り、そして今、自分に成すべきことがわかりました」

胸の奥に静かに、しかし激しく燃えるものがありました。

あの魔法使いから譲り受けた光、小さくとも、決して消えることのない白い火でした。

溢れ出る意志の力に肌を泡立つのを感じながら、ペルラは言いましました。

「死よ。言葉を取り消します。私はいま死ぬわけにはいきません」  
『では、早く戻るとよい。そなたの体に残された時間は短い。急がねば間に合わなくなるぞ』

人の肌に包まれた右手が、そつと背中を押すのを感じました。視界が急転し、闇に包まれたかと思うと、全てが墜落し、同時に果てしなく登りつめ……

牢獄の中で、ペルラは意識を取り戻しました。体を起こそうとすると、自分で吐いた血のかけらが、ぱらぱらとこぼれ落ちました。

(きっと、今の私は酷い姿をしているだろうな……)

だが、外見のことは気になりませんでした。それより問題なのは、体を動かすたび、焼けた釘をねじ込まれるような痛みが走ることです。

乾いた血から時間を計りました。

王妃は自分をここに閉じ込めた夕暮から、半日ほど経っているようです。

急いで塔に戻り、調合した薬を飲まなくては、次の夕日を拝むことは出来ないでしょう。

普通の人間が、燃える鉄の山を上り下りするほどの努力を払って起き上がりました。

始めてペルラは、半死半生であった今までの人生に感謝しました。病気に鍛えられてきたからこそ、人間には耐えきれない激痛にも

耐えることが出来ました。

さらに何倍もの努力をして、牢獄の扉に辿り着きました。

問題はこれからです。

姫が読んだ書物の中には、錠前に関する本もたくさんありました。髪飾りのピン一つあれば、どんな鍵でも開ける自信があります。

だが、鉛の手袋を何枚も重ね着したようなこの指が、果たして思い通りに動くかどうか。

ところが、思いがけず、難問はあっさり解決しました。

姫の手に触れた錠前があっさり、崩れ落ちました。

まるで何万年経たかのように、鍵として『死んでいた』のです。

「優しい名付け親よ。贈り物に感謝いたします。あと少しの間、お守りください」

『死』に短い祈りを捧げ、牢屋の闇の中に足を踏み入れました。

ふいに、闇の中で何かが動きました。

ペルラは緊張し、錠前破りに使おうとしたピンを剣のように構えました。

人間にしては小さすぎる影でした。

大きなネズミでしょうか？

それとも、王妃の使い魔がまだ残っていたのでしょうか？

うつすらと石の隙間からこぼれ出る明かりの中に何かが近寄ってきました。

四本でも、三本でもなく、短い二本の足をよちよちと動かしながら現れたのは、

「おや、こいつぁ驚いた！　まだ、この城に残っておるもの好きが、おったとはのうー！」

チビでデブで年寄りの小人だったので。

最終話』　満ちてゆく月のよつに……』　へ続く

第十三話 『名付け親の贈りもの』 (後書き)

帰りが遅いせいで、更新がいつも真夜中を過ぎるのはどうにかしたいですね。

とまれ、次のお話が、『かいぶつのかた』の最終話。泣いても笑ってもあと一息です。

第十四話 『満ちてゆく月のよつた……』 (完結) (前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/sst  
/sst.php?act=dump&amp;cate=ori  
ginal&amp;all=21573&amp;n=0&am  
p:count=1
```

第十四話 『満ちてゆく月のように……』 (完結)

長いこと、姫君と小人は、一言も話さずに、お互いを見詰め合っていました。

ペルラは、礼儀正しい彼女にしては珍しいことに、挨拶も忘れてじっと小人を観察しました。

博識な姫君も、こんなに小さな人間を見たのは、初めてだったのです。

蛇のようにだらだらと尾を引く沈黙を破ったのは、年寄りの小人のほうでした。

「何があつたんじゃ！ おまえさん、服が血だらけじゃないか」

「あ、これは……」

壁から漏れる薄明かりの下、ペルラは改めて、自分がどれほど多くの血を失ったか、気づきました。

この一滴一滴は姫の命、白い服についた赤い染みは、彼女の時間でした。

もうこの体に残された時間は多くない、無駄遣いする余裕はありませんでした。

ペルラは顔を引き締めて、小人に聞きました。

「おじいさん、貴方はさつき、この城にはもう私たち以外、誰もいないといいましたね。私はずっと牢屋にいたので、何も知らないのです。外で起きたことを教えてください」

「それはかまわんがな……」 小人はちらりと横を見ました。「その前に椅子にでも座つたらどうだい？ 娘さん、あんた倒れそうなのを通り越して、今にも死にそうじゃぞ」



小人に言われるまま、姫らは看守たちが使っていた椅子を出して、腰を下ろしました。

「ふう、この年になると立ち話は応えるわい」小人はでっぷりしたお尻で、椅子のすわり心地を試しながら言いました。

「外で何が起きたか聞いたね。では、こっちも聞こう。あの怪物は知っておるか？ おお、もちろんこの国で、知らぬ者などおらん。あまたの王国を食い尽くして、この地に流れ着き、姫君に飼いならされたあのでっかい化け物さ。その怪物が昨晚、王宮の中から逃げ出したのじゃ。」

しかも　ところで娘さん、あんた雪合戦をしたことは？　ない？　ああ、そうだろうと思ったださ。とにかく、雪で埋まっている坂から、小さな雪球が転がり落ちたと想像してごらん。あの化け物は、その雪だまみたいにどんどん大きくなったのじゃ。それから、泣き叫びつつ、地平線の方に逃げていった。

昨日の晩、地の果てから山も崩しそうな凄まじい雄叫びが聞こえてきたのじゃ。『ペルラ姫、良くも裏切ったな』、とその声は言うておった。それから『八つ裂き』だの、『丸かじり』とか、若い娘さには話しづらい言葉もたっぷりとな。

仲たがいした姫が、怪物を殺そうとしたと言う者もある。いや、王妃が姫に化けて、怪物に毒を盛ったのだと言う者もある。真相は闇の中じゃ。だが、あの化け物が近いうちに戻ってくるのは確か。そのとき、姫と怪物の間に立ちたいと思う者は、誰もいなかったんじやろうな。みんな逃げてしまったよ」

「アンブラは、この国の女王は、どうしましたか？」ペルラは聞きました。

「あの有名なちびっ子女王さまなら、馬車に乗って、とっくに消えちゃったよ。しかし、あれが女王さまを乗せる馬車かね。わしの目には、まるで象を閉じ込める檻のように見えたぞ」

ペルラはほつと胸を撫で下ろしました。  
少なくとも、これで心配事が一つ減ったことは、わかりました。  
姫はもじやもじやの眉に隠された、小人の目をじつと見据えて言  
いました。

「……それで、お爺さん。貴方は誰もいなくなった城に、火事場泥  
棒をしに来たわけですね」  
「泥棒？ このわしが？ とんでもない！」

小人は視線を明後日の方に向け、手でポケット隠そうとしました。  
だが、指の隙間から、きらめくコインや小物の光までは隠せませ  
んでした。

ペルラはくすくす笑いました。こんなに心から笑ったのは、何時  
以来でしょう。

微笑み方を、忘れたような気すらしていたのに……。

「隠さなくてもいいのですよ。ところで、金貨や宝石のピンだけで  
満足していますか？ 私はお城の宝物庫に用があります。手を貸し  
てください。そうしたら、好きなものを持って帰っていいですよ」

「宝物庫のお宝を、このわしが？」

「ええ、貴方の小さな手で持てる範囲ならなんでも」

「そりゃありがたい！ しかし気になることが一つがあるぞ」

「なんですか？」

「その手の中に、足を一本入れてもいいかの？」

ペルラはまた笑い声を上げました。

こうしてペルラは小人の手を借りて、牢獄を抜け出しました。

宮殿の地下から宝物庫まで、普通の人なら二十分とかからない程度の距離でしたが、弱っていたペルラにとっては長く、くたびれる旅になりました。

階段を三段昇るたびに一休みし、日の光を避けながら、半日かけてようやく宝物庫の扉に辿り着きました。

彼女たちにとってありがたいことに、宝物庫の扉はすでに開けられていました。

よほど急いで運び出したのでしょう。中身はまだ半分近く残っていました。

自分の背丈より高く積み上げられた宝の数々を前にして、小人は狂喜しました。

小躍りしながら、目につくものを手当たり次第、ポケットの中に入れて行きます。

ペルラは小人のあとに続いて、宝物庫の中に入りました。

燦然と光を放つ宝の間をゆっくりと歩きながら、たった一つのものを探していました。

やがて、姫の目が部屋の一角に吸い寄せられました。

そこにあったのは、人の手で運び去るには些か大きすぎる鉄の箱でした。

ペルラは机ほどもある大きな鉄の箱の前に立ち、髪飾りのピンを使って鍵を開けました。

鉄の箱の中には、滑らかな檜の箱があり、木の箱の中には乳色の

象牙の箱がありました。

そして、象牙の箱の中にあっただのは、ビロウドのように艶やかな黒豹の毛皮の包み。

その包みを解いて、最後に露わになったのは、白銀の一角獣と黄金の不死鳥。

それは父が作らせ、母の形見である七粒の真珠をボタンに使った姫の花嫁衣装でした。

ペルラは継母の王妃が奪い取った、そのドレスを胸に抱きました。父母の愛が幻の温もりとなって伝わり、枯れたと思っていた涙が、頬を流れました。

「なるほど……それじゃ、お前さんがあのペルラ姫だったというわけじゃね」

「はい、その通りです」姫は振り返って、小人に答えました。「ありがとうございます、お爺さん。これでもう、思い残すことはありません。さあ、私の近くにいたら、危ないですよ。気にいった宝物を持って、早くこのお城からお逃げなさい」

「言われんでも、すぐに逃げるわい……」

小人は毛深い眉を上げて、きらきら光る黒い目で姫を見上げました。

「じゃが、その前に一つ聞いておきたい。お前さん、ほんとに思い残すことはないのかい？」

「……と言いますと？」

小人は短い足でよちよちとペルラに近づきました。

山と積まれていた宝箱の一つによじ登り、姫と視線を合わせてから言いました。

「実はこの城に来る前に、街で石のように歳をとって、石よりも頭の固い医者 of 爺さんに会ってな……。その爺さんは、隣人の忠告にも耳を貸さずに、人気のない街の中で、お前さんを探しておったぞ。わしはその爺さんに言伝を頼まれたのじゃ。『姫よ、まだ生きておられるなら、私のところへ来ておくれ。薬の心配はいらない。蓄えはたくさんある。何があっても、私は姫を待っている』とな。味方になってくれる者がおると言うのは、ええものじゃな」

姫は小人の様子が変わったことに気付きました。

具体的にどこが変わったのか、はっきりと言うことは出来ません。ベールに隠されていたものが、針ほどの隙間から、その素顔を覗かせたのです。

だが、嵐雲が近づいた時のように、小人の声を聞くたびに、幾千もの細かい雷が皮膚の下を這いました。

ペルラは気付きました。

怪物にも、『死』にも怯まなかった自分が、この小さな老人に畏怖していることに。

「さて、姫よ、どうする？ わしは、あの怪物の手の届かない遠い土地に行く方法を知っておるぞ。そこで、残りの人生を穏やかに過ごしてみたいとは思わんかね？ お前さんがただ一言、『望む』と言えば、あの老いばれ医者 of ところに連れて行ってやるうじやないか」

言葉や理性の及ばない、深い魂の領域で、姫は小人の言葉を信じました。

どんな願いであれ、この小人は叶えてくれるだろうと確信しました。

閉じた瞼の裏に浮かぶのは、今までの短い人生の中で、特に短かった幸福な時間。

老医師の家にいた時は、愛し愛され、生涯で最も充実した日々を過ごすことができました。

魔女姫も、人食いの怪物も知らない人々の間で行けば、またあの優しい世界を取り戻せるかもしれない。

「しかし」と姫は考えました。

あんなにも幸せな時間を送ることが、誰のおかげだったのか。

毎夜毎夜、不器用に手折られた花と一緒に、新しい喜びを与えてくれたのは……。

最後に脳裏に浮かんだのは、窓辺で月の光を浴びながら、おぼろに輝く一輪の薔薇でした。

「いいえ」と姫は答えました。「どうか、あのお医者さまにお伝えください。今宵、この身に何が起ころうとも、それは私自身が望んだこと。そして、私の願いはただひとつ、あの怪物のもとに参ることです、と……」

「ならば、お前さんの願いは、このわしが叶えるまでもない」

小人は悲しげに笑いながら、首を横に振りしました。

「ペルラよ、王の娘よ、魔法使いの子よ。今日、陽が沈むのを待たずして、お前さんの夢は現実となるじゃろう」

気がつけば、ペルラは北の塔にある自分の部屋に戻っていました。満遍なく地上を照らす太陽をどうやって避けたのか。

三階まで続く、螺旋階段をどうやって登ったのか。

記憶は一昨日の夢のようにあやふやで、掴もうとするたびに手をすり抜けてしまいます。

ただ、ぼんやりと小さく柔らかな手に、導かれたことだけは覚えていました。

ペルラは自分の部屋を見渡しました。

たった一日、留守にしていただけなのに、まるで何十年も経っているような気がしました。

姫の寝室もそのぐらい時間が流れていたように、さま変わりしていました。

特に目につくのは、床から壁、天井の一部まで走る無数の爪痕でした。

部屋の中で、椅子より大きなものは、すべて壊されていました。

丹精をこめて、育てていた薬草は石畳の上で干からびていました。大切にしていた書物は、床にばら撒かれ、ページが一枚残らず引き裂かれていました。

ぐるりと頭をめぐるしていたペルラは、最後に壁の染み付いた血の跡に目を留めました。

王妃の形をしたその血痕は、誰かに抱きとめて欲しいと、言わんばかりに腕を広げていました。

最後の最後まで、姫は継母を憎いと思うことは、出来ませんでした。

苛立ちを覚えたことはありません。怒りを感じたこともあります。

しかし結局、泥沼で孤独に足掻いていた義母への憐れみが、全てに勝りました。

ペルラは地下牢から持ってきた、傷だらけのルビーを血痕の足元に供えました。

頭を下げ、体に残っていた最後の涙を、赤い石の上に落とししました。

姫にとって運の良いことに、砕けた甕の中に、綺麗な水が見つかりました。

ペルラは半分の水で命をつなぐ薬を飲み下し、残った半分の水で血に汚れた体を清めました。

そして、父母の形見である花嫁衣裳を身にまといました。

袖を通した途端、絹と金の糸は、両親の愛のようにペルラの体を抱きしめました。

これでお迎えの準備は整いました。

姫は破れて中身の飛び出たクッションを積んで、その上に腰を下ろしました。

死んだ鳥のように折り重なった本の中から一冊を取り出し、ページを開きました。

それはペルラが乳母の膝の上で、初めて読んでもらった絵本でした。

物語はひとりの少年は山の恐ろしい獣を殺し、七人の英雄を倒し、王になるまでを描いていました。

お話の終わりに、少年王は塔に閉じ込められた姫を救い出し、二人は当然のように結ばれます。

だが、幸福な結末が待っているはずのページは、怪物の爪でズタに切り裂かれていました。



ペルラは紙の上を走る黒い亀裂に、指を走らせました。そこから、文字ではなく、怪物の心を読み取ったのです。

東の端から、夜がスミレ色の波となって押し寄せてきました。闇の潮は塔の根元を洗い、最上階にいる姫のつま先まで押し寄せました。

ペルラは本を置いて立ち上がりました。砕かれた窓の前で、夕暮れに臨みました。

死に掛けた太陽から、刃のような一筋の光が部屋の中に差し込みました。

弱々しいその明かりには、姫の皮膚を焼くほどの力はありませんでした。

その代わりに、紅い光はペルラの花嫁衣裳を火のように燃え上がらせ、七つの真珠を血の粒に変えて見せました。

そして、西の彼方、マグマのように煮えたぎる地平線から、黒く巨大な影が近づいていました。

影は動くたびに形を変え、その様子はさながら暗黒の火柱が、大地から立ち上っているかのごとし。

それは、まるで地獄の釜が、大口を開けたような光景でした。

しかし、ペルラは動じる様子もなく……。

初めて会ったその夜のように、蠟燭の明かりに火をともしました。初めて会ったその夜のように、手をさしのべ、変わり果てた怪物に言ったのです。

「どうぞ、明かりの中へ。このままでは、お顔がよく見えません」

姫の言葉に答えるように、怪物の体から生えた無数の獣頭が雄叫びを上げました。

山のような巨体が、畑や丘を跨ぎながら、目に見える速さでどんどん近づいてきました。

そして怪物が城下町に一步、足を踏み込んだ途端、左の肩に生えていた羊の頭がぼろりと抜け落ちました。

その次は右の肩に生えた獅子の頭、その次は背中の鷲のくちばし、その次は……。

一つまた一つ、街を歩いて、宮殿に近づくとともに、体の一部がこぼれ落ちていきます。

小人は雪だまの例えを使って、ペルラに怪物が膨れ上がっていく様を説明しました。

今、大きくなった怪物の体はまさに、朝日を浴びた雪人形のように溶け、崩れ始めたのです。

かなりの労力を払って、宮殿の城壁を乗り越えた時には、怪物の体は元通りの大きさに戻っていました。

しかし、なおも怪物は、姫の塔を目指して、進み続けました。

塔の根元に着くと、石壁に爪を食い込ませて、上へ上へと昇り始めました。

少しずつ少しずつ、塔を昇るたびに、怪物の体はさらに縮み、衰えていきます。

ついにペルラのいる部屋のベランダにたどり着いたとき、もう歩く力も残されていませんでした。

山の洞窟の中にいたあの子供のように、足を引きずりながら、両手の力で、床の上を這い回りました。

「……ペルラ、どこにいる？」

視力も失われたのか、黄金の瞳も白く濁っていました。  
それでも、砂漠の中で水を求める人のように、怪物は手探りで姫を探し続けました。

「ペルラ……いないのか？」

怪物の声には、残酷な希望が潰えたことに安堵している者の響きがありました。

そこまでが、ペルラの限界でした。

姫は蠟燭の影から進み出て、怪物の手に指を伸ばしました。

「貴方、ペルラなら、ここにおりますよ」

過去への旅の中、姫は闇の中で死に掛けていた子供に、同じように手をさしのべたことがあります。

あの時、何の抵抗もなくすり抜けた指が、今ははっきりと怪物の体を掴み取ることが出来ました。

一瞬、怪物の顔はこの上ない幸福に満たされ、つづいて恐るべき恐怖に引き裂かれました。

悲鳴を上げ、畏にかかった獣のように、その場から逃げようとしてました。

だが、柳のように繊細な姫の手は、鉄の鎖よりもしっかりと怪物の体をつなぎ止めて、離しませんでした。

「どうして逃げなかった！」

怪物は大声で泣き叫びました。

「なぜ、逃げてくれなかったんだ！ 俺はお前に逃げて欲しくて、あんなに叫んだのに！ 遠くに行って欲しくて、お前を八つ裂きにしてやるとまで言ったのに！」

「どうして」と姫は聞きました。「私に逃げて欲しかったの」

怪物はすすり泣き、床を拳で殴って、爪を引つ掻きました。

母の腕の中でむずがる幼子のように、ペルラの手の中でもがきました。

だが、最後には逃げ場がないとわかったのでしよう。

暴れるのを病めて、ぼつりぼつりと、胸の奥にたまった言葉を漏らし始めたのです。

「……以前、俺が話した黒い炎の話覚えてるか？」

「憶えているわ、貴方の話したことは、一言残らず」

「ペルラ、お前と会うようになってから……俺は次第に、憎いとも、苦しいとも思わなくなった。食べた連中の声が聞こえなくなる代わりに、腸を焼く火の熱さも感じなくなった。俺はあの黒い炎が消えたと思った。自分は変わったんだと……でも、それは間違いだった！」

ちらりと濁った視線を、王妃の血痕が張り付いている壁のほうに向けました。

牙の間から絞り出す声には、心臓を齧る激しい憎悪が、燃え盛っていました。

「あの女に毒を盛られて……やっとわかった。俺の黒い炎は消えていなかった。薄皮一枚の下に隠されて、ずっと燃え続けていた。毒の苦しみが気が遠くなったとき、それが皮を焼き尽くして、外に噴き出した！ その時、俺が何を考えていたと思う！」

怪物は手で覆って、自分の顔をペルラの目から隠そうとしました。あまりに力を込めたために、爪が肉を抉り、血が涙のように指の間からこぼれ落ちました。

「俺はお前を食べたいと思った！ この世の誰よりも、お前が食いたくて仕方なかったんだ！ 王妃をかばったあの日、お前の手から流れ落ちる血を見たときから、いやもつと前から。何とか自分を騙してきたが、もう限界だ。毛一筋だって、お前を傷つけたくないのに……このまま一緒にいたら、俺はお前を殺してしまう！」

ペルラはそつと顔を覆っていた怪物の手を掴み、どかしました。

傷と血にまみれた面は、途方もない苦痛にゆがみ、本物の涙に濡れていました。

姫は黒い毛皮に覆われた肩に頭を預け、怪物の耳元に囁きかけました。

「貴方が心のうちを打ち明けてくれたように、私も貴方に話したいことがあるの。聞いて、貴方が旅をしている間、私も旅をしていた。そして、その旅の中で、全てを知ったのよ」

そして、ペルラは『死』から見せてもらった光景を、余さず怪物に伝えました。

怪物は姫の言葉に耳を傾け、全て聞き終わった時に、引きつった笑い声を上げました。

「……お前の名付け親も酷なことをする。これで全て納得がいったが、なんの救いにもならない」

「いいえ、今お話したことの中に、貴方を苦しみから救う鍵が隠されているわ」

ペルラは顔を起こし、怪物と向き合いました。傷つきやつれたその顔を優しく撫でながら、母が我が子に子守歌を唄うように、語って聞かせました。

つまるところ、怪物が呑み込んだ竜の卵の力とは、このようなものでした。

夢の結晶である星を含んでいたゆえに、隠された願望を呼び起こすことが出来ました。

罪がとけた溶岩に包まれていたゆえに、歪んだ欲望を現実に変える力があつたのです。

心の中に食べ物と人肌に餓えていた幼子は、卵の力で人を食らう怪物になりました。

生きた人間を食べて、血肉で胃袋の上を満たし、魂で心に開いた穴を塞ごうとしたのです。

世界が自分を愛してくれないのなら、せめて憎しみで孤独を紛らわせようと思いました。

でも、それは餓えを満たすために水を飲み、渴きを癒すために雪を食べるようなもの。

腹の中で自分を呪う相手のおかげで、確かに一時は寂しさが紛れます。

だが、内臓に響く恨み言が消えた後の孤独は、いつそう耐えがたくなるのです。

飲めば飲むほどに餓え、食べれば食べるほど虚しさとの飢餓はつるばかり。

これが黒い炎、消すことも出来ずに、怪物の中で降り積もった憎悪の正体。

「私の妹、アンブラは生まれつき、嘘を見抜く力を持っていた。そ

のせいで、一つの嘘も許せず、周りの人々を傷つけ、自分も酷く傷ついた。あの子に必要だったのは、百万のお世辞よりもたった一言の真実だった。貴方も同じよ。何万人もの犠牲者は必要なかった。貴方の餓えを満たすのに、必要だったのは一人。怪物のために進んで命を捧げる人間が、たった一人いればよかったの」

姫の言葉を理解するにつれ、恐怖が怪物の体の隅々まで染み込みました。

と同時に、どうしようもなく熱い感情が、腹の底から込み上げてきました。

「なぜ、そんなに死に急ぐ。お前は生に倦んだのか、それとも死を望んでいるのか？」

「いいえ」ペルラは笑って首を横に振りました。「私は今、生まれて初めて、自分の命を愛しいと思っている。もっと早く貴方に会いたかった。もっとたくさん、貴方と話したかった。もっと……生きてたかった。でも、良いの。今、死を前にして私の白い炎は、かつてなく明るく燃えている。だからこそ、貴方の中の黒い炎と釣り合う。だからこそ、貴方を癒す薬になることができる」

ペルラは手を放しましたが、怪物はもう逃げませんでした。

姫は何も言いませんでした。黒い獣も何も言いませんでした。

言葉で何かを伝える時期は、もう終わっていたのです。

鼓動は胸から溢れ出て、水面の波紋のように混じり合い、時は窓から漏れる光と一緒に凍りつきました。

今世界にあるのは姫と怪物、それから司祭のように二人を見守る純白の月だけでした。

と、姫が近づいてくる怪物の顔を押しとどめました。

「あの……」と言うペルラの耳元まで真っ赤です。

「どうした？」

「私、あまり美味しくないけど」怪物の胸に顔をうずめて囁きました。「我慢して食べてくださいね」

「そんなことはないさ」

口づけのように姫の顔を舐めて言いました。

「ほら、お前はとても美味しいよ」

見渡す限りの小麦畑を、銀色に輝く一筋の道が貫いています。

かつて怪物の背に乗った姫が、ほつき星のように駆け抜けたその道を、背の高い影が歩いていました。

その姿は二本足で歩いていながら、どこか獣めいたところがあり、蠢惑的でありながら、単純に美しいと言いたいものがありました。強いて例えるなら、その生き物はどこか草原の王である獅子に似ていました。

生き物の体は光の加減によって、黒にも金にも見える不思議な毛皮に覆われていました。

大股で歩きたび、黒い毛皮の草原の下で、鉄のような骨や水のように滑らかに動く筋肉が見えます。

どこまでも異形でありながら、骨格は人間のそれであり、歩みは王者そのものでした。

ペルラ姫の白い火は、怪物の体に会った黒い炎を洗い流し、彼を



本来なるべき存在に戻したのです。

月の光が、鬘のような長い黒髪を、銀の冠で飾りました。

と、不意に怪物が足を止めました。

あぜ道に生えた花が、猫のようにそのふくらはぎに擦り寄りました

「どうした、ペルラ、なぜ黙っているんだ」胸元を抑えて、怪物は聞きました。

『私が何時まで、一緒にいられるのだろう、と思って……』怪物の胸から、声が返ってきました。

「その答えなら決まっている。最後までだよ。俺は少しでも命と心を持ったものを食べないことにした」

『そんな……それでは貴方が死んでしまう』

「食べなくなつて、死んでしまふさ。この姿になって初めて気がついたのだ。あの谷で自分に呪いをかけた時、憎しみが俺の命となった。憎しみがある限り、怪物は不死だった。剣で傷を広げることとは出来ても、痛みを消すことは出来ないからな。だが、お前は俺の傷を癒してくれた、俺の痛みを鎮めてくれた。賢いお前なら、もう分かっているだろ」

怪物は盃のように満ちた月を見上げていました。

こぼれ落ちた光に酔いしれたように笑っていました。

「ペルラよ、お前は俺を愛してくれた。姫よ、ゆえにお前は怪物を殺したのだ」

麦畑を渡る風のように、静寂が二人を包み込みました。

姫も怪物も、しばらくの間、その静けさを味わっていました。

やがて、怪物は胸元をさすりながら、その奥で控える姫にささやきかけました。

「なあ、月は毎日見るたびに形を変えるよな。あの月はいつたい幾つあるのだろう」

『全部で四種類あると言われてるわ』微笑みを含んだ声で、姫が言いました。『でも、本当の月は一つだけよ』

「いやいや、お前は矛盾しているぞ」怪物もどこか楽しそうな声で答えました。「もし、月が一つしかないのなら……」

問いと答えを繰り返しながら、二人の声は地の果てへ消えて行きました。

恋人の指のように絡み合い、或いは月のように満ち足りながら……。

F i n

第十四話 『満ちてゆく月のように……』 (完結) (後書き)

この話は愛の物語です。溢れんばかりの愛が入っております。

前の王妃の夫に対する愛。

若い王の王妃に対する愛。

新しい妃の王に対する愛。

アンブラのペルラへの愛。

乳母の娘と孫に対する愛。

そして、怪物と姫様の愛。

たった一つを残して、他の愛は全体的を外しました。

マザーテレサは、愛の反対は無関心だと言っていました。

ならば、憎しみの反対とは？

これはそう言うお話です。

ちなみに、りゆうくと違って、かいぶつくにはちょっとしたトリックが隠されています。

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、ペルラと怪物の微妙な感情を表現するために、この二人の間で『愛や恋』と言った言葉を使いませんでした。

だから、最後の最後まで怪物も姫も、相手のことを『好き』とか『愛している』とか言わなかったのです。

この手法が効果的だったかどうかは……読者の皆さんのご判断を仰ぐしかないですね(汗)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/st/
sst.php?act=dump&app:cate=origi
nal&app:all=21573&app:n=0&app:
count=1
```

さて、大きな大きな海の上に、広い広い大陸が浮かんでいました。この大陸の上に、また広くて大きな国がありました。

国の東側には鉄や銅や銀の出る鉱山があり、西側は魚がたくさん泳いでいる海岸に接していました。

そして東と西の真ん中には、麦や米、お芋やトウモロコシの畑が広がり、まるまるに太った家畜たちがそこら中を歩いています。

こんな豊かな国の王さまにはきつと、悩み事など何もないと思われるでしょうね。

でも、この大きな国を治める女王さまと旦那さまには、大きな頭痛の種があったのです。

女王さまご夫婦の頭を悩ませているのは、一粒種のお姫さまのことでした。

もしかして、大切なお姫さまが病弱だったのでしょうか？  
いえいえ、違います。

女王さまの一人娘は、とっても元気な女の子でした。

正直なところ、元気すぎて、ちよつと手に余るぐらいだったので  
す。

では、元気なお姫様が、あまり可愛くなかったのでしょうか？  
いえいえ、違います。

女王さまの愛娘は、お人形さんのように愛らしい女の子でした。

お姫さまの皮膚はまるで焼きたてのマシユマロみたい。

白くて柔らかくて、お姫さまを見た人は誰でもその頬にキスした

くなりました。

髪の毛と大きな目は、降ったばかりの雪の色で、見る角度を変えるたびに、七色に光を放ちます。

その綺麗な瞳を見たお父さまは、虹を閉じ込めた白い宝石にちなんで、お姫さまに『オパール』と名づけました。

こんな風にオパールは、王さまや女王さまなら、誰でも欲しがって完璧なお姫さまでした。

ならば、お姫さまの何が、お母さまやお父さまを悩ませていたのでしょうか。

実は完璧なお姫さまには一つだけ、普通の人間と大きく違うところがありました。

元気で可愛いオパールは、とてもとても、とっつっても小さかったのです！

オパールが生まれたその日、お城は喝さいを叫ぶ声に満たされました。

しかし、間もなく喜びの声は、驚きと戸惑いを示すどよめきに変ったのです。

待望のお世継ぎは、ちょうど大人の男の人の掌に収まるぐらい。生まれたばかりの子猫ほどの大きさしかありません。

落ち込んで泣く女王さまを、お父さまは慰めて言いました。

「何、気にすることは無いさ。僕たちは生まれてきたとき、みんな小さかったんだ。この子だって、いつか僕たちと同じくらい大きくなるよ」

しかし、ご両親の期待とは裏腹に、オパールはちっとも育ちませんでした。

生まれてから七年たつても、お姫さまは七ヶ月の子猫ほどの大きさしかなかったのです。

こんなに小さな子供を育てるのは、たとえ女王さまにとつても、大変なことでした。

何しろ、小さなオパーレと来たら、何かをするたびに、必ず大事件を起こしたのですから。

最初の事件は、生まればかりのお姫さまのお披露目パーティーで起こりました。

この宴会の席で、オパーレはいきなりカラスに攫われかけたのです。

怒ったオパーレが、大事な羽根を三本も抜いたので、カラスは驚いてお姫さまを取り落とししました。

お父さまがとつさにマントを広げて受け止めてくれたおかげで、オパーレは地面に頭をぶつけずにすみました。

ご両親がほつと息をついたのも束の間、一年もたたないうちに次の大事件が起きました。

ハイハイができるようになったオパーレが、さつそく揺りかごから脱走したのです。

たちまちお城は大騒ぎ、みんなが血眼になって小さなお姫さまを捜しました。

洗濯籠の中ですやすや寝ているオパーレを見つけるまで、城中の人間が、お姫さまを踏み潰さないように、半日も床を這い回るはめになりました。

愛娘の将来を心配した女王さまは、オパーレをおしとやかで大人しい女の子に育てようと思いました。

ところが、オパーレが小さいのは体だけでした。

小さなお姫さまの体の中には、百人の大男の勇気とガッツが詰ま

っていたのです。

オパーレは高いところを見れば登り、狭いところをあれば潜り込もうとしました。

坂道などあるうものなら、泥んこになるまでそり遊びをするような元気のよさ過ぎる子供でした。

何とか、女の子らしくなって欲しいと思った女王さまは、娘に習い事をやらせてみることにしました。

そこで呼ばれて来たのが、やせ細った編み物の先生でした。

しかし、オパーレは先生を糸でぐるぐる巻きに縛ると、部屋中に編み糸を垂らしました。

そして、お猿みたいに糸にぶら下がって、あーあー叫びながら、あっちこっちに飛び回ったのです。

それならばと、女王さまはよく太ったお菓子作りの先生を呼んできました。

これは最初、上手く行っているように見えました。

オパーレは途中まで大人しくクッキーを作っていたのですが、途中で芸術の神さまが降りてきたのか、お菓子そっちのけでおかしな小麦粉人形を作り始めたのです。

何時までもクッキー焼きが始まらないので、太った先生はお姫さまに聞きました。

「恐れながら、姫さまは何を作ってらっしゃるんですか？」

「ベツポとポットとトツピイよ」鼻の頭に白い小麦粉をくっつけてオパーレが言いました。「三人はとても悪くてざんこくな海賊なの。お腹の中はチヨコレートみたいにまっくるよ。ベツポは大きな鼻をして、どきどき鼻くそを食べるの。ポットは一年間に一回しか靴下を変えなくて、そのせいで足がすくくさいのよ」



「はあ……」と、背中に鳥肌が立つのを感じながら、先生は尋ねました。「見たところ、トッピーさんの頭は、まだ出来あがってないみたいですね」

「いいえ、トッピーの頭はないの。恐ろしい人食い族にちよん切られちゃったのよ」と悲しそうな声で言った後に「ねえ、トッピーの頭をぐつぐつ煮る人食い族を作りたいんだけど、小麦粉もつとないかしら？」

お姫さまの豊か過ぎる想像力は、冒険家だったお父さまから受け継いだものでした。

女王さまは何とか娘の頭の中に、お砂糖やスパイスや可愛いものを詰め込もうとしました。

しかし、そのたびにお父さまが、お姫さまの頭の中を盗賊や砂漠や血に餓えた猛獣でいっぱいにして、女王さまの努力を全部無駄にってしまったのです。

女王さまは、お父さまに馬鹿なお話は止めるように、何度も何度も言いました。

お父さまも今度こそ止めると、何度も何度も女王さまに約束しました。

しかし、可愛い娘にせがまれると、ついつい自分が昔した冒険の話をしてしまうのです。

ある日、とうとう堪忍袋の緒が切れた女王さまは、お父さまを黒い犬に変えてしまいました。

そうです。実は、女王さまはとても力の強い、世界一の魔女だったのです。

オパールはふさふさした犬の毛皮が大好きでしたが、お父さまのお話が聞けないのが、寂しくてたまりませんでした。

お父さまが犬になって以来、女王さまはオパーレをお城の塔に閉じ込め、外に出さなくなりまして。

これを見たお姫さまの教育係である爺やが、女王さまに文句を言いました。

お城勤めを始める前、ならず者やら船乗りやらお医者さんやら、山ほど経験を積んだ爺やは、魔女も女王も怖がりませんでした。

「小さな子供を動物のように閉じ込めるとは、のちのちどんな悪い影響があるかわかりませんぞ！」

「お黙り！ にゃーにゃーうるさく鳴きおつて、お前など猫にでもなるがいい！」

こうして、はげ頭の爺やは、背中に大きなハゲのある年寄りの猫になってしまいました。

お城で一番肝っ玉の太い旦那さまと爺やが、文句の言えない体になってしまうと、もう誰も女王さまに逆らうことが出来なくなりまして。

みんな、台風が来たときのように頭を下げ、厄介ことが通り過ぎるのを待つことにしました。

と言うのも、怒った女王さまが誰かを動物に変えてしまうのは、珍しいことではなかったのです。

そして、いつも女王さまの頭が冷えた後、みんな人間に戻してもらうことが出来ました。

ところが……。

緑色の夏が去り、茜色の秋が来て、とうとう冬が真っ白な服を着て王国の中に足を踏み入れても、女王さまのご機嫌は良くなるどころか、ますます酷くなる一方でした。

女王さまはとうとう、お姫さまが逃げ出せないように、塔を鉄よりも硬い魔法のイバラで覆い隠してしまいました。

そしてオパーレが食べる料理や着る服も、ぜんぶ自分の手で作り、誰も娘に会えないようにしてしまつたのです。

「なあ、今回の女王さまのご病気はずいぶんと長続きするな？」あの召使が不安げに言いました。

「もう、そろそろ一年になるか。前に女王さまがお冠になつたときは、どうしたものだつたか」別の召使が、困つたような声で聞きました。

「旦那さまに頼んで、お怒りをなだめてもらつた」

「で、旦那さまが、ものの言えない動物になつたときは？」

「あの頑固な爺やさまに、おいさめしてもらつた」

「なるほど、でも、確か、今は爺やさまも……」

ちらつと召使たちが、目を向けたその先では、黒犬が猫じやらしを使つて、年寄り猫と遊んでいました。

不機嫌な猫は前足も使わず、しっぽでやる気のなさそうに、猫じやらしをぺちぺち叩いていました。

旦那さまと爺やも可哀相でしたが、それ以上に哀れだつたのはオパーレでした。

誰も味方のいないお姫さまは、女王さまがやってくるたびに、同じ質問を繰り返しました。

「ねえねえ、母さま、わたし外に出たいよ」

「だめよ」と女王さまは同じ返事を繰り返します。「お外の世界はとても怖いよ。お前みたいな小さな子が、外に出たら竜に食べられてしまうわ。怖い怪物がやってきてお前をさらってしまうよ」

「わたし、竜も怪物も怖くないわ。外に出たら、みんな、やつつけてやるんだから！」

「馬鹿なことを言わないで。お前みたいに小さな子が、そんなことできるわけないでしょ」

食べきれないほどのご馳走や山のような可愛いドレスに取り囲まれていましたが、お姫さまは幸せではありませんでした。

塔には本も置いてありましたが、これが全部愛らしい動物や女の子の絵本ばかりで、ページをめくっただけで読む気がなくなり、オパーレが読みたかったのは、悪い魔法使いや崖っぷちの脱出、火あぶりとか命がけの決闘とか、とにかく血沸き肉躍るようなお話でした。

このままではいけません。

きつと、その内、退屈に息が詰まってしまいます。

オパーレは檻に閉じ込められたライオンみたいに、部屋の中をぐるぐる歩き回りました。

そして、何百周か何千周目かに、こう考えるようになりました。

「もう頭に来た！ お母さまの気が変わるのを待つぐらいなら、こんな塔、自分で出て行ってやる！ でも、ここを出た後に備えて、まずは冒険のトレーニングよ！」

一度決心したときの、オパーレの行動の速さたるや、カミナリさま顔負けです。

お姫さまは読む気のない絵本を積み上げて、険しい山を作り上げました。

また広いベッドを海に見立てて、枕の船で航海に乗り出すこともありました。

そして、恐ろしいぬいぐるみの妖怪や海賊を相手に、激しい戦いの特訓を繰り返したのです。

こうして、血の滲むようなトレーニングを始めてから、さらに数ヶ月が過ぎました。

ある晩、オパーレが槍のようなフォークとベッドに使えそうなお皿で、お夕飯を食べていた時のことです。

塔の壁の中から、石を擦り合わせたような、甲高い変な音が聞こえてきました。

「何かしら？ ま、まさかネズミ！」

竜も怪物も怖がらないお姫さまでしたが、ネズミだけは大の苦手でした。

オパーレは銀のフォークを掴むと、お布団の中にもぐりこみ、じつと壁のほうを見つめました。

お姫さまの目の前で、大きな石の塊が動き、白い壁に四角い真っ黒な穴が開きました。

闇の中から、まず最初に見えたのは赤い帽子。

それからもじゃもじゃの眉毛に長いお髭、でっぴりしたお腹を締めるピカピカのベルト……。

塔の壁の穴から現れたのは、チビでデブな年寄りの小人でした。小人は黒い星のようにキラキラした目で、部屋の中を見回しました。

そして、布団とベッドの隙間から覗く、七色に光る目を見つけたのです。

「おや、わしと同じくらいちっちゃな女の子がおるぞ」小人が言いました。

「あら、わたしと同じくらいちっちゃなお爺さんがいるわ」お姫さまが言いました。

次の瞬間、オパーレはライオンのように勇ましい雄叫びをあげて小人に襲い掛かりました。

「がおおー！！！」

今こそ、醜いトロール（クマさん）や恐ろしい山賊<sup>ウサギさん</sup>、死の湖の海賊たち（ワニさんとカメさんとカエルさんと……）を相手に鍛え上げた格闘の技を見せるときです！

お姫さまは小人を噛み付いて引つ掻いて押し倒して、その長くて白い髭でぐるぐる巻きにしてしまいました。

「お、お助け！ わしには二十を頭に四十人の女房が……」  
「おだまり！」

オパーレは小人のお腹をぶにと踏みつけて、命乞いの声を悲鳴に変えました。

「おまえは泥棒ね！ わたしのお部屋に忍び込むなんて、いい度胸しているじゃない。このまま、お母さまにつきだしてやるわ。そして、お前なんか石と小バエにかえられちゃうんだから！」

「ま、魔女の女王をお母さまと呼ぶとは……さてはお前さん、あの有名な小さなオパーレ姫じゃな？」

「おまえ、わたしが誰かも知らずにやってきたの？」 小人をフォークでつつん突つつきながら言いました。

「いてて、やめてくれ！ この部屋がお姫さまのものに見えなくてな。これじゃ、まるで動物園の檻じゃ。なあ、お前さん、この檻から出たいと思っただことはないかな？」

小人は唯一動かせる目で、お姫さまに慈悲を訴えかけました。

オパーレは必死なその視線を、ふんつと鼻で笑い飛ばしました。壁にあいた大きな穴をフォークで指して言いました。

「別におまえの手助けなんかなくても、今なら、ひとりで抜け出せるわ」

「たとえば、ネズミがおつてもか？」小人が意地悪そうな声で言いました。

「ネズミ！ それって大きいのか？」お姫さまは震え上がりました。「うううんと大きな奴じゃ。しかも、このわしの二倍は太っておる。わしなら、そのネズミを近づけない方法を知っておるんじやがお……」

この踏み心地のよいお腹をした小人より二倍も太ったネズミとは！確かにこれは由々しき事態です。

お姫さまは、真つ暗な穴の中で、ネズミと二人つきりになるところを想像しました。

「冗談ではありません！」

この小人の力を借りるより他に道はないようです。

「わかった……おまえを連れていくから、ちょっとそこで待ってなさい！」

その場に小人を残して、「ごそごそベッドの下にもぐりこみました。しかし、三つも数えないうちに、またちよこつと顔を出して、

「ちゃんと待っているのよ。逃げたら、しょうちしないんだから！」逃げやせん。逃げやせんから、わしが年を取ってくたばる前に戻ってくれ」

さて、ベッドの下にもぐりこんだオパーレは、背負い袋を取って戻ってきました。

中にはお父さまが七歳の誕生日に、こっそり送った探検家の七つ道具が入っていました。

お姫さまは袋の紐を解いて、中身を確認しました。

望遠鏡……よし！  
ロープ……よし！  
火打石……よし！  
たいまつ……よし！  
たいまつ……よし！  
山登り用のピッケルもよし！  
袋の中には、オパーレの手にぴったりな小さくてよく切れるナイフまでありました。  
中身を確認し終わって、袋の紐を閉じようとしたとき、手を止めました。

「なんてことなの！ 冒険の旅に出かけるのに、お弁当を忘れるところだったわ！」

オパーレは、小さな女の子用に作られた梯子を使って、テーブルの上に登りました。

そして、お夕飯の皿から、デザートチョコクッキー（お姫さまの頭ぐらいあります）を取って戻ってきました。

クッキーを背負い袋の中に突っ込んで、今度こそ準備ばたん！  
もう忘れものはありません。

「さあ、出発よ！」

「……で、どこへ出発するんじゃない？」

と思っただら、一つ抜けていました。

お父さまも言っていたではありませんか。

『一番大事なのは、行き先と道順と地図。出かけて帰って、ドアを敷居をまたぐまでが冒険』だって。

しかし、どこへ行ったら、良いのなら。



たんに行ってみたい場所なら、砂漠に、無人島に、古代の遺跡に、山に谷に川に海に……とキリがありません。

むむむっと口をへの字にして悩みましたが、ちょっと考えれば答えはすぐに出ました。

そう、他ならぬオパーレ自身が、お母さまが言ったじゃありませんか。

「竜と怪物のところに行くてくるわ!」

「なんと、おちびの姫さん、お前さん、正気か!」小人は驚きに目を丸くしました。

「本気も本気よ。竜と怪物のところに行って、あいつらをやっつけて、お母さまを見返してやるんだから!」

かくして、小人を連れとお姫さまの小さな小さな、大冒険が始まったのです。

第二話『お姫さま、竜をやっつけるのまき』に続く

と言っわけで……（どっいっわけなのやら）

Dragon tail 第三部にして、三部作最後のお話が始まりました。

前はちよつと切ないお話だったので、今度は明るくて楽しい話にするつもりです。

というわけで、これまで読んで下さった皆さまも、今回始めて読んで下さった方も、最後までよろしくお願いいたします。

第二話 『お姫さま、竜をやっつけるのまき』(前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/s  
t/sst.php?act=dump&app:cate=or  
iginal&app:all=21573&app:n=0&a  
pp:count=1
```

## 第二話 『お姫さま、竜をやっつけるのまき』

片手に松明を、もう片手に小人の髭を握りながら、オパーレは壁の穴に入っていきました。

穴の中は、黒い蜜みたいに濃く、どろりとした闇で満たされています。

手に持った小さな明かりは、夜の海に浮かんだオレンジ色の泡のよう。

目に見えるのは、足元の石畳みと壁の上に残った蜘蛛の巣の切れはしだけです。

それなのに、太った小人はまるで、目が見えているかのように、すいすいと歩いていきます。

小人のあとを追い掛けながら、オパーレはこの秘密の抜け穴の道順を覚えようとしました。

しかし、これは上手くいきませんでした。

というのもこの抜け穴、普通では考えられないような造りになっていたからです。

まず塔の最上階にいたはずなのに、お姫さま達はいきなり、穴の中の坂道を上に向かってかけのぼったのです。

右に曲がって左に折れ、らせんの階段をぐるぐる下りたかと思えば、動物の腸のように入り組んだ迷路の中をじくじくに進みました。

そして、足元の石畳みが岩に変わったとき、今まで見たことも聞いたこともないような光景が、オパーレの目の前に広がりました。

そこは巨大な水晶で出来た洞窟でした。

六角形の透明な柱が、ヤマアラシの針のようにそこから突き出しています。

水晶の柱は、松明の柔らかい明かりを吸いこんで噛みくだき、何百もの光の破片に変えて、お姫さま達の頭の上に吹きつけました。

その美しさに見とれているうちに、水晶の洞窟は通り過ぎ、オパール達は鉱山の中にいました。

松明に照らされて輝くのは、母なる大地の腕でまどろみ続ける無垢な鉱石たち。

岩に挟まれて、光る黄金色の筋に沿って、小人とお姫さまは歩いて行きました。

遠い昔に滅びた動物たちの墓場の中を進んだこともありました。

長い長い年月が、獣たちから肉を洗い去り、骨を石に変えていました。

空っぽなガイコツたちの目が、今は忘れ去られた世界の歌をお姫さま達に唄いかけます。

それでも小人は足を止めることなく、あばら骨で出来た回廊を前に進み続けます。

ついに水晶も鉱石も化石もなくなり、音も光も気配もない闇が何千歩も続きました。

ふとオパールは、足元の石がじんわりと暖かくなってきたことに気付きました。

遠くから、嵐のようなごろごろとした音が聞こえてきます。

「さあ、ついたぞ、小さなお姫さま」小人が足を止めました。

「ついたって、どこに？」オパールは聞きました。

「お前さんがずっと来たがっていたところ、不死身の竜の寝床じゃ」

手で触れて見ると、岩が怯えているように震えているのが、分かりました。

突然、オパーレは悟りました。雷のように大きいけど、これはいびきの音です。

この壁の向こうに、地震と台風と火山の爆発を合わせたような、途方もない力の塊が眠っているのです。

「こころの準備はいいかな？ 引き返すなら、今のうちじゃぞ」

「ここまで来て、引き返すなんてできないわ。早く、竜のいるところへ連れて行ってよ！」

小人は洞窟の壁の一部に手をかけると、それを引き戸のように開きました。

すると岩の隙間から、淡く赤い光と熱が、先を争うように飛び出して来ました。

お姫さまは首を突っ込んで、中を覗きました。  
すぐに頭をひっこめました。

「大きいわ！」

「そりゃ、竜はでかいもんじゃからのう」

「こんなに大きいなんて聞いてないわ！」

「そりゃ、竜をはつきり見た奴は、ほとんど食われちゃったからのう」

オパーレはもう一度、竜の巣の中を覗いて見ました。

できればさっきの見間違いで、竜がちよっと縮んでいないかな、と希望を抱きながら。

竜は獣のように体を丸め、鳥のように羽根で体を覆いながら、眠っていました。

赤い鱗はたき火のように壁を照らし、鼻の穴から寝息と一緒に火柱が噴き出しています。

竜の体は小さな山程もあり、どう見ても、縮んだ様子はありません。

それどころか、前よりも大きくなったような気がします。

さて、困りました。

オパーレはちよつと無謀なお姫さまですが、決してお馬鹿な女の子ではありません。

あんな馬鹿でかいケダモノと戦って勝ち目がないことぐらい、すぐにわかりました。

お姫さまは背負い袋をひっくり返し、その中身を確認しながら、うんうん唸りました。

そして、鋭い光を放つナイフを手にとって、小人に聞きました。

「ねえ、あの竜のお腹の中に入って、これで突っついてやるというのはどうかしら？」

「なかなか良いアイディアじゃのう。じゃがやるときは、わし抜きで頼むぞ」

オパーレはナイフを放り出して、また唸り始めました。

もしかしたら、竜のお腹に潜りこんで、ちくちく攻めると言うのは、あまり良いアイディアじゃないのかもしれないかもれません。

なにしろ、あの竜の口ときたら、小さな女の子どころか、牛の背中に乗った大人の男が、頭の上にわとりを乗せながら楽に出入りできるぐらい大きいのです。

きつと今まで、同じようなことを思いついた騎士や勇者がいっぱいいたはずです。

そして竜が気持ちよく寝ているところを見ると、その人達はみ

んな、うんちになっちゃったのでしょ。

と、そのとき、雷に打たれたような勢いでお姫さまが立ちあがりました！

びっくりして跳び上がる小人をしり目に、地面に広げていた物をどンドン背負い袋に詰め込んで行きます。

「ひょっとして家に帰る気になったのかのう？」おそろおそろ小人が聞きました。

「帰る？ あの塔の上に？ 冗談じゃないわ！ あの竜だって生き物よ。どんな生き物だって弱点の一つくらいあるはずだわ」

「じゃが、お前さん、その弱点を知っておるのか？」疑い深そうに言いました。

「もちろん、知らないわよ。だから、あの竜に聞きに行くのよ」

荷物をしよい直しながら、オパーレは小人につこりと微笑みかけました。

それはお城にいたころ、ひとめ見ただけで、猫は逃げ出し犬はお腹を見せ、召使いたちは取り乱してお坊さまは神に祈り、婆やは気を失ってお父さまは倒れた婆やの頭に素早くクッションを当てながら、さて今度はお城の修理にどのくらいお金がかかるやらと計算を始めるような、そんな笑顔でした。

ぞつとして逃げ出そうとした小人を捕まえて、オパーレは言いました。

「怖がらないでよ、あたしに良い考えがあるわ」



いやがる小人を説き伏せて、お姫さまは眠りこける竜の方に向かって歩き出しました。

最初は抜き足差し足で忍び寄りましたが、すぐにこれは無駄だとわかりました。

と言うのも、近づくにつれて、竜のいびきは大きくなり、最後には太鼓やシンバルで武装した楽隊が全力で演奏しても聞こえないほど凄まじくなったからです。

オパーレは大股でずんずん前に進み、あつと言う間に竜の鼻先に辿り着きました。

さあ、ここから先は苦労して持って来た登山道具の出番です。

お姫さま達は鼻から吹き出す火の玉を避けながら、竜の鼻すじの坂を歩きました。

でこぼこの鱗に指をかけ、ほっぺの斜面を這いあがりました。

そして、ぴったり閉じた瞼の段差に座って一休み。

目から耳まで続くこめかみの崖を登れば、そこはもう目的地、洞窟のように大きくて深い……竜の耳の穴です。

「暗くて狭くて、なんておつとろしいところじゃ！」黒々と大きな口を開ける穴を見て、小人は体を震わせました。

「そう？　ここって暗くて狭くて、さいこーじゃない？」しかし、お姫さまは逆に喜び勇んで耳の中に入っていきました。

竜の耳の中は暖かく湿っていて、まるで本物の鍾乳洞のように黒い毛が色んなところに生えていました。

その毛むくじやらの道は長く続きましたが、最後には大きな行き止まりに突き当たりました。

「はっ、鼓膜じゃ！ わしの思った通りじゃ。竜の脳みそをそのナイフでちくちくやるうという作戦のようじゃが、これ以上先には行けんぞ。さあ、あきらめて家に戻る時間じゃ」

「何言っているの。あたしの作戦はまだ始まったばかりよ」

オパールは背負い袋から取り出した頑丈な登山用のロープを取り出しました。

片方を特に太くしっかりとした耳毛に巻きつけました。

そして、もう片方を自分と小人の体に巻きつけました。

「やめてくれ、わしの中身が出ちゃう！」小人が悲鳴を上げました。  
「駄目よ、ここでちゃんと縛りつけないとあとが大変よ！」お姫さまは、かまわずぎゅうぎゅう締めあげます。

「なあ、おちびの姫さま、そろそろ何をするつもりなのか教えてくれんかのう？」ぽつりしたお腹に食い込んだ縄を見て、悲しげな声で小人が言いました。

「あたしがこれから何をするつもりかって？ そりゃもちろん……」

お姫さまは耳の穴の行き止まり、ピンク色の壁のような竜の鼓膜の前に立ちました。

「……こうするのよ」

そして、小さな足を大きく振りかぶって、

「起きろおおお！！」

鼓膜を思いつき蹴っ飛ばしました！！

さて、小さな生き物たちが自分の体の上を歩いたり登ったり潜りこんだりしている間、不死身の竜はすばらしい夢を見ていました。

その夢の中で、竜は体の半分が牛でもう半分が豚、魚の尻尾を生やして鳥の手羽先をつけた生き物を追い掛けていました。

文字通り夢のように美味しそうなその生き物は、お花畑の中を走りながら、『さあ、わたしを食べてごらん』と竜に笑いかけます。

竜は滝のような涎を垂らしながら、その『トリブタウシザカナ』を捕まえました。

だけど、まさに御馳走を口に運ぶとうしたそのとき。

いきなり空から凄まじい勢いで隕石が落ちてきて、竜の頭にぶつかったのです！

しかも、その隕石は竜の耳元で叫びました。

『起きろおお！！』

あわてて跳び起きました。

そして冷水を浴びた猫みたいに、背中を逆立てながら、辺りを見渡しました。

しかし誰もいません。

「なんだ、夢か……」

ほっと息をついたのもつかの間。

またしても、夢の中で聞いたあの隕石の音が竜の耳の中で響き渡

りました。

『いや、わたしは夢ではないぞ』

「誰だお前！ せつかくのいい夢を邪魔しやがって、出てきやがれ！」

竜は大きな目をさらに大きく見開いて、洞窟の中を捜しました。火のように燃える眼は、どんな小さな岩の影も見逃しませんでした。

しかし見つかりません。声はどこからともなく聞こえてきます。

『いくら探しても見つからないぞ。わたしはお前の頭の中にいるのだ！』

「俺の頭ん中だと……」

はっとして竜は両手で耳をふさぎました。

果たして、声の言った通り、耳の奥から邪悪な笑い声が聞こえてくるではありませんか！

『わたしは地獄からやってきた小鬼だ。さあ、竜よ、お前の弱点をわたしに教えるのだ。でないと酷い目に会わせてやるぞ！』

「小鬼だか何だか知らないが、俺におどしは効かないぜ」竜はふんと鼻から火と煙を吹き出して「俺は不死身の竜だ。酷い目に会わせるだつて？ 俺にぎゃあ、と悲鳴を上げさせることができれば、褒めてやってもいいぜ」

『ほほう、そうか……』竜の頭の中で、声がにやつと笑いました。『それでは竜よ。外に出てみる。そこで水たまりか池を覗くんのだ。面白いものが見れるぞ』

変な声の言った通り、竜は洞窟の外に出ました。

水草の浮いた池を見つけ、その鏡のような水面を覗き込みました。すると自分の耳の穴から小さな白い手が突き出ているのが、見えただけではありませんか。

その手は何か黒い塊を掴んでいました。爪を伸ばして捕まえようとしたが、白い手は黒い塊と一緒に素早く引っ込みました。

そして頭の中から聞こえる、とびつきり、おどろおどろしい響き、『今お前が見たのは地獄の馬ふんだ。良いか、わたしの言う通りにしないと……』

『お前のうみそに、このうんちをぶつけるぞ！』

ぎゃああああああっと竜は悲鳴を上げました。

何と言つ恐ろしい脅しなのでしょう！

これに較べれば、騎士や勇者たちが使う、首を切るとか、心臓を抉るとか、ありきたりな脅しなど物の数にも入りません。

竜は頭を揺すって叩いて、なんとか小鬼を頭から追い出そうとしました。

そのたびに耳の奥で、何かがぶつかる音と一緒に『ぎゃあ』とか『ぐえ』と言ったような呻き声は聞こえて来ました。

しかし、小鬼本人はまるで『頭の中に縛り付けられている』みたいに、どうやっても叩きだすことが出来ません。

やけくそになった竜は鼻をつまんで、叫びました。

「おい、馬鹿なことは止める。その馬ふんを置いて、すぐに出てくるんだ。さもないと鼻をつまんだまま、火を噴くぞ！ そしたら、耳から火が飛び出して、お前なんか真っ黒焦げだ！」  
『やってみる！』ところが、頭の中の小鬼はちつともひるみません。『そしたら、地獄の馬ふんも焼けて、お前の脳みそににおいが染み付くぞ！ お前は永遠に地獄の臭いをかき続けるんだ！』

ああ、これぞ悪鬼のおこない、邪悪のきわみと言うものです。  
今度こそ、竜は自分の耳の奥にいる声の主が、地獄の出身であることを確信しました。

さて、竜が頭を抱えて七転八倒していたとき、一人の運の悪い騎士がやってきました。

光り輝く鎧を身につけたこの騎士は、竜の姿を見るなり、槍を構え、声高に名乗りを上げました。

「やあやあ、遠くの者は音に聞き、近くの者は目にも見よ！ 我こそは世に名高き岩の騎士、サー・ロツクンロールなり、国々を乱す悪しき竜よ、いまこそお前の首を切つて、心臓を……」  
「いやつかましい、俺は今死ぬほど忙しんだ！」

名乗りを最後まで聞きもせず、竜は尻尾でぱしーんと騎士を跳ね飛ばしました。

哀れな岩の騎士は石ころのように山の斜面を転がり落ちたのです。馬はどこかに逃げ失せて、ピカピカだった鎧はボロボロに。  
おまけに兜がへこんで頭から抜けなくなりました。

押したり引いたり、叩いたり、騎士どのはなんとか兜を脱ごうと必死になりました。

しかし、泣いて喚いても、兜はがっちり大事な頭をくわえこんで、

ビクともしません。

このまま、拙者は餓えて死ぬのだろうか、こんな情けない姿のままで！

騎士どのが絶望の淵に沈もうとしていたそのとき……。

清水のように柔らかな声が、鉄板の隙間から耳の中に滑りこみました。

「もし、騎士どのが、難渋しているご様子だが、手をお貸しましょうか？」

岩の騎士に声をかけたのは、魔法使いでした。

この魔法使いは毎朝、平和な王国を襲う竜と戦い、人々の平和を守ってきました。

ところが今日にかぎって、いつもすぐに飛んでくる竜が、いくら待ってもやってきません。

様子を見にやって来て魔法使いは、兜を脱ごうと苦心惨憺しているサー・ロッキロールを見つけたというわけなのです。

騎士どのは兜の隙間から、聞くも哀れな声で助けを求めました。

それを聞いた魔法使いはうなずき、ベコベコになった兜に手を触れ、金属の声で話しかけました。

「兜よ。深く地の底で生を受け、熱と金床を良心に持つ、鋼鉄よ。

そこな騎士どのが頭を放してやってくれぬか。このままでは騎士どのが気の毒だし、お前も腹を壊すぞ」

すると今まで何をしても、がんとして動かなかった兜があっさり騎士どのが頭を吐きだしました。

サー・ロッキロールは汗まみれの頭を撫でて、魔法使いに礼を言いました。

「いやあ、酷い目に会ったよ。一生このままかと思った」騎士どのは溜息をつきました。

『まったく』と手の中の兜が魔法使いに話しかけました。『あんなからも、この男に言ってくれよ。せめて一週間に一回ぐらい、髪を洗ってくれって』

岩の騎士と別れた後、魔法使いは竜の姿を求めて山を登り続けました。

そして池のほとりで、頭を抱えて泣いている竜を見つけました。

「どうしたのだ、竜よ。何を泣いておるのだ」穏かな優しい声で聞きました。

「助けてくれ、魔法使い！」竜は犬のように顔を魔法使いの体にこすりつけました。「地獄からやってきた悪い鬼が、頭の中に入ったんだ！ そいつが俺の弱点を教えろっておどすんだよ。さもないと脳みそに地獄の馬ふんをぶつけるんだと！ おまけに『トゲトゲガミガミムシ』を頭の中に放して、一生眠れないようにしてやるって……俺の弱点なんて、俺だって知らないのに」

「ふむ、なるほど、地獄の鬼とな」

魔法使いは竜の耳の穴のあたりを見上げました。

うつすらと虹色に光る白い頭と長いひげがぴゅっと引っ込むのが見えました。

「それから、『トゲトゲガミガミムシ』ねえ……」

何とか笑いださないようにするのが一苦労でした。

口元を押さえながら、魔法使いは竜の耳から覗くキラキラした眼に話しかけました。



「あー……その地獄の鬼どの？ 今聞いての通り、この竜には弱点などない。これ以上、この哀れな獣をいじめるのは無益だと思うのだが、どうだろうか？」

『わたしは遠い道のりをやってきたのだ』恐ろしげな声がありました。『手ぶらでは帰れぬ！』

「ふむ、それはごもつとも。ところで私は魔法使いであり、いささか魔法の心得があります。何かお望みのものはおありですか？

もし、この竜をお許しくださるのなら 何でも、とはもうしませんが 私に出来る限りの手助けをして差し上げるが、いかがでしょうか？」

『少し待てー！』

可愛らしい足音がして、虹色に光る眼が耳の奥に消えて行きました。

しばらくすると、竜が（彼にしては）小さな声で魔法使いにささやきかけました。

「おい、頭の中でひそひそ内緒話の音がするぜ。あいつら、二人以上いるみたいだ！」

魔法使いは何も話さず、ただ静かにという風に竜の鼻を撫でました。

さらに少し待つと、あの小さいが力強い眼差しが闇の中から戻ってきました。

『おい、魔法使い、お前は動物に変えられた人間を戻すもとに戻すことは出来るか？』

「お安いご用……ですが、私は今、この地を離れることができない身。かわりに良いものを差し上げよう」

そうやって、魔法使いは懐に手を入れ、透明なガラスのビンを取り出しました。

ビンの中に入っていたのは水のようにも、また泡のようにも見える不思議な物体。

真昼の太陽の光を浴びて、七色にきらめいております。

「さて、この世界の果てには山の王とも言つべき巨大な山があり、その山の上には太古の混沌をたたえた泉がございます。その泉の水にはあらゆる魔法を溶かし、呪いを消し去る力があります。そしてこれは、私が自らの手で組んできた泉の混沌。もし、竜を解放してくださいれば、ビンごとお渡しいたしましょう」

『でも……』戸惑いつつ語り掛けてくる声には、もう恐ろしい響きなど少しもありません。『わたしが外に出たら、その竜が一口でわたしたちを食べたりするんじゃない？』

「では、こう致しましょう」

魔法使いは竜の目を見て、優しげな声で言いました。

「竜よ。ここが潮時だとは思わないか？　ここで大人しく身を引き、降参すれば、お前はこの厄介ことから、永遠に解放されるんだよ」

「わかったよ」竜は弱々しい声でうなづきました。「降参する。俺の負けだ。もうお前が外に出ても食べたりしない。もう何でも良いから、はやく勘弁してくれよ」

その途端、竜の耳の穴からまずキラキラした髪の毛の女の子が続いて太った小人が次々に飛び出したではありません。

魔法使いは両手を広げ、笑いながら、或いは悲鳴を上げながら、落ちてくる二人を受け止めました。

「へえ、わたしのお父さまほどじゃないけど、貴方なかなかハンサムじゃない」相手の顔をまじまじと見ながらオパーレは言いました。「光栄に存じます、姫さま」魔法使いはにっこり笑って、お辞儀をしました。

「なんなら、わたしのほっぺにキスをしてもいいのよ？」

「では、お言葉に甘えまして……」

自分の頭の中から、何かが飛び出したとわかったとき、竜は目を閉じ、耳をふさぎました。

邪悪な小鬼がどんな恐ろしい姿をしているか、わかったものではありません。

ひょっとして、うっかり見ただけで、目が飛び出してしまうかも！

ところが、耳をふさいで指の隙間からこぼれるのは、おぞましい雄叫びじゃなくて、可愛らしいクスクス笑いじゃありませんか。

いったいどうなっているんだ？

ついに好奇心に負けた竜は目蓋をあけました。

そして目をひん剥きました。

「な、なんだ、お前は、さっきの小鬼はどこへ行った！ 地獄の馬糞はどうした！」

「お前が言っている、その馬のうんちってこれのこと？」

オパーレはにやりと笑って、大きなチョコクッキーをよく見えるように、かかげて見せました。

現実と事実が、目と耳から入って、竜の脳みそでがちんつとぶつかり、火花を吹きました。

「お、俺はチョコレートクッキーを持った女の子に降参したのか！

「？」

「ええ、それも普通よりずっと小さい女の子によ」おお、オパール  
の笑顔の意地悪なことと言ったら！

「あ、あんまりだあ。こんなの、酷すぎる……」

自分の強さが自慢だっただけに、よっぽどショックだったのでし  
よう。

お姫さまの言葉と笑顔にノックアウトさせられた竜は、その場で  
くらくらとよろめいた挙句、お山の斜面に頭をぶつけてひっくり返  
ってしまいました。

さすがにちよつとかわいそうになったオパールは、魔法使いの腕  
から下りて、てくてく竜の近くまで歩いていきました。

ランチに持ってきた大きなチョコクッキーを真つ二つに割ると、  
その半分を竜の口の中に押し込んだのです。

「どう、美味しいでしょ？ わたしのお母さま、料理上手なのよ」

「むにゃむにゃ、うめえ……こりゃ、あれだな。俺が前に食べたお  
姫さまと同じ味だ」

ああ、竜の余計な一言に、隣でお昼ご飯を始めようとしていたオ  
パールの手が止まりました。

そりゃ、どんな美味しそうなクッキーでも、自分と同じ味がする  
と言われたら、食べられませんよね？

「うえ……あんた、なんてこと言うのよ！おかげでお母さまのクッ  
キーが食べられなくなっただじゃない！」

怒ったお姫さまは、竜の頭をげしげし蹴りつけました。

ですが、大きさが違いすぎて、蟻に突っつかれたほども効きやし  
ません。

少しだけ仕返しに成功した竜は、鼻歌を歌いながら、クッキーを美味い美味いと味わいました。

食欲のなくなったオパーレはぷりぷり怒りながら、クッキーを背負い袋の中にしまい込みます。

と、お姫さまは魔法使いがあの子の年寄りの小人と話しているところを見かけました。

魔法使いは、小人の前で腰をかがめ、頭を深く下げました。

お城の騎士たちがオパーレのお母さまにするように、うやうやしい声で言いました。

「この世でもっとも大きく、また誰よりも小さな方よ。再びお会いできたことを光栄に存じます」

「魔法使いよ」深く染み入るような声で小人が言いました。「混沌の泉で生まれ変わったことにより、お前は再び、わしに願い事を言う権利が与えられた。これはこの世で、お前と竜だけに許された特権じゃ。何か、わしに頼みたいことはあるかね？」

「私の願いは唯一つ」顔を上げ、小人を見ました。「かつて私を導いたように、あなたさまが、あの子を導いてくださること、それだけでございます」

オパーレは、彼女にしては珍しく、静かにそのやり取りを見つめていました。

魔法使いと小人の間には、他の人間が口を挟んではいけないような、不思議な雰囲気があったのです。

そのとき、誰かがちよいちよいと、オパーレに触れてきました。振り返ってみると、竜がひっくり返ったまま、口に生えた髭の先で背中を突っついていてはいませんか。

「おい、おちびさんよ、魔法使いはさっきから、何一人でぶつぶつ

言ってるんだ？」

「何って、わたしの小人と話をしてるに決まっているじゃない？」  
オパーレは聞き返します。

「小人だって？」

竜は目を凝らして、魔法使いたちのほうを見ました。

竜の目は大きくて、鋭くて、風に舞うほこりだって見逃しません。  
しかし……。

「何を言っているんだ。あそこにいるのは魔法使いだだけだ。小人なんてどこにもいないぞ」

「そんな、それじゃ、あんた……」

驚いて、オパーレはもう一度、魔法使いたちのほうをよく見ようとしました。

小人がそこにいました。

お姫さまの目の前に、お鼻とお鼻がくっつきそうなほど近くに。

オパーレは悲鳴を上げて飛び退きました。

壁みたいに大きな竜の顔に張り付きました。

小人は笑いながら、その様子を見ておりました。

白いひげに覆われた口の前に人差し指を立てて、しーと言いました。

「その子は、まだこのわたしを見るべきときが、来ておらんだ。だから、わしが見えておらんのさ」

「あ、あなたは何なの？」震えながら、お姫さまは聞きました。

「わしはお前さんの願いを叶える小人じゃよ。だから、そんなに怯えんでくれ。なんなら、このまま、お城に連れて帰ってもいいんじゃないぞ？」

普通の女の子なら、ここで泣いて怖がって、もうお家へ帰してください、と言ったことでしょう。

でも、オパーレはつま先から頭のとっぺんまで、普通の女の子じゃなかったのです。

怖がるどころか、小さな胸の中で真っ赤なハートが、火をあげて燃え上がりました。

「冗談じゃないわ！ わたしの冒険はまだ始まったばかりよ。こんなところで帰ってたまるもんですか！」

「ほう、いい意気込みだのう。じゃあ、お次はどこへ行くんじゃ？」  
ちよつと楽しそうに小人が言いました。

「決まっているじゃない」

オパーレは胸を張って、小人の前に立ちました。

やる気がありあまって、お鼻から竜に見たいに湯気が飛び出しそうです。

「竜はもうやつつけたわ。お次は、お母さまやみんなを怖がらせてきた、あの人食いの怪物の番よ！」

まだまだ終わらない小さなお姫さまの大冒険。

はてさて、お次はどうなりますことやら。

第三話『お姫さま、怪物退治にでかけるのまき』に続く

第二話『お姫さま、竜をやっつけるのまき』（後書き）

なんというか、もう申し訳ありません。

更新すると言ったときに更新できないし、皆様のご期待を裏切ってばかりで。

ほんとにもう何をしているのやら……

でも、今月中に完結させると言う目標を目指して、できるだけのことをやっつけていきます、はい。



第三話 『お姫さま、怪物退治にでかけるのまき、まえ』（前書き）

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/st/sst.php?act=dump&app:cate=original&app:all=21573&app:n=0&amp;app:count=1
```

第三話 『お姫さま、怪物退治にでかけるのまき、まえ』

行き先が決まったときには、もうオパーレは走り出していました。一度決心したお姫さまは、雷も地震も怖くありません。ぼつぼつの火事やお母さまのお小言だって、へっちゃらです！ところが、走り出した途端、お姫さまの胃袋が抗議の声を上げました。

きゅるるるるる~~~~~……………

可愛らしいその音を、人間の言葉に翻訳するなら、こんなところでしょうか？

『へい、ご主人さま！ あつしを空っぽにしてどこへ行くんです？ お腹がスカスカじゃ、あんよだって動きませんぜ』  
ほっぺを赤くしてお腹をおさえるオパーレに、魔法使いが助け船を出しました。

「ちょうど、お昼時ですし、一緒にお食事などいかがですか？」

お馬鹿な竜の一言のせいで、お昼ご飯を抜いたお姫さまに断れるはずありません。

もちろん、デブの小人も大賛成でした。そして、食事の準備が始まりました。

お姫さまと小人は、働き者のコマネズミみたいに走り回って、たきぎを集めました。

竜が燃える息でたきぎに火をつけて、魔法使いがその火で皆にうちそつを振る舞いました。

串に刺して焼いたソーセージはカリツとしてじゅわあつ、チーズはモチモチのトロトロ。

その二つをパンに乗せて食べると、もう美味しくてほっぺが落ちそうになります。

「おい、おちび姫、お前小さいんだから、そのソーセージをよこせ」「やーよ、わたし、あんたのせいでお昼ご飯食べそこねるところだったのよ」

「俺なんか、お前のせいで朝飯、昼飯ぜんぶ食べそこねるところだったんだぞ！」

「お二人とも、このスクランブルエッグはいらんと言つのなら、わしをもらうぞ？」

取ったり取られたり、取りかえしたり……。

魔法使いは竜と一緒に食べるために、たくさんたくさん食べ物を持ってきました。

しかし、それも餓えた三つの胃袋にかかっては、ひとつたまりもありません。

二人と一匹が猛烈な勢いでおかずを奪い合っているのを横目で見ながら、魔法使いは口を動かす代わりに、指を動かし、何かを作っていました。

そしてご飯がすっかりなくなったところで、手を止め言ったのです。

「さて、怪物のところへ行かれるのなら、道案内が欠かせませんね」「道なら知っている……が、あそこは遠すぎるし、わしはもう一歩も動けんぞ」「食いしん坊の小人が丸く膨れたお腹をさすって言いました。」

「つまり、乗り物が必要なのよね。わたしたちを乗せて、怪物のところまで運んでくれるような大きな奴が」お姫さまは早くも目をキ

ラキラと輝かせております。

「おい、お前ら……」 竜は周りを見渡して「なんで、そろって俺の方を見るんだよ」

「決まってるじゃない。あんたに乗っていくのよ。まさか嫌とは言わないよね？」

もちろん、竜は大きな声で「いやだ」と言いました。

しかし、さっき言った通り、一度心を決めたオパーレの意思ときたら、動かざること山の如し、攻めること火の如しです。

また地獄の小鬼の声を作って、言葉の剣と槍を振りかざし、竜の心に猛攻撃をしかけました。

お姫さまにおどされ、魔法使いになだめられ、耐えに耐えること数十分。

ついに竜は疲れ切った声で言いました。

「も、もう一度、確認するぞ。お前を乗せてやったら、もう俺にちよっかいをかけないな？」

「かけないよ！」 元氣よくお姫さまが答えます。

「俺が寝ている間に、顔に落書きしたりしないな？」

「しないよ！」

「それから、たいせつな金貨や宝石を盗んだり、耳に爆竹やさそりを放り込んだり、目にトウガラシや塩をすりこんだり、俺の恥ずかしい寝言を言いふらしたりしないな！」

「しないしない」

なんだか、いまいち信用できません……。

でも、ほかに良い方法も思いつきませんでした。

ちよつとのあいだ、乗り物になるだけで、この小さな悪魔から永遠に解放されてるのなら、安いもんです。

「よし、俺の背中に乗せてやってもいいが、一つだけ条件がある。先におしっこをすませる！」

「なんで、そんな失礼なことを言うのさ！」お姫さまは怒って言いました。

「なぜなら、前に乗せたお姫さまが、俺の背中でおしっこを漏らしたからだ」

おくゆかしいレディーに向かって、おしっこをしろ、とはなんと失礼なケダモノなのでしょう！

ところが、竜に乗って見ると、オパールは本当におしっこをちびりそうになりました。

恐ろしさじゃなくて、嬉しさのせいで……。

今まで、オパールはお城の高いところを全部、制覇してきました。庭にある木で登らなかつたものは一本もありませんし、城壁には毎日の散歩道。

すぐに捕まって下ろされましたが、一番高い塔の屋根にだって登ったことがあります。

でも、竜の背中から見下ろす光景は、それらとは比べものになりませんでした。

手を振っている魔法使いの姿がどんどん小さくなり、最後には豆粒のようになって消えました。

巨人のように高かった木々は、あつと言つ間に草むらのようになり、苔のようになり、ついにはカーペットの模様のようになくなりました。

そして、ああ、世界は一枚の絵のように目の前に広がり、山が河が、草原が森林が、川が泉が、はるか遠くに見える海が何百と言つ色と光の洪水となって、押し寄せて来るじゃありませんか！

オパーレはもう、嬉しくて楽しくて、たまらなくなつて、竜の頭の上で飛んだり跳ねたり、たてがみを引っ張ったり、耳にかみついたり叫んだりして大暴れです。

竜はしばらくの間、むすうとした顔でお姫さまの乱暴狼藉に耐えていましたが、突然振り返って言いました。

「おい、ちび姫よ……」

そしたら大変です。

飛んでいる最中に、急に首の向きを変えたせいで、竜の体は空中でぐるっと大回転！

オパーレと小人は危うく、下の絶景へ滑り落ちそうになりました。

「な、何をすんのよ！ あぶないじゃないのさ」

「おー悪い悪い」と、竜の声にはちつとも悪びれた様子はありません。「ところで、お前、怪物を退治するとか言っていたが、本気なのか？」

「もつちろんよ。あんた、信じてないわね？」

「だって、お前、怪物のこと何も知らないだろ」竜は鼻で笑いました。「あいつの頭だけでお前の五倍はあるんだぜ？」

「でも、あたし、あんたをやっつけじゃない。あんたの目玉だけであたしの十倍は大きいわよ」

「あんなのズルしただけじゃないか……」竜は少し困った顔をして言いました。「俺はあの怪物のことを良く知っているぜ。あいつがどれだけ手ごわくて悪賢いかも……でも、お前は普通じゃないし、あいつも、このところ、ちょっと変だからなあ」

「変ってどんな風に？」

お姫さまは興味津々です。

なにしろ、これから退治しに行く相手のことです。

知っていることが、多いに越したことはありません。

「しばらく前のことだけど……あいつ、人間を食べなくなったんだよ。どんどん痩せてて、弱っていて、殴りごっこや噛みつきごっこにも付き合ってくれなくなった。最近じゃ、ほとんど一日中寝ていて、あまり動かないし、ぜんぜん喋らないし……。」

だからさ、万が一、万が一だぞ！ あいつがお前に降参したら、それ以上、酷いことするなよ。今のあいつは、もう危険な人食いの怪物じゃないからな！」

「あんた、竜のくせに、他の人の心配をしているの？ お母さまはあんたを慈悲もこころもない、物を壊して人を殺すだけのケダモノだつて言っていたわよ」

「お前のかーちゃん、酷いこと言うな。でも、まんざら間違っていないぜ。あの怪物は特別なんだ。魔法使いに会うまで、あいつは俺のたった一人の友達で、たった一匹の同類だったんだ。」

最近、俺たちは似ているようで、実は正反対なんじゃないかって思うこともあるけど……それでも、あいつが大事な友達だったことは変わらない。だから、俺があいつの面倒を見なくちゃいけないんだ。なんとつて、俺の方があいつよりずっとでかいし、喧嘩じゃいっつもこつちが勝っていたからな！」

「ふーん、つまり、あんたたちは兄弟みたいなもんなのね……」

オパーレは竜と怪物の絆が、ちよつとうらやましくなりました。

お城には、お話し相手の女の子はたくさんいましたが、同じ年頃の友達はい人もいませんでした。

それにしても、お母さまが選んだ女の子たちって、どうしてあんなに軟弱ものばかりなのでしょう？

チャンバラごっこがしたくても、木の棒で突っただけで泣き出してしまふし、誰も木登りや探検に付き合ってくれません。

お誕生日パーティーで、カブトムシ100匹が入った箱を開けた時

の大騒ぎと言ったら！

「ねえ、あんた、うちに来て、わたしの弟になりなよ。そしたら、牛も豚も食べ放題よ」お姫さまは、竜の頭をぺちぺち叩いて、言いました。

「やだよー、なんで俺が、自分より小さな女の子の弟にならなきゃいけないのさ」竜はぷいっと顔をそらし、そのせいでまたオパールたちが落ちそうになりました。

話している間にも竜の翼は、風のような速さで一行を運び続けました。

気がついたときには、オパールたちは次の目的地、怪物の森に着いていました。

森の中には、何年もの間、竜が着地し続けたせいで、大きな空き地が出来ていました。

竜はその空き地の中央に、お尻を落ちつけ、お姫さまたちを地面に下ろしたのです。

地に足をつけるや否や、さっそくオパールは森の中に走っていきうとしました。

しかし、そのとき竜が尻尾をのばして、お姫さま達を引きとめました。

「おい、ちょっと待て、お前に良いものをやるからさ」

「え、何、何をくれるのっ？ あたし、格好いい武器が欲しい！」

オパールは長いこと、小さなナイフじゃなくて本物の武器が欲しいと思っていました。

そして、飛んでいる間、竜の鱗に埋め込まれた色んな宝物に目を着けていたのです。



はたして、竜がくれると言ったのは、あのルビーをはめ込んだ立派な剣でしょうか？

珊瑚と翡翠をあしらった宝刀、それとも象牙と黒曜石でできた弓っ？

ところが、竜が鱗の隙間から取り出したのは、ちっぽけなナイフでした。

そのナイフは燃えるような紅い金属で出来ていて、黒光りする縄のようなもので、編んだ柄と鞘がついていました。

確かに綺麗ですが、それでも他の宝物に較べるとずっと見劣りがします。

「ナイフなら、もう持っているよ。わたし、もらうならそっちの剣のほうがいいなあ」

「馬鹿っ！」竜は顔をしかめました。「しっつれいなやつだなー。それは俺の鱗と髭でできた短剣なんだぞ。お前がばくばく意地汚く食べている間に、魔法使いが作ったんだ。いいか、この森にはでかくて、腹をすかした動物がいっぱいいるんだ。

お前なんか、入ったとたん、食べられちまうぞ。でも、動物は俺を怖がっているから、その短剣を持っている限り、どんな猛獣でもお前に近づぐことはできない」

「へー、これって鋭いの？」

「鋭いなんてものじゃないぞ。何しろ、俺さまの鱗だからな。鋼鉄よりも硬くて、絹よりもしなやか、その気になればダイヤモンドで刺身が作れるぜ」

そう言われると、試してみたくなるのが、人の性と言つものです。オパールは早速、竜の鱗の短剣で、近くに転がっていた石を切つて見ました。

はたして、竜の言う通り、石はほとんど手ごたえも感じさせず真

っつ！

しかも、その断面の美しさと言ったら、まるで鏡のようにピカピカではありませんか。

これには、ぜいたくなお姫さまもご満悦です。

「これはいいものだわ！　ありがとう、また会おうねー」

「冗談じゃないぜ、俺はもう、こんな目はまっぴらごめんさ」

夜のように大きくて黒い翼を広げると、竜は空き地から飛び立ちました。

空の上で、ちょっと振り返って見ると、お姫さまが手を振っているのが見えました。

ふいに竜の胸に、秋の夕暮れのようにわびしい気持ちか、湧き上がりました。

あんな鬼のような女の子でも、いなくなってみると寂しいもんだ。

考えてみれば、あいつは魔法使い以外、唯一、俺を怖がらなかったし、またあとで遊んでやって……。

いやいや、何を考えているんだ俺は！

せっかく、馬の真似までして、厄介払いしたって言うのに！

きつと、あのお姫さまのせいで、ちょっと頭がおかしくなっているんだ。

はやく正気に戻るために、魔法使いのところへ行つて、一勝負しよう。

うん、そうしよう！

激しく首を振って、頭からお姫さまのことを追いだすと、竜は魔法使いの待っている地平線の彼方を目指して、翼を動かしました。

空の彼方で竜が、小さな光を残して消えてしまいました。

オパーレは手を振るのをやめて、怪物の森のほうに向きなおりました。

お城の庭にある林が大人しい飼犬だとすると、始めて見る森林はまるで野生の狼です。

大きくて黒くて、不気味にうずくまり、毛を刈ってもらったこともなければ、お風呂に入ったこともなく、何よりものすごいにおいっ！

いつの間にか、お姫さまの隣から小人が姿を消していました。

きよろきよろ、あたりを探してみると、

……いました！

空き地と森の境目にある木の上で、小人は緑色の闇を覗き込み、溜息をついていました。

「やれやれ、見てごらん、すごい茂り具合じゃぞ。どこを見ても、葉っぱは葉っぱ、そうでなきや蔓や蔦ばかりじゃ。わしらが小さいとはいえ、ここを潜り抜けていくのは大変そうじゃ。あのやぶの中にでっかい虫がいないことをいのるばかりじゃわい」

「あら、大丈夫よ」オパーレはするすると木の上に登ってききました。「こんなこともあるうかと、あたし、編み物の習いごとを受けたいことがあるのよ」

「編み物じゃと？ それとこの地獄みたいな森とどんな関係があるんじゃ？」

言葉で答える代りに、オパーレは手近にぶら下がっていた蔓をつつ、さし出しました。

そして、小人がとっさにその蔓を受け取った瞬間……。

一気に飛びおりたのです！

「うひよおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

泣き声を上げながら、小人はお姫さまと蔓に引つ張られて、落ちて行きました。

落ちて、落ちて、落ちて、ついに下の茂みに届く寸前、伸びきった蔓がぴーんと張り、今度は上へ上へ昇っていきます。

もうちよつとで、てっぺんに登りつめようとしたそのとき、お姫さまが叫びました「あの蔓をつかんで！」

小人は言われるままに蔓を掴み、それから再び落下が始まりました。

「うひよおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

上から下へ、下から上へ、振り子のように、ブランコのように……。

お姫さまの雄叫びと小人の悲鳴を残して、二人はどんどん森の中へと進んで行きました。

何回、同じことを繰り返したのでしょうか。

腕がすっかりくたびれたころ、オパーレたちは森の奥も奥、陽の光も差さない、エメラルド色の暗黒の底にいました。

そこには森そのものと同じくらい古く、竜の胴体と同じくらい太い切株がありました。

小人はその切り株の根っこの一つに、崩れるように腰を下ろしま

した。  
息も絶え絶えに聞きました。

「お、お、おちびの姫さんや、お前さん、どこへ行くこうしてるんじゃないね」

「もちろん、怪物のところが決まってるじゃない」

「その怪物がどこにおるのか、わかっとるのか？」

「ううん、ぜんぜん！」

「そ、それじゃ、お前さん、行き先もわからず、わしを連れまわしとったのかっ？」

「行き先なら、わかってるわ」

オパーレは「どうして、こんな簡単なこともわからないの」という目で小人を見ました。

落ちないようにドレスのベルトに結んでいた竜の短剣を見せて言いました。

「いい、この短剣がある限り、怪物以外の動物はわたしに近づけないのよ。だから、森の中を探検していれば、あっちが勝手にわたしたちを見つけてくれるってわけよ」

「そういう問題じゃないんじゃないの……」

「大丈夫だって、わたし、うまれてこの方、方向を間違えたことがないのよ」

嘘のように聞こえますが、これは本当のことです。

小さなお姫さまの頭の中には、まるで小さな羅針盤や星座が入っているみたいに、正確に東や西や南や北がわかるのです。

この能力のお陰で、オパーレはお城のどんなに狭い隙間に潜りこんでも、かならず自分の部屋に戻ってくることが出来るのでした。

愛娘の特技を知ったとき、お父さまは「なんてすごい才能なんだ、

この子はきつと冒険の天才に違いない」と感動しました。  
ちなみにお母さまはとなりで「そんな才能いらぬから、3分間  
じっとしてほしいな」とこぼしていました。

小人はまだブツブツ文句を言っていましたがお姫さまはかまわ  
ずに歩きはじめました。

上を見上げると、複雑に絡み合った枝と葉が、大きな天井のよう  
に空をおおい尽くしています。

その深い緑色の闇の奥から、星のようにきらめく無数の眼差しが、  
おそろおそろこちらの様子をうかがっております。

竜の短剣の効果は抜群で、ほんとうにどんな猛獣も寄せつけない  
ようです。

でも、せつかく森の中に来たのにちよつと勿体ないな。

虎とか熊とか、せめてゴリラぐらい見てみたかったのに……。  
オパーレがそんなことを考えながら、歩いていたそのとき、

あ、足を引つ掛けました！

転びました！

それはそれはもう、みごとに頭からべしゃーっと……。

そして、転んだきり、起き上がりません。

気を失ったのでしょうか、いえいえ、良く見るとお姫さまの肩が  
震えています。

小人も口を抑え、顔を真っ赤してプルプル震えていました。

はるか樹木の上で、お猿の遠吠えが、掌に押し隠された小人の本  
音を代弁しました。

うひよひよひよひよひよひよひよひよほおおっ……

いきなり、お姫さまが起き上がりました。  
まるで、怒り狂った小熊のように、両手を突き上げ、がおおおと雄叫びをあげながら。

「何よ、これはっ！」顔が泥で真っ黒にそまって、ますます熊そっくりです。

「木の根っこのように見えるのう」笑いをこらえながら、小人が言いました。

「なんで、木の根っこがここにあるのよ！」

「そりゃあ、森に木の根っこがなかったら、びっくりじゃのう」

「ちがう！ わたしが言いたいのは、なんでこんな木の根っこが、わたしの足元にあるってことよ！」

「思うに……」したり顔で小人は言います。「これで、お前さんも、森で足元を見て歩くことの大切さがわかったじゃろう？」

小人の言うことはいちいちもつともです。

「ただ、それでお姫さまの理不尽な怒りが収まるはずもありません。」

根っこが憎ければ、葉っぱも幹も大嫌い！

痛みと憤りを込めて、罪のない根っこを、げしげし全力で蹴りまわります。

何よ、この憎たらしい根っこ！

よくもよくも、植物の分際で、わたしをころばしたわね！

でこぼこで、苔が生えてて、先っちょが爪みたいで、おまけにちよつと指に似てて……

……あれ？

お姫さまは蹴るのやめ、もう一度その根っこを良く見てみました。

じつくり眺めてみると、それは木の根と言うよりも、大きな手のひらのように見えました。

その手のような根がこの先には腕のような幹が生えてて、その幹の先にあるのは肩……。

ふいに、苔むした手のような根っこが動きだしました！

びっくりするような速さで、お姫様と小人を捕まえました。

仲良く悲鳴を上げるオパーレたちをつかんだまま、上へ上へと運んで行きます。

そのとき、切り株の表面にふた筋の亀裂が走り、そこから木漏れ日のような金色の光がお姫さまたちの上に降り注ぎました。

「ははっ、こいつはまた可愛らしいお客さんだな」

木の肌のように乾いた唇の奥に見える鋭い牙。

ヴェールのように全身を覆う、ぶあつい苔と蔓の奥から。

人食いの怪物がお姫さまたちに笑いかけました。

第四話『お姫さま、怪物退治にでかけるのまき、うしろ』に続く



第三話 『お姫さま、怪物退治にでかけるのまき、まえ』（後書き）

土曜更新のはずが、また一日延びてしまいました（タメイキ）

次の更新は、一週間後……ですが、もうちょっと早くなるかもしれません。

なお、余談ですが、本文の中で、竜は自分のほうが年上だと思いついていますが、

実は卵からかえった時間の差で、怪物の方が2、3年ほどお兄ちゃんなのです（笑）

第四話 『お姫さま、怪物退治にでかけるのまき、うしろ』 (前書き)

この作品は、舞さんのホームページ、Arcadiaにも投稿しております。

```
http://www.mai-net.net/bbs/st/
sst.php?act=dump&app:cate=origi
nal&app:all=21573&app:n=0&app:
count=1
```

第四話 『お姫さま、怪物退治にでかけるのまき、うしろ』

痩せこけ、苔むした怪物の指が、お姫さまたちの体をさらい、蔦草が這いまわる膝の上に、二人を降ろしました。

その間、オパールは悲鳴を上げるのも忘れて、怪物の姿に見惚れていました。

お母さまに聞いていた通り、怪物は恐ろしく

「まるで、森の王さまみたい……」

そして意外にも、美しかったのです。

巨大な枯れ木の玉座に腰かけ、緑のマントをまとい、頭には王冠のような雄牛の角。

静かにこちらを見つめる様には威厳が溢れ、熾火のように燃えるその目には、竜にはなかった深い悲しみと痛みが宿っていました。

「それで……おちびさん、お前は誰だ？ 何の用があつて、この怪物の森を騒がした？」

遠雷のように響く怪物の声に、オパールは我を取り戻しました。

と、同時にくすぶっていた負けん気が、またメラメラと燃えあがったのです。

怪物の膝の上をすたすたと歩いて近づき、拳を振り上げ、名乗りを上げます。

「わたしはオパール姫！ そして、この森へやってきたのは、あん

たをやつつけるためよ！」

「ほう、お前が、あのオパーレだって？」怪物は顔をしかめました。  
「なんとまあ、人はみかけによらないと言つか。でも、良く見るとその可愛いげがなくて、憎たらしいところが、よく似てるような…  
…あ、すまん。別にあいつの悪口を言ったわけじゃないんだ。へそを曲げないでくれ」

「何をぶつぶつ言っているのよ！」無視されたと思ったお姫さまが、怪物の腰を蹴りました。

「ん、気にするな。ちよつと、俺のお姫さまと話をしていたのさ。  
よく来たな、オパーレ。何も無いが、俺の膝のあたりに生えているコケモモでも食べててくれ」

やはり、竜の言った通り、この怪物はちよつと頭がおかしくなっているのでしょうか？

何を言っているのか、さっぱりわかりません。  
ますますご機嫌を損ねたお姫さまは、腰に差していた竜のナイフを抜き、怪物につきつけました。

「やい、化け物、これが何か分かる？」

「ふむ、それは……」怪物は顔を少し近づけ、においを嗅ぎました。  
「竜のやつ鱗か！ お前、あいつにあつたのか、どうやって、その鱗をむいた？」

「それは、もちろん、わたしが竜をやつつけたからよ！」

お姫さまは得意そうに、ふふんと笑いました。

「化け物、聞くところによると、竜はあんたより強いそうね！」

「まあ、そうだな」怪物はあっさり認めました。

「つまり、竜をやつつけたこのわたしは、あんたより強いってことよね」

「まあ、そうなるかもな」

「だったら、大人しくこのわたしに、降参しなさい！」

「わかった。降参しよう」

「無駄な抵抗すると言っのね、それなら……えっ？」

一瞬、オパーレは怪物が言った言葉の意味を、呑み込めませんでした。

怪物が逃げ出した場合、抵抗してきた場合、降参を渋って交渉をしようとした場合、など……。――。

この森に来るまで、相手に会った時に備えて、幾通りも作戦を考えてきました。

でも、こんな風に、いきなり降参してくるとは、思ってもみませんでした。

「あんた、わたしみたい小さな女の子に、そんなに簡単に降参していいのー！」

「だって、お前は俺より強いんだろ？」

「そ、そうだけど……」

「無敵の竜よりも強くて、抵抗しても、無駄なんだろう？」

「そうかもしれないけど、あんた、怪物としての誇りはないのっ？」

「実を言っとな、おちびさん」乾いた唇に浮かぶ、ほろ苦い笑み。

「俺は、もうすぐ死ぬんだ」

怪物の微笑みに合わせるように、木々がきしみ、呻き声をあげました。

深い緑色の樹海のどこかで、大きな鳥が翼を広げて、飛び立つ音が聞こえました。

お姫さまは怒っているような、困っているような顔で、怪物を見上げています。

「竜に聞いたかもしれないが、俺はもう何年も食事を取っていないんだ。今日は大丈夫だろう。明日も持ちこたえるかもしれない。だが、明後日には、もうこうしてお前さんと話をしていないことはない」首のあたりを指で叩いて「その後は、この首を持ちかえるなり、なんなり好きにしてくれ。ま、お前さんに俺の首が持ちあげられたら、の話だな」

「駄目よ！」お姫さまは声を張り上げました。

「駄目って何が？ 俺の首を欲しがっている奴は、山ほどいるが、お前さんほど運のいいやつは他にいないぜ」

「駄目なものは、駄目なのよ！」

小さな胸の中で、荒れ狂うこの感情を、なんと呼べば良いのでしよう。

ここに来るまで、長い長い道のりを越えてきました。

恐ろしい竜に会って、竜をやっつけました。

全ては怪物をやっつけて、お母さまを見返すためだったと思っていました。

今、この時までには……。

だけど、いざ怪物の首を差し込まれた時。

オパーレが感じたのは、言葉に出来ない、激しい苛立ちと失望だったのです。

こんなあつけない閉幕のために、ここまで来たわけじゃないのです。

では、今まで旅をしてきた、本当のわけとは。 。  
とそのとき、ものどかしさに地団太を踏むお姫さまの隣を、小人がすりぬけて行きました。

怪物の前に立ち、金色に光るその瞳を見上げ、にこっと笑ったのです。

「久しぶりだのう、化け物よ、このわしを覚えておるか？」

「お前は……」怪物が驚いたように眼を見開きました。「ペルラの言っていた小人か、今までどこにいた、どこから出てきた？」

「わしはずっとここにおったとも。お前さんが、わしに願い事をしたあのときのようにのう。覚えておるか、怪物よ。谷間の獅子に捧げられた男の子、雌豹の息子よ。」

お前がまだ怪物ではなかった頃、鷲の卵を求めて、崖から投げ落とされたことがあったな。そのとき、光と脚を失ったお前は、このわしに願ったのだ、どこか安全な場所に行きたい、この恐ろしい場所から出ていきたい、とな……」

怪物は眼を閉じ、小人の言葉に聞き入っていました。

その顔は、耐え難い、ひどい苦痛をこらえるように、歪んでいました。

やがて、思い出そのものと同じくらい深いため息とともに、言葉を吐きだしたのです。

「覚えている、いや、今思い出したのだ。だけど、お前は『やつ』じゃない。俺の願いをかなえたのは、途方もなく大きな巨人だった。その体は山々をはるかに越えて、背は星よりも高く、眼は月に並んで輝いていた」

「にもかかわらず、わしはここにおる」小人は首を横に振りしました。「今、このとき、この姿で、わしが願いを聞き届けた子供たちの最期をみとるためにな」

「もし、お前がああ巨人だと言うのなら、そしてまたペルラが見たというあの小人だというのなら……」

怪物は気だるげな様子で、顔を動かし、空を覆う緑の天蓋を見上げました。

複雑に絡み合う枝と葉は分厚く、金糸のように細い陽光を除いて、

空から降り注ぐ全てのものを遮っていました。

「叶えて欲しい願いがある。俺はもう長くない。だが最後に、もう一度、月が見たい。明日は満月……俺とペルラが一つになった、あの晩と同じ月を見ながら、死にたいんだ」

「気の毒じゃが」小人は残念そうに言いました。「願い事は一回きり。お前さんたちは、もうその権利を使ってしまったのじゃ」

「そうか……」

怪物は残念そうに溜息をつきました。

まだいま一つ諦めきれないのでしよう。

名残を惜しむように切ない眼差しで、頭上に押し掛かる自然の天蓋に見つめました。

「叶えてやれば、良いじゃない！」

と、側で二人の会話を聞いていたお姫さまが突然、話に割って入りました。

「最後の願いなんですよ、なんで叶えてあげないのさ？」

「何を聞いていたんじゃない、おちびの姫さん」小人は顔をしかめました。「願い事は一人に一つだけ、それが決まりなのじゃ」

「でも、あんた、魔法使いには二つも願い事を叶えてあげたじゃない！」

「あの魔法使いは、特別なのじゃよ」

「なら、もう一つ特別を増やしても良いじゃない！」

「そう、ほいほい増やしたら、特別なものも特別じゃなくなるじやろうが！」

さあ、口喧嘩をしたことのある人なら、お分かりでしょう。



怒っているとき、口にする言葉も、容易に人を傷つける凶器となるのです。

しゃべればしゃべるほど、顔も頭も真っ赤になり、投げつける言葉は鋭さと数を増し、最後には自分自身をも傷つけるのです。

そして、オパーレは怒っていました。

いまいち、得体の知れない小人に、自分の運命を振り回す正体不明の力に、とてもとても怒っていたのです。

「ケチンボ！」ついにお姫さまは言ってしまうました。

「な、なんじゃと、このわしがケチンボじゃというのかっ？」

「そうよ、ケチンボじゃなきゃ、何なのさ。あんたはお願いを叶えてくれる魔法の小人なんでしょ？ それなのに、一番お願いを叶えて欲しいときに、なんで何もしてくれないの」

「何でも叶えておるわけではない、それにわしが直接、願い事を叶えておるわけでもない。わしはその者の望みに到る道筋と方法を教えて、ちよっと手を貸しておるだけなのじゃ」

「それがケチなんじゃないの！ お母さまが言っていたわ、世の中には、願い事をかなえるふりをして、そのお願いを捻じ曲げて、人を騙してたり、笑ったり、魂を盗んだりする性悪の妖精や魔物がいるって……おまえがそうなんですよ。このケチンボのでぶつちよネズミー！」

「な、なんとということを」小人は怒るといふよりも、呆然としているように見えました。「わしは今までそんなことを言われたことは一度もないぞ！」

「お望みなら、何度でも言っつてやるわよ！」

小人は、言葉も出さずにお姫さまを「うぬぬぬ」と睨みつけました。

お姫さまもお姫さまで、負けずに「ぐぬぬぬ」と睨みかえします。

二人はしばらくの間、そうやって火花が出るほど、激しく睨みあっていました。

やがて、どちらともなく、ぷいっと眼をそらし、小人は怪物の膝の方へすたすたと歩いていき、お姫さまは怪物の足の付け根で、それぞれ座り込み、黙り込んでしまいました。

さて、このとき、二人の間に漂う、息苦しい沈黙を最初に破ったのは怪物でした。

小人とお姫さまの口喧嘩にじっと耳を傾けていた怪物は、二人が黙ったのを見計らって、指先でオパールを突つつき、話しかけたのです。

「なあ、おちびさん」

「わたしはおちびさんじゃないわ、オパールよ」まだプリプリ怒っているようです。

「じゃあ、オパール。俺のために怒ってくれたのは嬉しいが、正直、いま何が起こっているのか、さっぱりわからないんだ。お前がなぜ、怪物や竜を退治することになったのか、教えてくれないか？」

「聞きたい？」オパールは手足をもじもじさせて、言いました。

「ああ、ぜひ聞きたいね」怪物はにっこり笑って、言いました。

そして、お城の一室から、怪物の森に到るまでの長い物語を始めたのです。

オパールは手や足を振り回し、小さな体全部を使って、怪物に話しかけました。

小さな小さな自分が生まれた時のことを話しました。

優しいけど乱暴で、怒りっぱい上に過保護な女王さまのことを話しました。

そして、犬に変えられたお父さまと猫に変えられた爺やのこと、茨に囲まれた塔にとじこめられたこと、小人と出会って逃げ出したこと、竜退治のこと、魔法使いのことを次々に話しました。

怪物は良い耳を持っていました。

また、人の話を聞くことに慣れていくようでした。

オパーレが話をしている間、怪物はお姫さまと一緒にあって、分  
からずやお母さまに怒り、犬なってしまうたお父さまの身の上を  
嘆き、竜の間抜けぶりに腹を抱えて笑いました。「ははは、実に竜  
の奴らしいな。いやあ、その場になくて残念だったぜ！」

冒険物語は長く楽しく続けましたが、ついにお話のタネが尽きる  
ときがやってきました。

「……そして、わたしはここにきたのよ」とお姫さまは話を結びま  
した。

「そうか、なるほど。どうしてお前たちがここまでできたのか、よく  
わかったよ」と、怪物は頷きました。「でも、今の話を聞いた限り  
じゃ、お前、ちゃんとあの小人に謝っておいた方がいいと思うぞ」  
「どうしてよ……」お姫さまは不満そうです。

「オパーレ、お前は賢い。だから、自分が言いすぎたことは、もう  
わかっているだろ。あの小人が何者かわからないが、悪い奴じゃな  
いことだけは確かだ。

たった一つきりだったが、あいつは俺や俺のお姫さまの願い事を  
かなえてくれた。お前の願いだってちゃんと叶えただろ。俺たちを  
騙したりしなかったし、あざ笑いもしなかった。第一、お前、あの  
小人抜きでどうやってお城へ帰るつもりなんだ？」

「でも、あいつ、わたしの言うこと聞いてくれるかな？」ちらりと  
小人の方を見ました。

「聞いてくれるさ。お前が、ちゃんと心の底から謝ればな」

そしてもう一回、勇気づけるように指先で、お姫さまの背中を押  
したのです。

怪物に促されるまま、オパーレは立ち上がって、小人のほうに歩  
いて行きました。

「ねえ？」と声をかけました。小人は「ふん」と鼻を鳴らして、お尻をもぞもぞ動かし、お姫様に背を向けました。

ちよつと落ち込みました。でも、挫けませんでした。

なぜなら、こう言う時にどうすればいいのか、教育係の爺やが、教えてくれたからです。

それは爺やが、爺やのお師匠さまから習ったと言う、由緒正しい魔法の言葉でした。

まず背筋を伸ばします。

大きく息を吸って吐きます。

腰は申し訳ない心をあらわすように、きつちり曲げて45度。

謝罪の言葉は大きく「ごめんなさい！」

自分のどこが悪かったのかはつきりと「さつきは言いすぎたわ。

あんな酷い事を言うつもりはなかったのに」

誰に何をしてほしいのか、分かりやすく「でも、あなたの力を貸してほしいの。わたし、あの怪物の願いを叶えてあげたいの、自分でも何故だかわからないけど、あのまま死なせたくないのよ」

最後の締め言葉には心をこめて「だから、お願い、助けて！」

お姫さまの大きな声が、びんびんと森の中に響きました。

幅の広い葉っぱが一枚、その声に答えるかのように、空から舞い降りてきました。

小人はずつと押し黙っていましたが、葉っぱの一枚が鼻の上に落ちると、ついに観念したように息を吐いて、お姫さまのほうに向きなりました。

ふつくらとした手を伸ばし、「こっちにおいで」と差し招きます。誘われるままに、オパーレが近寄ってくると、小人はお姫さまの頭に掌を乗せて、言いました。

「良いかい……おちびの姫さまや。魔法は言葉から生まれ、言葉は心から生まれる。しかるに、望みはその心を動かす動力、全ての魔法と呪いの源泉なのじゃよ。」

だから、本当の願い事は、軽々しく口にして良いものではないし、同じように受け取ってもいけないものなのじゃよ。わしの言っておる意味がわかるかな？」

「ううん」とお姫さまは首を振りました。

「そうか、では一つ例をあげるとしようかのう。むかしむかし、わしは世界一高い山の上で、一人の女の子に会った。ルビーを、くしで梳いたような、それはそれは美しい紅い髪をした子じゃった。その子の願いは、お姫さまになること。わしはその願いをかなえる方法を教えたあげたのじゃ」

「その子は幸せになれたの？」

「いいや、その女の子は、望み通り、お姫さまになり、王さまのお嫁さんになり、自分もお姫さまのお母さまになった。だが、あの子がその短い人生で、幸せだと感じたときは、一時もなかった。」

なぜなら、その女の子は間違ったお願いをしたのじゃ。あの子の本当の望みとは、美しく、強い自分を誰かに見てもらい、褒めてもらうこと。ただそれだけじゃった。だが、偽りのドレスで自分を飾り、宝石と冠で顔を隠した結果、誰にもあの子の本当の姿が見えなくなってしまう。そのとき、あの子の願いは全て絶望に変わり、望みは呪いとなって、今も自分の子供たちを苦しめておる」

「馬鹿な子！」

小人のお話になりながら、オパーレは胸が悲しみに煮えたりを感しました。

「本当に馬鹿な子、わたしがその子の側にいたら、顔をひっぱたいて眼を覚ましてあげたのに、お母さまにお願いして、悪い呪いを全部解いてあげたのに……」

「そうだったかもしれんのか」オパーレの頭を撫でながら、小人は言いました。「ああ、そうなるかもしれんのか」

お姫さまの頭から手を離すと、小人は再び怪物の方に向かって歩き出しました。

「さて、小難しい話しは、置いておいて、次の冒険の話をしようか。う。ああ、待て待て、（また口を挟もうとしたお姫さまを止めて）人の話は最後まで聞かんかい。良いかい、おちびの姫さま、この森を西の方向へずうつと言ったところに、『おそろし谷』と呼ばれるところがある。

その谷の底には、『月酔い草』と呼ばれる植物が生えておるのじや。実は、この草は天から落ちた月の欠片でのか。月明かりを吸って百年に一度、花咲き、その美しさはまさに地上の満月、花の蜜には失われた活力を取り戻し、過去の記憶をよみがえらせる力があるのじや」

「ひょっとして……」話の筋が読めてきた、オパーレが目を輝かせました。

「そう、その『月酔い草』が花開く時と言つのが、まさに明日の晩なのじや」

「それって、すごいじやない！」

これこそ、一石二鳥というものです。

もし、その花を手に入れることができれば、怪物の願いを叶えたことになりますし、花の蜜で死にかけて怪物を蘇らせることもできるかもしれせん。

しかし、早くも走り出そうとしたお姫さまを、当の怪物が押しとどめました。

「おい、ちょっと待て。小人、お前が言っている『おそろし谷』っ

て、妖怪がわんさかいる、あの谷のことか？」

「そうじゃよ」と小人が言いました。

「なんで、そのことを早く言わないのさ」とお姫さまが言いました。「そりゃ、お前さんが、人の話を最後まで聞かないからじゃよ」小人はちよつと責めるような目で、オパーレを見ました。「今度はよく聞くんじゃぞ、『おそろし谷』は、流れ星や星屑を引き寄せer不思議な力があるのじゃ。たまに落ちてくる星屑を食べた動物は妖怪に変わり、今では谷間にはネズミ穴のなかのネズミより、たくさんの妖しいものがおるのじゃ」

「今まで、その谷に下りて『月酔い草』を取ってきた人っていないの」ネズミと聞いて、お姫さまは震え上がりました。

「二人おるのう、『雄々しいアルデ』と『麗しのペルタ』と言う勇者たちじゃ。『雄々しいアルデ』は自慢の剣を持って、谷を下り、寄せてくる妖怪たちをつぎつぎに切り伏せたのじゃ」

「それで、アルデは『月酔い草』を取ることが出来たの！」

「うんにゃ、妖怪の数は果てしなく、ついに『雄々しいアルデ』は力尽きて、妖怪に食べられたのじゃ。その話を聞いた『麗しのペルタ』は豎琴を持って、谷を降りた。素晴らしい演奏に妖怪たちは、うっとりしてペルタを通じたのじゃが……」

「その人も駄目だったのね」

「うむ、『月酔い草』を摘むとき、どうして豎琴から指を放さなくてはならんかのう。演奏が止まったその瞬間、『麗しのペルタ』は『麗しの夕食』になってしまったわけじゃ」

「つまり、今まで誰も『月酔い草』を摘むことが出来なかったの？」

「つまりは、まあそういうことじゃ」

お姫さまは動物みたいに唸りながら、怪物の膝の上をぐるぐる回り始めました。

何か、何か良い方法があるはずなのです。

さつきから、頭の片隅に、アイディアっぽいものが浮かんでいる

のですが。

臆病な生き物みたいに捕まえようとすると、奥に引っ込んでしまつのです。

ようし、それなら……。

えいやっ、とお姫さまはいきなり逆立ちを始めました！

「のう、おちびの姫さん、何やつとるのかわからんが、かぼちゃパ  
ンツが丸見えじゃぞ？」恐る恐る小人が聞きました。

「ちよつと、待って、お父さまがアイディアが浮かびそうなときは、  
こうしなさいって言ったから、むむむ、きたきたきたわ　　！」

ぴよこつと逆立ちをやめると、今度は猛烈な勢いで怪物の体を登  
り始めました。

真つ黒な毛皮から垂れさがる鳶をぐいぐい引っ張りながら、聞き  
ました。

「ねえ、怪物、『おそろし谷』にはお前より怖くて、でっかい化け  
物はいるの？」

「いいや、あそこにいるのは、小さくてよわつちい奴らばかりさ。  
俺が元気だったころは、よく竜と一緒に出かけて、苛めてやったか  
ら、みんな、死ぬほど俺たちを怖がっているぜ」

「そう、それは好都合ね。ところで、お前の髪の毛をもらいたいん  
だけど、良いかしら？」

「べつに構わないが、どうして？」

「あとで教えてあげる」

しゃべっているうちに、ついに怪物の肩まで上り詰めました。

オパールは背負い袋の中から、ナイフを取り出して、怪物の髪に  
切りつけてみました。

真つ黒なたてがみは、鋼鉄のナイフを跳ね返し、刃こぼれさせま



した。

つぎに竜の鱗でできたナイフで切って見ました。

すると、今度は野菜を切るようなざっくりした手ごたえと共に、一束の真っ黒な毛がオパーレの手の中に残りました。

その髪の毛を見て、満足げにうなずきながら、お姫さまは言いました。

「怪物、あんたはさっき、わたしに首をくれてやっても良いって言ったよね」

「ああ、死んだ後で、と言う条件付きでな」

「じゃあ、もし『月酔い草』を取ってきて、あんたを助けたら、わたしの家来になりなさい！」

「なんだって、どうしてそうなるんだっ？」と戸惑ったように怪物が言いました。

「首に較べたら、家来なんて小さな事じゃない？ それに『月酔い草』を持って帰ったら、わたしはあんたの命の恩人になるのよ」

考えれば考えるほど、これは実に良いアイディアのように思えました。

怪物を殺すことよりも、生け捕りにする方がはるかに難しいのです。

そして、生け捕りにするよりも家来にした方が、お母さまを見返すことができると言うものです。

鼻息も荒く、お姫さまは怪物に詰め寄ります。

「さあ、早く答えて、どうするの？」

「俺がお前の家来になって、一緒に城に帰るねえ」怪物は困ったような声で、言いました。「確かに、その方がお前のおふくろさんの度肝を抜けそうだし、面白そうだが……お前の言っていることは、一つ矛盾しているぜ、お姫さま、どうやって怪物で一杯の谷から、

『月酔い草』を持って帰るつもりなんだ？」

「あら、それなら大丈夫よ」

お姫さまは、にっこり笑って言いました。

「わたしに良い考えがあるんだから！」

第五話 『お姫さま、恐ろし谷をくだるのまき、うえ』に続く

第四話 『お姫さま、怪物退治にでかけるのまき、うしろ』 (後書き)

土曜日に体調を崩したせいで、更新が一日延びちゃいました(がく)

ところで、本文の中で、小人が話している女の子は、「あの人」のことです。

(これで、誰だかわかるかな?)

作者的にはお気に入りキャラで、いずれに、彼女を主人公にしたスピンオフを書いて見たいのですが、

果たして需要があるのかな…… (遠い眼)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7460n/>

---

Dragon Tail      ~ しっぽをかむりゅうのおはなし ~

2011年9月19日08時37分発行